

し。然でも那奴の實父の讐也。折を得ば討果して先考亞將の尊靈をいかで慰め奉らんと思ひ決めてありけるに。こも亦時節到來の本意を遂なん嬉しさよしかのあれどもこの儘にて那安同を討あらばわが所爲なるを人に知られてその科養家に及ぶべし。我が所行なるをなべて世の人に知らさぬせん術のあからずやいと腹に問ひ。肚に答て時移るまで謀慮を凝らす才子の憶斷やうやくにしてしかるべき計を得たりしかば。その夜竊に起出で牆を踰敷を潜りて相摸川の邊へ趣き。彼此と見互すに頃ハ夏の肇にて月の中旬の事なれば。若葉に曇る遠山の迎梅雨に水倍して濡れハ特にいと速かり。又只這方の岸邊に竹藪幾町敷繁立。陸とも水とも分かつた。さを五六間伐啓きて。野渡の船場にしたたり。這頭ハ總て人煙稀にて。路津管師の孤屋あるのこそ。が擔下にも河原よも重二三十斤可ある。葛石幾箇もあり。船俵人の立渡るゝに尻を掛させん爲なるべし。小六ハ其頭を得と見て。懸て宿所よかへり來つ。舊所より潛入てその身の臥房に赴く程に。遊行寺の鐘音つるゝを聞漏さすとて。俛れば。短夜ながら尙四更なり。小六ハ恠ても枕に就か。で早夜より準備したりける。袱包を又庭へもて出で。樹下なる石燈籠の内ハ隠して。燈籠の小障子を故のごとくに建たれば。これを知るものなかりけり。看官這袱包の内中なるハ何等の東

西ぞと尋るに。第一文字の短刀と那系圖と巻軸と金五十兩にぞありける。這日小六が思ふやう。英直夫婦の正首に守りて我身に傳へ授けし。父の遺金ハそが儘にて。二百兩あるなれば。今より後我が盤纏に匿しからぬに似たれども。尙底倉にて戰歿せば。那楊州を鶴に騎て。十萬貫を腰にしたりとも。亦何の益やハある。恠れば多く遺しとめて。これを養父母に贈りなば。この年來艱育の雜費の十が二三をも。贖ふ寸志となりなまし。多金の盤纏ハ要あしと尋思をしつゝ。形のごとく。那二包に金を三箇に分ちて。百五十兩ハ字紙よ包み。舊の如く衣箱の底に藏て。遺し措たる也。問話休憩却説小六ハその詰朝生平にハあらで起ても出ず。聞も得知らぬ人の名を。聲高やかに呼び立て。或ハ罵りうち笑ひ。或ハ歌ひうち歎く。千態萬狀限りもなく。立て見つ。又うち臥して。運りに狂ふ。騒しさに奴婢們ハ駭き。呆感ふて。主人夫婦に報しかば。著演晚稻も亦驚きて。共侶に走り來つ。叱りても論しても。小六ハいかでか鎮るべし。親子の分別なきごとく。著演晚稻を疾視。嗔りて。いよく罵り狂ふ。よぞ。傍痛き爲体全く乱心と見せしかば。晚稻ハ怕れて。身邊へ寄り。著演として。せぬ術なければ。猛可に醫師を招きよせて。容体を告て。療治を請ひしに。小六ハ醫

師を寄せ着す又甚しく罵りしを和解て脈を診んとそれをもいかにして手を把らるべき矢
 庭に醫師を突倒し登し掛て刺立の頭を三四ッ打しかば醫師ハ吐嗟と叫びつゝ辛くして逃退
 きしを著演別室に伴ふて賄話で藥劑を請れたる醫師ハ百會に唾を塗りて衣領搔合し苦笑し
 て賢息の病体ハ是乱心に疑ひなし尙狐の憑たらば櫛をもて煮し給へ然らば狐妖顯るべし總
 て箇様の難病ハ良醫といふとも即効を奏しがたきものなれば然とて治せずといふにあら
 ず只看病こそ専要なれおもふに賢息ハ幼年より手習讀書に氣を屈し給ひし故にもや候ハん
 痛症の人年久しく心を勞それバ這病ありこれを用ひて試給へと密やかに醫按を演て湯液五
 貼調合せしを遞與して臙て出てゆきけり然ども小六ハ湯液を飲まず強て薦んと欲それバ拂
 退け皆うち滾して醫療徒事になりしかば著演深くうち歎きて鎌倉なる名僧驗者に祈禱を請
 ひ加持を求めて心を盡さぬ事もなけれ也小六ハ夜も日も罵狂ひてどもすれば外面へ走り出
 んどしてけるを看病の僮僕等辛じて捉禁め夜着打被せて壓鎮めしも幾番といふとをしらす
 この故に著演ハ日夜看病の人を増してその身も務も廢とる追も間なく時なく看とりけり左
 右とる程にはや五六日を經にければ小六が狂乱稍鎮りて飯と喰ふと數椀に及べり著演晩稻

ハこの爲体ハ聊安堵の思ひを做して病苦の可否を杏るに小六ハ絶て應をせずそが僮僕を殺
 捨て仰反てはや臥たるが高射して久しく覺す恁而遣日も暮しかど小六ハなほも熟睡して快
 氣に見えしかば是則加持祈禱の法驗によるものあらんとて二親の歎ひいへばさら也看病の
 奴婢們相賀して懈るとにはあらねどもこの五六夜の程ハ睡ることを得ざりしに只今宵のみ静
 やかなれば更ゆく隨に思はずも各々睡眠を催して四睡の虎にあらねども或ハ猫兎を膝にの
 ばし或ハ背をうち合して寂然として目睡けり小六ハこれを見辨して竊に起て縁類なる戸尻
 を開き庭へ出ていぬる夜石燈籠の内ハ隠措きたる鞆包をとり出して腰に附つゝ足はやに
 後門に赴きて鎖採斷て戸を踏開き西を投てぞ走りける登時看病に侍りたる奴婢們ハ小六が
 後門を蹴開く音に驚覺て臥躰を見るに小六ハをらす扱ハ脱山給ひにけり趕上駐めよと罵
 騒ぐ諸聲に著演も晩稻奴婢之助も起て來つよしを聞て看病の怠りを咎むべき暇たよなき聞
 章を著演急に推鎖めて益なき穿鑿時もや移らん俺が門前より東西ハ岐路特に多かるに部を
 定めて趕留めよ離々の西の方ハ離々の東の方熟火にての走るに便なし兪挑灯を携よ心得た
 る歎快ゆきねと最も烈し主命に離か些も擬議とべき承りぬを應も果老はやどり川と挑燈

を片手に引提て裳を引折り草鞋を穿も穿ぬも有り。十名あまりの家僕們老僕小殿に至るまで。敷を盡して後門より走り出路を分ちて喘々を趕たりける。然程にその夜艾小六の故郷と後門を焚やかに推開きて西を投て走ると既にして一里あまり相摸川の頭迄今はや二十町ばかりもあるべからんと思ふ折から忽地後方に人言して趕來つゝ兩個の若黨字六番七と喚做るゝが齊一聲をふり立てその令郎にをいさすや留り給てと呼り呼掛透もわらせを趕近着を小六の信と見かへりて原來這人の迫りたり。俺が九才の時見し夢に緯の趣似たるかな些惡さすバ倒に足半續續まわらんすらんと思へば雲時停在て留んと近づく字六が腕を右手に抓んで引肩被ぎ斤斗を打して投たりける。修煉の拳法に魂滅るとよく苦と叫びし時にも怯まで進む番七を左に受て足を飛して破と蹴る蹴られて番七も云とばかりに胸を反して倒れたり。小六のこれを見もかへらず河原を投て走りゆく影の隈なき夜中の月を見白ても飯ぬ一文不通の字六の膝に手を掛けて立まゝそれを猶痛むあし手歌畫の何曾々々々似たる番七も長山の巖を扱して野邊に跋々態も兩樹の坐行松跋つゝもなほ令郎こや喃々と叫被の聲を嘆してもかきたり。然程に館小六の又只管に走る程に既にして相摸川の頭まで來にければ這路津場ある



野人野人
ふれん人還つて
能く恐れ

尻掛石の重二三十斤もあるべきをいとも輕げに搔抱さす。岸に繋ぎし渡船に閃りと乗て件の石を川へ水入と投捨て。又引かへして河原なる竹藪へ密と走り入りて。程よき所へ身を潜そめ。起来る人の形迹と且く這里に視ひけり。浩听に字六画七の後に來ぬる僮僕們とうち連れ立て。趕菟來つ。皆路津場に停立て。限なかりける月影にて且す限り彼此と變時眺めて却いふやうに。俺們が投られたる。那里より這里まで。に岐路とていなかりし。何所へいかせ給ひけん。見よ渡船の這方の岸に繋れたる儘あるれば。波濤を踏て流を涉り。仙人ならせべいかにして。前面へ赴き給はんや。不思議の事もあるものかなといふに。衆皆諾なひていひる。如く寔に然るなり。こゝにてものを思はんより。彼孤屋を敲き起して。路津筋師に咨なば。萬に一知るよしあらん。然りて。雖がて。兪共侶に件の門邊より立よりつ。連りに門をうち敲きて。喃些ものを問ひまうさん。俺們の狂人を趕菟來つるもの也かし。今這川を西のかたへ。渡せしもの。あらざるや。屋よ。喃々と呼ばせば。裏面より一聲。應と答へて。項之して起出て。戸を推開く。別人ならず。這里の路津を成る翁なり。衆人を左見右見て。各々問る。と。昨夜河へ渡さぬ。地方の法度を犯して。何人か。前面へいくべし。日暮てより。目今まで。然るといふ。あければ。問れて。思ひ合せるよしあり。今より。些

先つかた。俺門邊へ驚しげに。人の走る足音したり。こゝろ得がたく思ふ程に。何にかありけん。氷音の水入と聞へて。其後の異なる事も。あらざりき。おもふに。各々に趕れたる。その狂人のこゝまで來て。身を投たるに。あらせや。といふに。衆皆駭駭して。その大變になり。なり。什麼何處より。身を投て。流に沈み給ひけん。逃ちからずや。皆來て見よ。と。罵る。字六畫也。們と共に。路津筋師へ立出て。水際より。ゆきつ。月光になほ挑燈を照し。添て。そこら隈なく。索るに。繋ぎたる船の内に。庭草履片足あり。只これのみ。にあらすして。船より。船底まで。盪せし水の。いまだ。乾かき。這光景に。衆評。一この這船より。河中へ。身を跳らして。遣られし時。飛走水のか。りし。ちらん。庭草履にも。目覺あり。是則。那阿人の。庭より。這里まで。穿めて。來て。脱捨られしに。疑ひなし。さても。く。と。ばかりに。駭。悼みて。わくよし。も。さく。兪。惘然と。早河の水と。眺て。鶴立む程に。著演の。小六が。事の。心も。ど。なき。眼りも。な。ければ。小。断に。挑燈を。照して。晚稻と共に。這筋筋の。長き。嚙を。芋環の。と。ると。い。なし。に。尋來つ。河原に。評議を。凝したる。衆人を見て。聲高やか。よ。その。字六畫七。們ならずや。俺の。只。願。小六。が。うへの。心に。掛りて。堪られ。ね。居つ。つ。便り。と。俵ん。より。出。て。見。ば。や。と思ひ。ぬ。る。歎。き。の。か。あ。じ。吾。妹。子。も。俱。に。といふ。を。禁。め。か。ね。て。出。ても。人。に。遭。ざ。れ。ば。月。明。き。夜。も。干。ゆ。る。の。闇。を。迎。り。て。こ。ゝ。ま。で。

來つるぞやといへば、晚稻も目を拭ひて、やよや宇六よ番十們よいまだ小六に遺ざる歎と問ひつゝ夫婦共他に走りてはやく近着ば衆人も皆態をしつゝ左右に別れて立迎へたるをが中に宇六番七の進み出腰を折めてこの竈公候かけて奥さまもよくこそ遅々來ましたれさうも苦しき事ながら令郎の這川の氷屑とならせ給ひにさと報るを夫婦の即果を讀み讀みしつ聲ふるのしてそを汝等の見つゝ知りつゝ放ちて死かそとやのある詳に告よいかにぞやと辭せぬしく問れたる宇六番七の頭を搔きて叱らせ給ふの路次の始末を知らせ給ひぬ故にこそ俺們兩名のいはやく橋に南郷の頭にて令郎に起着まつりて推留んどしてけるにその船と夜叉の如く搔抓み引着て右と左へ三間あまり斤斗を拍して投給ひしかば此船俱に駭うち扱かして起んとせしに足立すその間に令郎の這方を投て直走りに走りて見ぬをなり給ひき折から畑平畔蕪等も後走に來よければよしを報苦痛を忍びて共に起着奉り這の河原まで來て見たるに寂寞として人影のあらき因て這路津成る翁を連りに呼起して箇様々を問ひしに夜河の渡さぬ制度なれば前面へ渡せし人のなけれど今より些し先の程急々の事ありけりど報られたるに胸うち騒ぎていよく疑念の盡されば這翁さへに相伴ふて海河原を彼此と索

ねまおらせたりけるに果して翁のいへるに違ひは是樹せ船の内に令郎の脱捨給ひし處草履半雙あり又舷より船底にぞ濡れたるは是入水の時飛走水の掛りしあらんこれらより令郎の既に水屑となり給ひにきとおもひ決めて候也と辭ひとしく眞實だつて報るを聞けバ六日の萬浦十日の菊になりたる晚稻のよいと聲立て泣くを禁る着演が泣ぬ泣くに淵増て千萬無量の心の哀み亦やる方もなかりしを思ひかへして聲高やかに證據分明なるをもて汝等が推量の違ふべきにあらねども然バとて手を空くしてうち眺めをとるとやのある縦小六の病痾によりて不覺に入水したりともこの年來習得たる泅水に技あるもの也島に一ツ急流を凌ぎて前面へ渡せし歎然らざとも亡骸だに涉猶らで空に已べきや這方の岸こそ竹藪のまなれ船もて西の岸へ渡して索ねて見せやと敦園を路津當師の推禁めてその宜はるとあるがら這早川の皖姑峯より這方に類多わらぬ急流で候にいぬる比の霖雨よて水波毎に十倍して船尙自由に遣がたかり然るをいんや申さんや佐々木椋原なりとも馮沙とべうもあらまぬるよりはやく推流されて瞬間に幾十里か流され給ひしに疑ひなしといふを著演見かへりて然りとも後々まで遺恨あからん爲なれば這儘僕等を船に乗して前面へ渡し案内をして

索られなば悲しからん。夫賃の些も厭はせ。我の野上史也と名告るを聞て、路津篙師のさらに又
 一議に及ばせ。原來の慈悲の聞えある。藤澤の大人でをいせしよな。這河原への遠からぬ。南郷の
 地頭でをいせると。夫賃を給いらんや。愈快乗せ給ひねといふに。衆皆心得て。主人夫婦が將て來
 つる小舟も俱に散動々々と。齋一船に乘しかば。路津篙師の纜を解つ。棹を操りて。辛くも前面
 へ渡しけり。著演是を目送りて。晚稻と共に身邊なる。墓石に尻を掛て。那等が還り來るまでとて。
 立も得去らて在りける程に。晚稻の今宵看病的奴婢等が。由斷をこひ出て。復らぬとを。探返す。正
 木の葛根の絶て。長き別れになりける。歎とて。人を恨みの。悔吝。愛惜。嘲言に。果しなかりしを。著
 演禁め。焚して。その又愚痴の諄言也。知らせや。小六の総角より。その心探泛々。あらせ。才も器量も
 千萬人に。立提りたればとて。文學武藝兩ながら。其妙奥を極めしに。思ひかけなく。狂乱の劇疾に
 犯されて。逝て返らぬ。道河水に。身を渝めし。前世の約束事でありけんかし。今こそ。諦せ。那英直
 の。俺が年來の相識。あらせ。況迭に。義を結びて。俱に異姓の兄弟。なりにしと。夢にだも。身に覺
 へなさと。なるを。英直が。臨終に。其妻母屋に。箇様々々と。言し。俺を。頼ん爲のみ。這故に。英直が。俺
 に。送りし。書簡に。一寸の字も。寫れず。威素紙にて。ありし也。事情を。猜するに。英直年來。我が。兼愛

の趣を傳聞て。世に。憑しく。思へども。素より。我と。一面の。交りなければ。恚々といひ。よるよしのな
 き。故に。只妻にのみ。箇様々々と。いひ。誘へて。妻と子。を。我に。寄せる。よ。空緘なる。素紙をもて。せし。ん
 わが。必よく。その。意を。猜して。辭。いで。需に。應ず。べし。義氣ある。よし。を。知れば。也。この。故に。我も。亦そ
 の。假言を。真として。渾家に。だに。も。機密を。知ら。せず。九ヶ。年。心を。盡したる。意中。の。情義。の。けふ。一夜
 艾に。皆。書簡。となりし。憾。渾家が。獨。悔々と。歎。く。嘲言に。千萬倍。の。慷慨。しき。と。限り。も。あら。ぬ。と。死
 生。の。命。あり。今。さらに。惜。め。ば。と。ても。及。ん。や。那。英直。の。新田。の。餘類。脇屋。の家。臣。なる。よし。の。我。初。よ
 り。こ。ろ。得。た。れ。ども。小六。の。英直。夫婦。の子。ならず。是。則。その。亡。君。義隆。朝臣。のおん。子。也。この。義。バ
 かり。の。い。ぬ。る。日。まで。我も。つ。や。く。知。ら。ざ。り。し。に。い。ぬ。る。日。花。水。橋。より。將。て。來。つ。る。目。四。郎。とい
 ふ。破。落。戸。が。懺。悔。に。よ。り。て。不。憶。這。實。説。を。得。た。る。也。那。目。四。郎。の。九。ヶ。年。前。假。名。川。の。客。店。で。英。直
 が。病。中。に。母。屋。に。遺。言。せ。し。よし。を。料。ら。せ。竊。聞。した。る。に。よ。り。小六。が。素。生。と。知。り。ぬ。とい。ひ。に。さ。然
 る。に。當。國。の。眼。代。ある。藤。白。隼。人。正。安。同。の。彼。様。々。々の。事。に。よ。り。年。來。我。と。快。ら。せ。心。に。刃。を。磨。ぐ。も
 の。なる。に。那。目。四。郎。が。恚。々。の。事。あり。し。時。安。同。に。件。の。機。密。を。告。し。と。ぞ。安。同。これ。に。便。り。を。得。て。小
 六。の。さら。也。我。も。亦。逆。謀。あり。と。讒。訴。して。その。宿。怨。を。復。さん。と。謀。ると。既。よ。急。也。然。ば。と。て。義。に。背

きて。我焉を命を惜ん素より野心なきよしを申解ども死れずん。その夫までの事ながら小六の
 脇屋の公達なりきと聞ていよいよいとをしく英直母屋の孤忠節操感するにわまりある者
 を我身と俱に非命に殺さばわが年来の博愛氣節も只這一事に虚名となりて死して冥土黄
 泉にて英直夫婦も何とかいはん事のいまだ起らぬ先に小六を他郷へ落し遣らんと思ひしか
 どもその事と告るにいまだ暇もあらで入水の迹にたづね來し遺憾さの言語にも筆にもかさ
 ぞ盡されぬ愛患悲歎愛哀苦勞の心衷いかならん察し給へといひつゝも目を展開く眞實深
 意世に又類ありがたき情由を初て聞く晚稻の思ひがけなやとばかりに慰めかねていどいさ
 ほ夜川の氷と堰とめかねし涙のやる瀬なかりける身の愛ふしや吳竹の敷に久しく寐ひたる
 小六の思はず養父母の密談密意を洩聞て且驚き且歎く心ひとつに思ふやう我が大人の俠氣
 義節人の及ばぬ所にて今にはじめぬとながら空緘なる素紙を受けてその意も悖るとなく素
 より知己のれもうちして我身を養ひとられし患を共にし災を分つといひけん往古の游俠
 義士にも類罕也これらの由のわが姪母すら知らで只願亡夫の義兄弟ぞと思ひしかば況や我
 へけふまでも知るよし絶てなかりしに又遭がたき別及びて重きがうへになほ重き思と情

の縁由を外ながら聞く這身の薄命實の親にも異ならぬ九ヶ年以來養育の親に一日も孝行
 らしく仕へ得せで偽りの横死を示すの親と養父の仇を殺して那禍鬼をうち穢んと思へば
 也允させ給へといへばいので苦しき胸よのみ思ふころをかき口説つゝ掌合して伏拜
 めども影に隠れて叢竹の繁さが下の物思ひ届かぬ節も短夜のはや暁がたにさるまでも感涙
 の外さかりけり浩處に字六書七の衆人と共侶に又船より乗りて道方の河原に還り來つ却
 著演に報るやう仰付られたるごとく前面へ渡して部を定め陸をも水をも涉獵しかども令郎
 の亡骸も生骸も見へぬすといへば又路津篙師も著演晚稻にうら對ひて嚮にも既にまうせ
 し如く毎より水の高ければ石をも流す早河も身を投じ人の亡骸を索ね給ふの無益也且々還
 らせ給へかしといひれて本意なき野上夫婦の嘆息しつゝ勞ふてやうやくにして身を起せば
 明はなれゆく横雲の間より名告る杜鵑冥土の鳥と聞からにわが兒を頼む死天の旅ころ殘
 の月影も共に流るゝ河水に雲時廻向の彌陀唱名親の棄ねぞ子の敷に在りと知らぬば吳竹の
 世の愛事を身ひとつに思ひ比べて形なき夢路を辿る心地して覺ぬ迷ひの夢からぬ涙は染
 ん兩袖の朱をば奪へ紫の衣後れたる藤澤の宿所を投て衆人を俱して徐々還りけり』然程に

著演あきのはのその次の日もつぎの日も人を相撲まがみ川の頭はしらへ遺なげして小六が亡骸なきがらを索たづねしかども些ちとの便びん宜よしもあかりしかば縋むかに思おもひ絶たれども里人等さとらに亡骸なきがらを索たづねたりといひ知して小六が渡船わたせに脱捨ぬきたる半隻はんせきの庭草履にばざりとそが儘ままに柩ひつぎに斂あめて菩提達摩ぼだいだまの示寂じしやくの後棺内のちのつぎのうちに半隻履はんせきりの外ほかなかりきといふ故事ことをおもふもいとゞ不樂わびしかるべし恚いか而して著演あきのはの小六が亡なせしその夜より第五日の黄昏たそがれに件くだんの空棺からつぎを擡もたせて遊行寺ぎやうぎんじへ送り遺なげせし程ほどに藤澤南郷ふじさわなんきやうの里人さとらのさら也なり五里六里四方ごりりくある遠とほき村落むらのものまでも傳つたへ聞話かたわ續つぎて吊送つるせうせざるもなかりしかばさしも廣ひろき遊行寺ぎやうぎんじの本堂ほんだうも客殿きやくでんにも所陔せきまで聚つどひしを二千餘名ふたごひやくにじゅうと記しけり這この施主せしゅの野上奴婢ののあまひ之助のすけと五六個ごの所親しよしんあり導師だうし並ならび大衆しゆへ布施ふせなども英直母屋ひであきむらを安葬あんざうりし時より一入心しつしんを用ひて法筵ほふぜんとべて叮嚀ねんねう也著演あきのはの那日かのひより則嫡子すなはちしの忌服きふくを受うて喪もに籠こりたる程ほどにひとり心に思おもやう小六の不慮ふりよに世を去りたれども安同あんどうのなほ飽あきして鎌倉かまがらに還かへるの後のちたくみしごとく讒訴ざんそして我われを亡なさんとこそ謀はからめ遮莫しやくばく小六こくが在あらずありて彌々ひやくひやく怖おそるゝに足たねども倘た檢宅けんたくをせられん折をいぬる日目四郎ひつめしやうに聞きたりし脇屋わきやの家譜かふと菊きく一文字いちもんじの短刀たんたうを他ほかに見みられなば事ことひづかしくありぬべしと隠かくせむやと尋思しんしをしつゝ妻つまにも告つげず只ひとり小六が子舍こやに赴おもむきて

彼此たがひと搔撈かぐるに然しかる東西とうせい絶たてなかりしかばいよく疑訝うたがひりて鍵かぎをたづね衣箱つちばをひらきて内中うちなる衣きぬを出だして見るに多おほく母屋むらが像見かたみの衣きぬにて那かの誰たれへ這これへ某たれへと小六が手にて寫ししたる紙牌かみを附つたるあり登時あきのは著演あきのは思おもふやう是等これらの衣きぬ小六が母の服分ふくわけの紀念かたみにとて奴婢等ひなびらにわから取とれんとて豫あり恚いかれして措おけんものを痛いたましやその服分ふくわけにあふよしもなき人どありし夢ゆめの跡あと筆ふでの蹟あとさへ母も子も歎なげきを遺のし紀念かたみこそ今いま空あなれこれあゝの忘わるゝ際ひまもあるべきに忘れがたき愛惜あいしやくの迷まひよこそと胸むねにのみ弱よるこゝろを獎ほめてなほこれ彼と取出とり見れば字紙あに包かみし金かねさへありて金子かね一百五十兩ひゃくごじゅうご家尊かぞん家母かぼ刀自たうじへと記ししたり訝うたりながら封皮ふうひを折くきて僕おへ見るも數かずも違ちがはず什なもいかにして這こ金を小六の藏置あたりけん疑うたふのみにてこゝろ得えられなきなほつくと思おも惟たるにこゝ英直ひであきの遺金いんぎんよて艱苦かんくの中に用つかひも減へさず只幼君おとこの爲ためよとてその妻母屋つまむらと遮與しやくせし歎母屋なげむらも年來ひな秘措ひかくさしを身後しんごに小六が見出みだして我われと晚稻おしほへ亡母親なげむらの紀念かたみ也とて贈おくちと思おもふて記ししたきにけん是をれもひ彼かれを思おもへば忠臣しんぎん義子ぎしの用意よういに格別かくべつ英直母屋ひであきむらの幼君おとこの爲ためにと思おもふてこれを用つかはず小六の恩おんと義ぎの爲ために亦また這こ金をみづから用もちはず前後ぜんご兩度りうどの安葬あんざうと並ならびその身を養育やういくの恩おんに答こたへる紀念かたみ金かね竟つひもその身に要いす

なき東西となるべき事と豫より覺期の所爲にあらざといふとも虫が知せて寫遺しけん十三
 言の遺墨ハ寸壁年も縦に十七歳のしかも夏毛を一期としたる筆の命毛短さよ嗚呼義なる哉
 小六が用心隠慮忠なる哉館氏夫妻只是主従一對の賢才英智の幸なきハ天平命乎造物者の惜
 て年を奪ひし歎任せぬものハ死喪の憾悲もかなとうち出て音よこなかね夜鶴の子ゆゑ
 に感ふ親心堪ぬ歎きをやうやくと思ひかへしつ眼包を拂ふて金を包みし一枚の字紙と徐に
 引伸して見ればこも又小六が筆也。口手習のやうにしてわれも見きやそ島蔭よしほひかた
 かそみのひまのここのあらいの助則となん寫したる是將てゝろの傳がたさに意中にしバ
 ノうち吟じて見れば則折句にて五七五七の句の上下にわきやよしたかのこぞといふ一十
 言を措たる也。こゝに至て著演ハ又その才に駭歎じて且感ずると半時ばかり思ひずも手を額
 に加へて然也小六ハ名將の子孫也しを我が養嗣ふなられにけれハ竊も羞て這筆遊に及べる
 ならん那目四郎がいひつるとも是よていよ疑ふべからず又這小六が詠草に名を助則と
 寫せしハ適會祖義助卿の諱の一字を取たる也今茲ハ必額髪を剃して佳字をこれ彼と撰て名
 をも花押をも定得させんと思ひしかども初秋までハ母親の服中なれば黙止せしよ他いちは

やくみづから撰みて恁名告りしハせめてもの本意に協ふに似たれども名のみ遣りて返すべ
 き人しなれば何にせん紀念の金こそ憾なれ益なかりきと嘆息の聲ハ波さぬ襖戸の板厨を
 やをら又推開て衣も金さへ舊の隨に衣箱に入めてなほ隈もなく又那家譜の巻軸と短刀を索
 ねしに似たる東西だよなかりしかばこれのみ疑念彌増して那目四郎が恁々といひつるハ虚
 談歎然らずハ見たがへ聞愆し歎或ハ母屋がはじめより人見られん事を怕れて遠からぬ山
 の石室など秘措きたるにあらざる歎思ふのみにてを問んよすがなければ多の山に柚木を
 摧きて花を求め夏の池に水を掬て氷の厚を搦るに似たりこも益なしと咳きて却晚稻にのみ
 箇様々々と是等の事の趣を具に尋さ示せしかば晚稻ハ聞つうち歎きて連りに袖を濡した
 る事情をまだ知らぬ奴婢之助すらともすれば小六が事を思ひついでて鬱々として樂まざ過
 ぬし事をいひ出て親を泣しつ泣もせし童蒙心もわかれあり然程ハ館小六助則ハ相摸川原の
 竹藪蔭に晝ハ躲れ夜ハ出て密々ハ彼此人の風聞を探聞くと五六夕に及ぶ程に著演ハ小六が
 亡骸を索得たりといひ做して遊行寺へ安葬たるその事の爲体巷談街説異同かく既に正かに
 問はしかば心安しと思ひつハ竊に相摸川をうち渡して小田原の里に赴くものから嚮に宿所

を狂ひ出し。その折の儘にして臥被ひとつを着たるのみ。夜討の準備あるとあければ朝市り
 けて骨董店なる故衣を買んとて。彼此と涉獵る程に尙巳時可なる品革威の身甲と薄鎖の甲手
 臙盾と長二尺二三寸なる大刀さへ一口ありければ。請取て扱て見るに無銘なれども夏なほ寒
 く。燧刃の勾微妙にして露を合る朝の櫻の眞盛なるに異ならせ。撃石をも劈くべき良刀なら
 んと思ひしかば衣共俱に件の武器を皆悉買とりつ。人なき處に赴きて心しづか身固めた
 る。出立さこそと想像るべし。第一文字の短刀に件の大刀を佩添て。那巻軸の袂に包て腰に結着
 その嚮方より潜やかに底倉を扱ていそぐ程。樹下暗き麓路の脊の方に八わりて。やよ屋野上
 の令那等せ給へと呼かけけり。此は何者なる人ぞ其の編を續き巻を易て第二集の簡端は解
 分るを聴ねかし。

開卷奇驚俠客傳第一集卷之五終

開卷奇驚俠客傳第二集卷之一

第十一回

深林に孤俠意衷を訴ふ
 山莊に衆僕舊功を諍ふ

再説 館小六助則の父義隆の讐敵藤白年人安同と今宵必撃捕て義父著演の枉難さへに。只這
 一擧は拂んぞと豫て謀りし孝心義胆の智慧も武勇も健能の夜撃の打扮精悍しく。菟姑峯投て
 趣きたる時に應永十八年 辛卯夏四月二十四日の日暮時に不知案内ある山里越て羊腸なる
 樹の下蔭も迷ぬ武士の道直き胸に葉も小篠原苔滑に薄き暗山路を登りゆく程に忽地後方に
 人わりて。やよ喃野上の小官人等せ給へと喚かけける。是にぞ小六の驚きながら些も諜ぐ氣色
 なく厥方を倍と見かへれば。是則別人ならずいぬる日藤澤なる宿所の庭にて。那密談を竊聞せ
 し折面言なる目四郎也。目四郎這日の打扮の尙巳時許なる黒染なる小妻木綿の夾衣を裾短に
 裾狭て柿染なる三尺帯を氣海の頭に締びたる帯の萌葱の太絨絹に紺の裏脚草鞋甲脚袴も對
 の染木綿黃銅繩の圓長脇差と鎧降りよ佩たるが左手に引提し管笠を遮くし。搔遣捨てうち合
 笑つゝ手を揉つ腰と屈めて快歩よ小六が身邊に近付たり。小六のムぞと知る者から思ひがけ

なき事なれば故意得しらぬ面色して今喚被けし和郎ある歎抑和主何處の人ぞと問ば
 目四郎聲を密めて否氣づかひしきものにはあらせ小可の這頭にて客店の目四郎と喚做と無
 頼の博徒ありしにぬる比故ありて大老爺又教訓せられ魂胆を入れ易てれん方人にあり
 しより密議を恐れ奉りいかで御身の先途に立て請たる供恩徳澤に答んものぞと思ひし事の
 空となりたるかん身の落命世にさき人と思ひさや恙もあらざ在さんとのぞばかりにして事
 情を詳し告申さずのあは訝しく思されん樹蔭へ立寄給へせやといふに小六の一議に及ばず
 然りとして懸て先に立て小篠踏わき細道へ一反あまり退きて株に尻をうち掛れば目四郎も亦
 跟て来つうち朝ひ跪きて四下を見かへり喃小官人嚮に小可が大老爺の慈悲徳澤に恩を洗れ
 無明の醉の醒しより善に與して死をだも辭せずれん身の伴に立まつらんと誓ひしよし恚
 々也箇様々々でひひきとて初安同も懸れて野上史著演を陥れ鬼と計較たるをの緯の趣より
 花水橋よて著演の鋼笄を竊みし事その折も又詰且も世に有がたき著演の義侠徳恩に先非を
 悔て柱に懸て死ましくせしを又著演に禁められ小六が伴に立といはれて圓金三枚と恵まれた
 る那日の密議遣もなくその身の素生九ヶ年已前舊里なりける假名川にて英直夫婦の密談を

心どもなく竊聞て小六を脇屋右少將のかん子なりきと知りたるよしまで告知すると半時許
 聳き果て又いふやう懸る情由さへ候へば大老爺の只願にかん身を伊勢の國司北島許落し遣
 んと思食たる當坐の決断神機妙算世に憑しく示させ給ひて義を見て勇む心あらばその折汝
 へ伴に立て小六が旅宿に仕へよりし去向の思ひ得たれども時日はいまだ下得ず竊に招寄す
 るまで汝の平塚なる宿に退りて便りを等ねと町寧に宣ひせしに涙こぼれて退りて便宜を等
 たるに幾程もなくれん身の狂乱いぬる夜臥房を脱出て馬入相摸河の一名今の早瀬に投ませ
 給ひし事の顛末云々と風聲はやく隠れもあらざ亡骸の辛して洗獵得られしよしさへ聞へて
 藤澤寺へ葬の本日の竊に小可も柩を送りまゐらせたる胸の憂也朦也人知らぬ歎きの霧の籠
 色もも寓方のあらず獨立つ夏野の芒本意なさに思ひ難つと思ふやう萬夫無當の勇士でも病
 痾に捷べき力いなじ矧や是の少年の身の病着に心さへ乱れし横死を歎けばとて惜めばど
 ても返らんや小六ぬしの事しも是非に及ぬとながら我進退さへ谷りぬ巖に藤白に頼れた
 る密議を果さず回報もせで山より東に居るならば那人必憎しと思ふて闘討にもやせらるべ
 からんそれさへあるに野上の大人と親しうなりし機を查しなば又奸計を旋らして大人を討

んとせらるへし。我身の惜むに足らねども大人に危殃わらせて恩義を稟たる甲斐もなし。所詮身ひとつ底倉ある那浴館に潜入して思ひの隨に藤白を刺殺して我死す。徳に酬ひ恩に答る。是忠節の捷徑にて後々までも野上の大人に我身を義士と思はれん。虎の死して皮を留め人の死して名を遺り叩而也。肚裏に念決めし倪兒の打扮いぬる日大人の賜りし那三兩の金をもて形の如く準備しつ。這麓路より立竊れて暮果る日を等程に思ひがけなきあん身も亦實好き身鎧甲手懸當兩刀腰に跨へておなじ山路に赴き給ふを樹立の間より見てければ訝しき事いふべうもあらず。貌姑峯の漸水の頭にて寒の河原のあるまれば其頭へかよふ宛魂歟狐狸の所爲ある歟と怪み思へど去向までよく見ざらん。さすかにて竊に迹を限て來つ背影さへ半面さへ左さま右さま現相たるに腰より下も朦朧あらず。險しき山路をもどもせで急せ給ふ歩の運びも陽氣自然と見れて宛魂變化に似たりけり。原米入水の陽殺にて密におん父脇屋殿の宛家藤白安同を討果さんとして今宵這山路と投て潜寄給ふにこそと猜せしか。海鏡の骨に遇ふ心地して漫々喚かけ奉りぬ人をも親さへ欺き課てなほ存命をいしませ。智慧才學の逞しさよ然とも別に故ある事歎願ふ。詳ようち明て示させ給へど繰返す舌も輪るや小車の曳甲

斐見へし。俠者の赤心おもふに優たる健氣さに小六の連りも感嘆して適微奴と和主の義俠只一旦の恩を感じて死をもて大人に答んとせられし試の多く得がたし。我いぬる比宿所の庭にて大人と和主の密談を心どもなく竊聞てその崖畧を知りたれども聞漏せしを今具に報知されし。意外の喜び現向上たる任俠也。然るに折台現たる和主の面影忘れもせねど和主の亦いかよして我を正可に認りたることも不審しきとにこそといへ。目四郎うち微笑してれん。疑ひに去るとあがら小可の藤白の問諜者になりし比藤澤なるれん。宿所の外さま内さま張ひて萬事に心を屬たりければ大人はさら也。れん身の而影聲音さへに好知りにきといふに小六の黙頭てしからば隠そに由もなし。寔に和主の猜せし如く親の仇さる安同を討んと思ひ決めし。只是實父の與のみあらず。養育の恩年を累ねし。義父の與も亦仇なり。唯速に禍の根を斷て後を安くせばやと思ふものから安同の鎌倉管領氏の寵臣にて従類も亦多也。を白地に討捕らば後難養父のうへに係りて臍を噬とも及びがたけん。最も難義の復讐あれば世も人も我が所爲なるを知らず。討んと尋思をしつ。欺くまじき親をさら詐謀りし。是虚誕に似て罪深かるべき所行なれどもその偽りの親の與を思ふ誠の外あらず。是則權謀也。權の秤の錘の如く

重きを掛れば必重く輕きを掛れば必輕し人這權を用ひざれば柱に膠とるごとく機に臨み變に應じてその宜きを得るとかたかり既に恚まで揺りしかば我が存命であるよしを知るもの
 わらじと思ひしに天知る地知る和郎にさへ知られたりける便なさに更に便宜になりける歟
 倚伏の糾ふ纏の如し世の塞翁の馬なるかな我身へちかき比までも得知らざりける我素生を
 はやく和主に竊聞せられ年歴て今茲とが故に歿危不慮に興れるをうち拂んとて我身先横死
 を示して親疎の耳目を限なく欺きたりけるを亦是和主に知られにけり奇なり過世の業報歟
 鬼神不測の事ながら夜討の伴に立んぬ要なし和主の這里より京師のうたに趣きて世を渡れ
 かし我身の武運折に稱ふて今宵實父の祥月忌日に親の怨を雪めち翌より命の惜からず然
 どてもなほ幸に恙もなく我も亦京路投て立退くべししからんに那首よて環會ふ日のち
 からずや只此うへの好意に小六の死なで有けるよしと親兄弟も世の人にも報るとな
 く過されなばいよく義士と思ひん今さら頼むの只これのそやや道義をこゝろ得てよ
 と口説くを目四郎聞あへずその亦本意なき事なるをいかにして承引くべき好思ふても見給
 へかし大老爺に誓ひし折今宵おん身の夜討の伴に立んといひしとかなければおん身を落

し遣る折に俱して旅宿仕へよとて準備金さへ賜りしにその事空になりしかば恩義を復せ
 術なきに大人の仇なる那人を討んと思ひ決めつ今獨ゆく這山路にて料らずおん身に遇な
 らが今宵の伴に立ずもあらば大人に期したる誓言も今又おん身に申せしよしも皆搦鬼にな
 らんのみ且小可を那首まで俱してゆき給はず必三棒の不便ありその義を思ひ給へせやと
 いふに小六の眉と擧めて不便といふ如何なる故ぞと問へば目四郎さればとよ小可の那浴
 館の案内をよく知たりそを郷導にせられせば是不便つ一ツ也又案内者を得ずもわれ武運に
 稱ふて思ひの隨に冤家を討捕り給ふとも那人の從類多かり其も廻し給はずおん身を認
 るものあらん是不便の二ツ也又那首に非常の與ふ備措る、弓箭も多かり人先に潜び入
 て弓の弦を斷るもの亦く敵に射らるゝとわらん是はその不便の三ツなりけり今這三棒の不
 便あり然でも伴に允されせやみづから思ひ給ひぬかしと詞せわしく怨ずれば小六の屢
 領きていへる、趣實に所以あり匹夫も亦志を奪ひかたかるものなるに我愆てり愆てりしか
 らば和主の望に儘して案内の與に俱しせんあれども和主が那浴館へ潜入て捉へられさ
 聞へしよりはや日厲を歴り今の容子の如何なるべきといふを目四郎聞あすへ其頭も脱落し

はず。昨宵小可潜ゆきて。那首の容を規ひしに。那人の五十日の湯治の暇を賜りて。鎌倉を立出し
 三月十一二日の事也。とぞ恚れべきのふ。その日より。四十四五日にありたり。是により。藤
 白主の明日先妻子を氣賀へかへして。その身の後日歎大後日俱々氣賀まで退きて。却鎌倉へ趣
 んといわれしよし。さへ所得たり。あれども便り悪かりければ。討も果さでけふに及べり。然るに三
 月の中辭より遊興の興に携られたる。大儀紅粉坂の歌妓們も。翌の身の暇を賜るとて。還り風起
 つ癖なれば。陰に喜ぶべけれども。お名残惜しといぬ。なかりき。斯れば。今宵の好都合にて。
 手脚蜜縁になりぬ。べき女子の總て。那首にわらず。奥方隸の甲乙も。皆橋子に従ふて。氣賀の邸へ
 退りなば。残るの若黨雜色奴隸二十名に。過ざるべし。と報るに。小六の喜しさの。手を憶ずも。額
 に加わて。その又得かたき。造化也。雲時の程と思ひしに。密談に。日の暮れしを。覺す。夜のはや。初更
 になりぬらん。眞夜半までの。暗夜なれば。潜ぶに。便り悪からず。卒や。那首へ。急んずと。立を目四郎
 推といめて。憚らせた。まふな。尙は。やかり。最初小可が。那浴館へ。潜入たるを。りし。も。只脚頭を。相
 つるのみにて。間毎に。心を。属ざり。ければ。昨宵の。八隅を。漏すと。なく。出口。庭門。間毎の。進退。方位。さ
 へに。鑑定。めたり。そを。うち。忘ざる。爲に。宿に。還りて。引たる。畫圖。あり。即こゝに。と。懐を。搔撈りて。取



任使慕孝義

小六

目四郎

目四郎

出そにぞ。小六ハ腰ある燈籠を解開きて火を鑽つ程に。目四郎も亦腰を探りて。三尺帯の間より。扱とり出す蠟燭の準備を小六ハ譽ながら火と移さされバ。目四郎ハ左手に小篋を折採て蠟燭を挿し地上に植て却平坦なる石の上に件の画圖を推開けバ。小六も跪居て彼此を見るを目四郎指さし示して是樹せ浴館ハ大小總て十餘間あり奥まりたる束の間ハ藤自主の臥房也。這次の間に近習の侍者兩三名宿直をしたり。西なる五間ハ奥方と給事の婢子等並に兩舎三瓦の歌妓等が紅粉舎あり又便室なりしをけふ奥方ハ氣質の館へ歸館せられて歌妓等も皆身の暇を賜たらば道頭ハ人影のなかるべし。又小立關ハ南に在り北なる子舎にハ若黨處り危瀕に隣るハ雜色子舎中間子舎ハ下より浴室ハ即乾の方と坤にも篋二ヶ所あり巽に庭あり庭門あり。這里より奥に出口ハなし恁れば庭よりうち入りて出居の這方を斷裁らば袋の東西を探るが如く。主従一個も漏とべからせ其期に及バ。小可ハ奥と面亭の間なる這箇杉戸を目柴よし。て走入るもの逃出る奴等あらバ擊留てん。かん身ハ奥にうち入りて冤家を擊捕給へかし恁做すときハ幾人ありとも逃すとでハハハと手に取る如く聶き示せば。小六ハ相つゝ點頭て俺も如右こそ思ふなれ。臨機應變時宜に依るものにしあれと進退を今より茲に定めたる這画圖

ハ現借千金。是に優たる幫助ハなし誘ゆくべし。と身を起せば。目四郎ハ逃しく画圖を疊みて懐へ來る程ハ山風ハ吹れて滅る蠟燭をうち棄て俱にたつり弓わけ入る山ハ谷河に墜堰く水の滔々と音凄じき夏樹立親姑峯揚榭ハ花零果て鳥夜を照さん雪もなき芒種の節比なれば降りみ降らずみ私雨の霽んとしてハ又曇る峰歎麓歎杜鵑我踰ゆけど伊豆の海や渙の小嶋ハ見えねども有聲に深き生の恩仰げハ高き養ひの親も返と劍大刀身を捨てこそ武夫の名をも揚羽の蝶鳥と思ひぞ伊豆の藤原の曾我の靈堂の這山本ハありとし聞けば肝向ふ心に禱る健雄の先に立つ。闇き夜の其首とも見えぬ目四郎ハ熱れし路とて水莖のふみも迷す急ぎし隨に草鞋ハさされて壞の入る底倉の館に着きにけり。這時夜ハはや子二刻時候にて萬籟聲なく寂寞たる折こそよけれ。と目四郎ハ安同が浴館ある庭門に身と倚せて覘ふこと半响ハかり莞然と笑つゝ退ぞき來て。小六を喚かけ聶くやう奥にハ人聲幽に聞ゆ然ども這頭ハ人影ハあらず。小可ハ先潜入てなほも容子を覘ひ知るべく弓の弦をも斷棄て庭門を開くべし。戰飯の準備もあり宜く腹を繕ふて姑且等せ給ひぬ。といひつゝ。纏て懷より紙に裹みし燒餅を四五枚拿出しつ。そが内三枚を又紙に裹きて小六に遞與すにぞ。小六ハやをら受奪てこの慚愧し恁までに行

届かれし準備の妙也いふに及ぬとあから只小心を旨としてはやく暗號をせよかしと聳く程に目四郎の餅一枚をうち啖ひ残るを口に嘍りながらはや板扉に手を掛て閃りと乗りて樹枝に傳ふて庭ま下立けり去程に藤白隼人正安同の嚮に湯治の暇を賜り鎌倉を立出しより這底倉も采邑されバ石疊屋と喚做したる第一番の浴家を備て主人並に妻子も奴婢も皆別宅に移らして從類の外出入を允さざ夜も日も酒宴遊興に吹鼓し舞踊らして忌憚かるとあかりしかども這里の奥まりたる山里なれば鄰も遠く外相罕也然らでも領主の勢ひに怕れざるものあるとあければ湯治の爲に旅客の來ぬるもよしを傳聞て他所の温泉に浴るもの多かり恚れば當日底倉なる浴家の總て生活を喪ひたりけれどもうち咄くのみ愁訴に由なく限りある日を僂へて快立かしと不樂にけり故あるかな安同が氣賀に久しくをらそして底倉なる浴館に逗留の程驕奢を極めて富貴を里人に示と事是小人の傲慢もて豫て心に思ふやう八字生來武運に稱ふて九ヶ年已前脇屋少將義隆を撃捕りしより俺身猛可に發迹て底倉の莊と加増し賜り鎌倉殿に昵近しつゝ主君二代の寵臣に做り登りて今に至れり便是底倉の俺立身の吉地されバいかで休暇の折を得ば那首は赴き遊遊びて這歡ひを盡さんすと尋思したる

さへあればその宿念を果せし也然バこそわれ石疊屋の巖脇屋義隆主の湯治の爲に寄宿して撃れ給ひし浴家也第一番の大夏にて坐席の間敷寡からねバ安同のその身に取て先功後樂共に愛たし逗留の程那里をもて我浴館にそべけれどて妻子眷属相携ていぬる比より這里に處り既にして五十日の期限も才になりけるは這年來怨むる野上史著演を陥るべき密策を授けて放遣したる小賊目四郎が信いまだ聞ぬぬの緯露れて撃れいせずや然るに今に便宜のあら傳空にくらと歎逃たる歎花開く山の雲ならで心にかゝらぬ日なけれども我鎌倉へ還ら傳へ虚實を探ると易からず五十日の期限も季三四日にありたれば妻子を氣賀へ退かして我も明日後日の比鎌倉へかへりまぬるべし恚れバ歸府の準備もとて妻房の長總に婢子們と老黨と若黨さへ分ち冊けて這日氣賀へ返し遣し又遊興の興に將て來ぬる無妓歌妓等にも身の暇を取しつ今宵の若黨七名と雜色奴隸十四五名主僕合して二十餘名を底倉に残りたり抑件の若黨に底倉記我八袖本再九郎と喚做と二名の藤白譜第の家隸もて這它名湯面九郎十布野左衛門太宮尉斗多田藏堂檉麻太郎足野井簡平と喚れたる五名の巖に安同が夜撃して義隆朝臣を害せし折その催促に従ふて俱に進みし野武士也多かる中に口才あり武藝も拙からず

りければ發迹し折召よせて懸て近習にしたる也。然ば又安同の婦女輩を皆退かして、猛可に寂しくなりたるに思ひ出れば、九ヶ年前義隆を撃捕たるその月、その日の環り來て四月廿四日になりぬ。當所の名殘も今宵のみ、這那の壽きに今宵も亦酒宴して遊ずべあるべからん。食うち聚合て祝せとて、那七名の若黨を身邊近く召よせつ。平生の面前へ出さうりける。庵丁人、雜色等さへ、席末ま侍らして酒宴に興を催したる折から最愛の龍陽也ける庭取三女介といふ美少年に、細腰鼓を拍せなどして、主僕快樂に餘念もなかりしそが中に記我八と再九郎の家子態て同僚に席を譲らず安同が與す盃を會釋もさく受戴きてうち累ねつ、映ひ爲体と、傍痛しと思ひたる左腕、太多田藏面九郎、麻太郎、笛平等の目を注し、俱と安同よりうち對ひて、今の世の曲子にも酒に思ひ出すといへど、相公の忘れ給ひし歟、曩に當所の戰ひに數にも足らぬ敵ながら、那大刀風に衝立られて進む、射方のなりりしに、俺等五名先を蒐て、船田小二郎、隆友を撃捕たる、某ありきといひつゝ見かへる左腕太の發語に取接ぐ、面九郎起身、腕に膝を進めて然也、那折堀口五郎が深痕に屈せぬ、死物狂ひよ、雜兵許多撃れしかども、某烈しく戰ふて鎗もて矢庭ま突仆しを感せぬものなかりきといへば、麻太郎鼻齧めかして然也、大將義隆の防箭を射盡して退き

てかん腹をめされし坐席を今思へば、這次の間でありけんかし、後に主人が造更て家初の如くあらねど、かいらぬ武勇の我等五名就中義隆のかん首を給りし、鳥許がましくも某也、當時これをや功名の第一番といひまくのみと誇れば、點頭く宮尉斗多田藏然也、田子勇傳二の撃れし迹へ立替りて首級を揚し、和殿の造化手剛かりし、鳥山七郎、江田藏人ありければ、其も漏さるに撃果せし、此に待る同僚、足野井、某が手柄也、世の譜第よ家子よとて、大平の日のみづから允して、人もあげなる上坐をしぬれど、却戰場に臨みて、皆新參を盾よして恥と思ひぬもの多かり、相公の然りとも思さずやと過にし事といひ出で窘めらる、再九郎記我八も俱に佛として堪難たる聲高やかに、見も聲もせぬ人ならば、似而非廣言を眞實と思ひ、ん那折の我等も、御馬前にて働ぎし武勇を相公こそ知食たりけむ、向ふに前なき大刀風にうち靡したる高柳、兵庫に當る者あかりしを、我等兩個相擊にして首を捕りしを忘れし歟、船田鳥山、江田堀口、勇士といへども、深痕は堪す泥よ、吻く鯽に似て、或は自害し刺違へたる、死首を捕りめされしを人知ずと思ひて、歟嗚呼なるを、晉回せば、俱に性起つ生醉、同士の眼を瞪らし、膝推向て、最驚しく罵る程よ事いで來ぬべく見わたるを、安同ヤヤと推鎖て、若等のはや酔たるな、我いふ

よしを聞ねかし主の興に身を見かへらで敵に當るの武士の役その一日の故をもて耕させず飽までに啖する飯に新舊ありとも忠義に新兵古兵のなし捷も敗るも大將の軍配に依るものあれバ當時射方の功名の皆安同が致す所誇らば俺こそ誇りもせめ天飛ぶ鷹も地を走る狗も輩なるものを無益の口論不敬にあらすや向後を屹と慎みぬといひれて大家青松に盪の形を改め額をつきて仰うけバ奉りぬ御免のうへの酒興荒じて憶ず口が馬齒莫筭にも棒にも掛らざる草を酒菜に今一度過させ給ひ有がたからん重々過意照文の酔て件の如くなりける無禮を允させ給ひてよと異口同音に陪話しかバ安同呵々とうち笑ひて然バ亦復回醒さん若等も回背に酒量を竭して喫ねかし過にし軍の剛臆の左まれ右まれ拾措がたき那著演奴が事也かし道里に侍るの皆腹心にて逆ての機密を知らぬもなければ今さら隠さべくもあらずいぬる比の盗兒奴の殺さべかりし頭鬘を接して金さへ取せて遣せしにいかにしにけん若等の聞つるともなかりし歟と問へバ大家さん現那事もいひき悪人ながら才ありげよて諾ひ稟せし一大事を做得たりとも做し得走ともけふまで便りの聞へぬの仇に知られて撃れし歟倘しからせぬ心變りて逃亡たる歟知るべからせ探知まくおもへども浮世に疎き道山里のれ

ん僑居で便なしといふよ安同領きてその義もあれバ鎌倉へ歸心今さら矢のごとく既に準備をしたる也明日の必氣賀へ還りて後日の歸府に趣ん靴を隔て辭を搔く頼甲斐なき盗兒に吊られてものを思はんより我鎌倉へ還りおは著演奴の結果る計畧の幾もあらん今宵の浴室の名残也且喫むべしと引受て酌しての喝す盃を一人別に取れば然でも進む若者等酒に一人當干にて敵を擇まぬ乱盃雜盃泥の如くに酔ぬもなく席にも堪ず見れば安同の卒就寐んとて跟踏ながら身を起せばかん浮踏やと三女介が手を抜き扶けてそが儘に臥房に冊き入れにけり現常言にいへるとあり豪家の門に瘦たる狗あく農夫の廩に肥たる鶏あり安同に使る、奴隷も怒に才關たりけん酒を盗み筋を隠して鼠の穴に引く如く飲食のすといふものなければ主より先に酔臥して呼べども起す鎖すら忘れし門は衝く反吐の聲心裡悲しく聞へしも還り降りし臺所水火既濟の數盡て今宵討る命との知らでぞ算を乱たる轉寐言とさしる牙と鼾睡の聲のみ高かりけり去程に館小六の浴館の庭門ある牆に添ひ身と潜めて目四郎が出て來ぬるを今かくと等程に結陰たる天露て二十四日の月鮮明も顯れ出しを瞻仰れば丑三時候よなりよけり等と久しかりければ獨連りに焦燥つ程に内よりして庭門を開きて潜

び出るものあり。是則目四郎也。小六ハ巽時透相て首尾ハ什麼と問程に目四郎聲を密ましてさぞ等不樂てをのしけん。那里ハ酒宴の最中にて時はやければ出ても來ず。聽て奥まで潜入て視ひ濟し候ひき。甲夜も知せ申せし如く婦女輩ハ氣賀の邸へ皆かへされけん。一個も居ず。奥に主従十名あまり。今宵ハ餘波の酒醺也とて雜色奴隸に至るまで酔ぬもの候ハず。九ヶ年已前這浴家にて脇屋殿主従を討捕たりし功名話説に角口したるもあり。藤白ハ亦野上の大人の事云々と言出ていと憎さげ。小可の憎せられて生増に噓んとせし鼻を撮て出さじとせし折ハ涙こぼれて困たり。斯而只今夜務ハ退て主従俱ハ酔臥たる睡端にて候也。上下二十餘名なれども要緊の折に手にあふものハ七八名に過べから。徐々入給ひねと辭せわしく聾き報るをうち聞小六ハ齒を切りて原來這浴館ハ糞に先考主従の討れ給ひし故迹なりし歎處も易す。今宵その祥月忌辰に怨を復すハ武門の冥加折にあふ。追薦これに優ものなし。冤家の動靜人數まで斯詳に聞知るハ目四郎和主の賜なり。非除幾人盾籠るとも二念疑てハ石に立つ。箭もあるものを漏さんや快々頼ハ案内をせよと早るを目四郎推鎮めて酔臥たりとも冤家の多人數徐よ來ませと聾きつ。心を屬て先立つ樹の下開き庭の松も昔を忍ぶ友ならで。見れば是さへ懷

舊に堪ぬ小六ハ飯柄の刀の目釘紙潤しはや琇を甘げて。一步を干歩とぞ進みける。

第十二回

安同首を温泉舎に喪ふ
庶吉涙を死節場ハ濺ぐ

却説客店目四郎ハ小六が潜入りたる折先庭門の戸を引よせて戸尻の拵棹樞を下しけり。こハ逃出るものハあらん折快ハ開ぬ用心なると小六ハ猜して既にはや縁類近く進みしを目四郎ハ遮しく袂をひきつ指さして這坐席より一房隔て奥ハ主の臥房也。豫謀合せしとく小可ハ奥と面亭の方にこそ趣くべけれ好し給へと聾くを小六ハ聞つ。點頭て俱に縁類よりうち登るに兩戸ハ一枚外まであり聽て其頭より進入て幾程もなく安同の臥簀の頭に近づきつ。と見ればその次の間に近習の侍者兩三名皆酔臥て枕もせず足を伸し手を開して大の字に似たるもわり一個ハ一個の腹を枕に丁の字に似たるもありしを小六ハ是等に目もかけず。隔亮の透間より目安同ハ覗ふに山里なれば蚊のあらねばや青紗方櫛の蚊帳を垂れね。圓行燈の臙月光幽る蒲團の上に綾の夜着を打被ぎたる安同ハ三女介と枕を並べて臥たりける。小六ハこれを見てしより些も擬議せず。隔亮を繁刺里と開て入る程に三女介ハこの折までもいまだ熟

睡とせざりけん。忽地に頭を擡げて小六を見つゝ、驚きながら連りに主を揺動して、賊あり賊ありと召りしを三聲とも立させず。小六ハ枕方踏鳴らして藤白安同快起よ九ヶ年已前今日汝討れ給ひたる脇屋陸奥少將義隆朝臣の奉角に怨を雪る我ハ是源助則也豈強人の類やらんや快々勝負を決せよと名告掛召りたる聲に安同駭覺てこゝろ得たりと枕方なる刀を拿て身を起し晃りと引抜く程しもあらせせ小六ハ谷を落せ、獅子の虎彪を此に駈る如く確と討たる刃の光ハ安同も亦眼早く閃と錯せと脱れぬ命運ねらひ聊狂ひしかとも勇士の刃尖怨たず安同が右の腕をはりりと切落して餘る刃こそが身邊ある三女介さへ肩尖より乳の下までぞ切られたる。主従等々深痕も得堪ず是那一度に苦と叫びて俱に控とぞ仆れける。浩處に次の間ハ醉臥たりける近習の侍者底倉記我ハ堂檜麻太郎十布野左腕太這等の三名が物音に方僅夢覺て仇入りにさと思ふにぞ驚きながら中刀を手にく、拿て入らんとす小六ハ是を見かへりて敵の首級を捕る違なく物々しやと血刀をはや眞額に振抗て跳越りつ稠入る敵を討靡け趕退ぞけて走り出つゝ、次の間にて先に立たる麻太郎を韓竹割に研仆す尖々修鍊の大刀風に進難たる左腕太記我ハ迷るとも服さじと思しよければ前後より引夾みて討んと

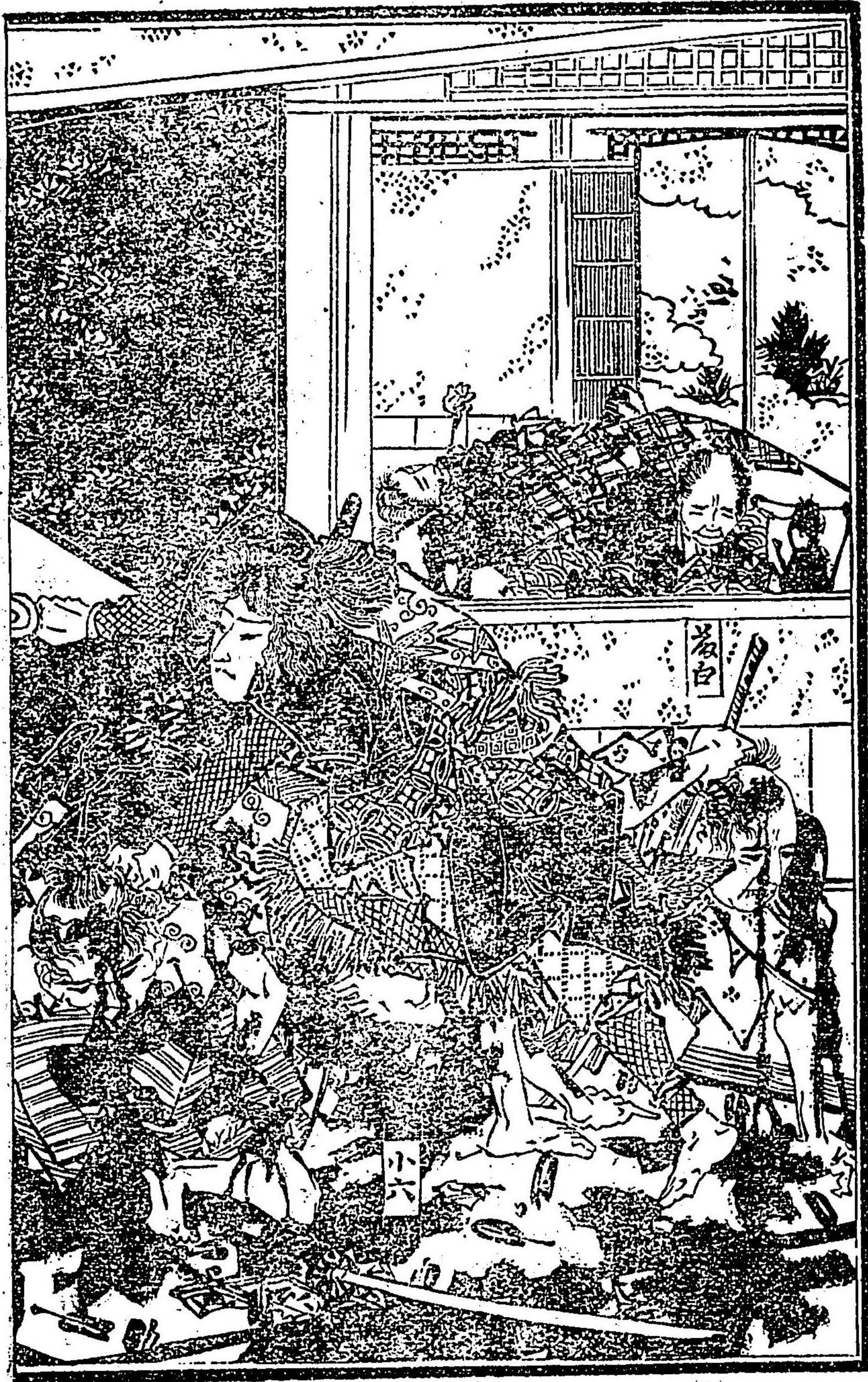
しつるを小六ハ得たりと引受て左右に當る奮戦突戰雲時こそわれ左腕太の刃を破と打落して怯むを透さず丁と砍る拳の牙ハ左腕太の頭顱ハ遙に滾落て血煙立てぞ仆れける既にして記我ハも眉間ハ痛痕を負ひしかば連りし聲をふり立て人々起よ癖者あり癖者入りぬと召立る。聲に驚く宮尉斗多田藏踏る、足野井箆平も醒ぬ宿酒に頭顱ハ重よるめく片膝推立て目を磨る抽本再九郎と俱に名湯の面九郎も刀ハ鎗よと罵りて薄闇室を撈るもあり或ハ準備の角弓を手にハ取れども皆技斷れて彎に引れず空し箭の數に漏んハさすがにて雑色奴隷も召覺しつゝ、多勢を頼む破軍の劍戟左手に手燭を乗さへありて威彼此より起て來つ競ふて稠入る程しもあれ小六ハ既に記我ハをふた、び控と砍仆して敵を擇まぬ若武者の鋭き刃尖ハ向ふに前なく那牛欄の美濃路の防戦又時致の十般斫も是にハ優じと見るまでに大袈裟梨子割腰車引んとしつるハ後疵跡より推ハ眞額を討れて仆る、俱うめき愛觀にあふたり本意なくも鮮血ハ紅蓮の花獨樂を抽本さい丸の置土彦宮尉斗附て多田藏經の功德に疎く貪りし錢箆平ハ足野井の足を砍られて一足飛に十萬億土へ死出の旅翌より共に祀られぬ鬼の面九も臭かりし名湯の因果廻り來て死に温泉の焦熱地獄を面前りに觀る乱世の人の心の悍かれバ這折

雑色奴煮まで各宿酒の醒きして匹夫の勇を好むものゝみづから力を料でや慙に手に値たる
 の皆共侶に討れよけり恚れば主僕十五六名。一個の小六に砍立られて血にありし爲体を看
 官の訝りて相應しからずと思ふもあらんしかれども戦ひの勝負の人の多少によらず事に臨
 みて死を極め敵を恐れざるものゝ單身にして十數人に當るといへどもなほ利あり遺藤白が
 黨の射方の多勢を憑ひのみ主の爲に命を惜まで先を駈んと思ふものなく加るに酩酊して
 臥て幾程もあらざりける醉眼なれば甲も乙も敵の多少を認ずして同士討をさへしたりしか
 ばはやく痛手を負もの多かり然れば小六が勇敢武藝の千万人よ傷れたる孝義も死をだも見か
 へらで鋭氣日頃十倍したる大刀風に向ふもの誰か一人も免るべき命運時あり神明佛陀の
 冥助なしとぞべからず本意遂がたき盤ありしを這折茲に數を盡して討果せし宜ならずや
 間話休煩小六の豫思ひし隨居多の仇を討捕て姑且息を吻きながらなほいで來ぬる敵もや
 あると四下に眼を配れども寂寥として音もせざれば又たる大刀を柱に當て推直し血とぬぐ
 ふて鞘に収めて安同の臥房へふたゝび趣きて相れば龍陽の少年の初大刀の深痕に息絶て血
 にまみれつゝふしたるに安同のまだ死あらず剛才亦小六が進來ぬる聲の耳にや入りけんや

うやくに頭を擡げて起んとすれど腰立を噫朽惜しやと蠢動くを小六のはやく走り掛りて頂
 を掴み引よせて席薦に横を摺着々と怒れる聲をふり立てやをれ安同思ひ知るや汝の素より
 脇屋殿に結びし怨のありしとも聞はず且職分にもあらざるに不意に起りて討まつりしは是
 足利家の興ならで榮利を料る小六の忠義めかせし所行なるとよくも思ひぬ鎌倉の管領に褒
 賞せられて發迹しより民の膏腴を絞りに飽まで驕奢を極め賢を媚みて野上の翁を害せんと
 計較たる老奸積惡天の憎に逼りし應報愈たき今助則が手にかけて脇屋殿の冤魂を慰めまつ
 るそがうへよ民の讎毒を刈拂ひて世の爲亦人の與に心を快くなすもの也然ば右少將の記念
 ある這短刀もて刑戮の手を下さんす覺期をせよと思ひの隨に罵責て見りと引抜く菊一文字
 の短刀右手に拿直せば吐嗟と悶搔く安同を捻返し仰反らして胸前ぐざと刺徹して臆て首級
 をぞ捕たりける斯而小六の血の溜るゝ刃をやをら拭ひ収めて彼此と見かへりつ安同の枕方
 に鼻紙盛のありけるを是究竟と引よせて見れば紙あり香盆あり下壇より料紙硯もありける
 を皆拿卸して冤家の首級をうち載せて西に推向け身を退かして合掌しつゝ念ずるやう先考
 尊靈并五家臣船田鳥山江出堀口高柳等も靈あらば今助則が奠祭れる冤家藤白安同の首級

を響て在りし世の怨を露し給ひねかし報恩謝徳願生菩提彌陀佛みだ佛と唱れば然しも勇み
 し健雄の心の猿勝と闘ばかりなる悲しさの亦やる方も無りしを却有べきに非ざれば硯管を
 引寄て墨磨流し筆を染て身を起しつゝ、傘なる雲母摺の重紙戸に往應永十年今日於此浴
 館被擊比之奉爲脇屋右少將誅戮藤白隼人正安同主僕十數人者源助則と墨黒やかに大書し
 て憶き茫然とうち笑しが忽地心に思ふやう去まても目四郎のいかにしつらん今までも影だ
 に見せぬのいと訝し愁よ面亭のかたへ立別れしより敵に當りて痕を負ふたる歎討れへせず
 や心もとなし甚ぞやと獨語つゝ、遠しく圓行燈の頭なる白金の手燭と取上植たる蠟燭に火を
 移して出て彼此と尋るに面亭のかたにも討れしもの、尸骸三四個横はりて鮮血に腫を染る
 のみ目四郎の這里にもをらまこの次の間の板席よて庖漏の通路にもや有らん其首よ置れし
 鐵行燈の頭にも人有てうめく聲のしてければ小六の彌胸安からずなほ先後に小心しつゝ、走
 りて其首よ到りて見るに是則目四郎にて既に痛痕を負ふたる也けり登時小六の聲を掛てや
 よや目四郎痕を負たる歎我の安同を擊として十五六名討捕たれば奥にの仇のあらまなり
 き見るに儕の淺痕也に肩に被て立退くべし快々立ねと慰れば目四郎頭をうちふりて喃小官

人歎歎しや宿意に錯の居多の仇を威撃果し玉ひしとあそれだに聞けば今生に念違と事も
 なきに存命がたし身を愁に何處までか立退くべき小可の向の程逆謀合せし如く這里より奥
 へゆかまくしたる雑色奴隸を擊留て俱に志を果すものからそが中に大刀筋の捷たるもわ
 りければ憶きも膝頭を砍られて恚の痕を負ながら辛して件の敵を皆刈拂ふておん身の奥に
 彼安くしたれども這箇深痕といかゝのせん腹を所んと思ひつゝ、刀を取も直せしがいまだお
 ん身の安否を知らず今一たび對面して本意遂給ひし趣を聞かて死んのおほ早かりと思ひ
 かへして候ひきと報るを小六の聞あへずやよ目四郎今さらに心弱きとをないひを數十ヶ所
 ある痕を負ふても窮所を深く傷られねば本復せしもの世に多かり况や和主の淺痕のみ非除
 定業限りわりとも俺恚仇を擊果せし多く和主の幫助に依れり死ぬることも活ることも其侶に
 とこそ思ひしものを相棄て獨立退んや要なきとをいんより快々肩に被りねかしといひつ
 〆臙て手を取るを目四郎臙を振拂ひて御好意の有がたきまで最慚愧くれもへきもおん身の
 手枷足枷にかりなれば路次の障りありさでの跡より追隊蒐りて後度の難義に及ぶべし然ば只
 遺身獨ならでねん身も俱に危かるべき後悔其首よ立かだかり情物を案するよ左ても右て



も小可の存命がたき情由さへありといふに小六の眉うち擧めて死の易くして生難かり。纒なる痕に氣を屈して歎何等の情由のあるべきやといへば頭を又うち掉りて慰めらるゝの鼠貞の沙汰のみよく思ふても見給へかし。初小可道浴館へ偷盗の與に潜入りしに藤自主に捕へられしと放遣られつ。剩金十兩を惠れしは是那主の慈悲にあらで野上の大人を害すべき與にしわれと道身に取てその思なしとすべからず。恠て其後野上の大人の徳澤義侠に濁を祛て清に就きしは我身の幸ひ藤自主の不幸なれども善惡邪正その差あれば他が約に背きしを世の人罪とせざるべし。然ればん身の旅宿に仕へて大人に稟たる恩徳に答んものをと思ひたる。的の外れしかん身の入水に事皆画餅にあるのみか。大人も危く我身を亦措所なくかりたり。山にも海にも就かたき命を捨て那人を殺して俱に死ばやと思ふ折から料らどもかん身に環り會しより夜撃の案内に立たるは是本來の面目よて論に及べぬとながら今より後の命を措てかん身と共に立退かば眞の俠者にあらずかし。そといかにぞといわれん歎藤自主の奸惡の世の人通て知らぬもなかりし。民の與に虎狼なれども我身の素より怨もあらず撃れん頭顱を接されて養られたりける那金を受たる隨に返しも得せむ。方纒道折に死ともあらば心に

快らんや覺期極て候といひつ、刀を取抗て腹へ馬筋と突立るを小六の吐嗟と擧めて狼狽たる歎やよ聞ねその十兩の金所以死を急ぎしは思慮淺かり。俺身は路費の貯蓄あり然までに思ひ安同の尸骸の頭に十金を遺して債を果させんに憐りし事の疎齒さよと擧め目四郎息を吻て否然ばかりで候はず。小可刃に伏すとき藤自主の敵手あり。恠れば追隊の沙汰よ及べでかん身の後安かるべし。道を念ひ那を思ふて目今死ぬるは一事兩用放ちて往生さし給ひねと物いふ毎に血の漬りて憑微き光景に小六の只顧感嘆して適得がたき鯁忠義俠迷へば半世の博徒なりしを悟れば一日の義士となりける。自殺の覺期の健氣さよ俺親ながら徳高き大人の教化に憑るもの歎朝は道を聽ぬれば夕に死すとも可なりといひけん孔子の教も外から老嗚呼天なる乎命なる乎今禁る由もなし。倘いて遺せとあらば苦痛を忍びて告よかしと心を屬つ勳れば目四郎やうやく頭を擡て否親もなく妻子もなき身は野中の孤木の浮世の秋よ先だつのみ何處へとてか遺すべき言の葉絶てなければも嚮に大人の御庇によりて初て思ふ親の恩三十年の非を知りて天怕き不孝の罪のやるかたなきよ就て赤心に係る一筋りいと取しきとながら懺悔の爲にありもやせん笑るゝともいふべき歎といふに小六のな

ぼ差添てその何事か知らねども快々告よ甚麼ぞやと顧問れて目四郎の心を激し眼を睜りて
 いふて益なきとながら問せ給へば稟す也小可故郷に在りし時年十六の春なりき親の家に使
 れて音間と喚做す炊婢に幾遍となく宵鼓し程に腹膳脰になりけり雲時の隠たりけれど
 も帯する比になりしかばそが保人の女房の訪來し折見出しして事發憤しくなりたるを親の
 慈悲にて物敷いのせせ金もて面を張れにけれバ風波立す音間に身の暇を取らせけり恁而
 音間の泣つゝも出てゆく折物蔭に我身を招きて聳くやう妾が親の上野なる新田の莊の百姓
 也今より後の身の往方親里へが送遣られて身ふたつよこそなるべけれ然バ迭に音耗かよ
 かり妾の左まれ右もわれ産も出さばかん身の胤なる親子の證據になりぬべき一種也とも賜
 ねかしといひれて有理と思ふのみ猛可の事にて遣るべき東西なし這身の幼雅かりし時腰護
 符箋に附られたる迷子腕の黄銅にて形圓金の似くなりしに武藏州荏原郡假名川客店肝八之
 兒子目四郎と鏤着られしを後々まで喪ひもせせありければ年十五六の比よりハ夾小判にし
 て懐に一日も放さざりけると思ひ出しつ藻塩草一分の金ども共々懸て音間を取せけり是
 ぞ一期の生別れにて錢二三百遣したる心地せしのみ後々までハ思ひも出ず年を經今般にか

もふ親の恩子の往方さへ忍れて果敢ある事を今さらば愚痴と知りつゝうち明てかん身に憑
 み奉る音間が産けん俺胤の男兒か女の子歟知らねども恙もなく成長らばはや十四五よあ
 りぬべし倘武者修行の折あそよ去る東西持る母歟子に不圖遇給ふことあらば汝が父の恁々
 と告も知らせ給へかしといふに小六の點頭てその義の俺よくこそ得たり罕なる義士に後
 なきを遺憾く思ひしに落胤あるの意外の歡び何事歟亦これに優すべき上野の俺本貫新田の
 父祖の唐字の地おれば尋ねゆくともけしうのあらず必よこそ安かるべしと答る辭の訖ら
 ぬ折から後のかたに人ありて忽地よと密音に泣くをうち聞く金着人のさら也小六の吐嗟
 と駭きながら其方を屹と見うへりて原來残りし敵ありておほも躲ひをるにこそ聲の正しく
 後方なる板厨の内に疑ひなし快々出よと罵れば應ひ得せず泣聲の只口隠りて聞へしが思ひ
 かねけん内よりして戸を蹴ひらさつゝ滾落るをと思れバ思ふに異ありける年十四五なる男
 童の面の色白うして笑ハ愛敬ありぬべき優形なれども身ハいと痿れて舊たる木綿の爽衣の
 上に禪衣を被たりしを圓巻に細て布囊をさへ掛たる也小六の今道光景に敵ならざりし
 を知るものからおは疑ひの釋されバ先布囊と縛縛の索を解捨扶起して徐によしと尋げり登

時件ときけんの少年しょうねん、涙なみだをどいゆ跪ひざまづきて小六せうろくに對むかひて告つとるやう、俺おれ名なの庶吉しよきと喚よび做しすものにて、今いま茲こゝの三五さんごよりたりたり父親ちちいんの武士ぶしなりしは、薄命うすなはせにて主しゆを喪うしなひ志こころを得えて遂つひに世よを去さりて、是こゝより以來このかたいよ／＼ますます所憑ところたよりもわらせなりしかば、俺おれ身みの母ははも携たづなられて乞食こきしをしつ、諸國しよこくなる靈山れいざん靈地れいちをうち巡めぐり旅たびにあること既すでにして、今いまの六稔むつとせよりけり、憊かくて今いま茲こゝの華洛からくのかたより又また東路とうろに赴おもむく程ほどにいぬる月の下した、浣せん道山だうざんを踰こる折せ母ははの猛たけ可かに病い着つ發はりて、路みち去さりわへねば、山陰かみなる小洞せうどうの内うちを宿やどにして、間まなく時ときなく看み病びやうしかども、鍼灸しんきう藥餌やくじの村胆むらたんの心こゝろも儘まませぬ他郷たかきやうの便びんなさ、糲わづに餉かてふ糧食りやうじきの薦いぬまで、衰おとろ果はて懸ひて空ひらしくありにしを、地方ちほうの翁等おきならの慈善じぜんにて、藐姑みやくこ峯ほうの湖邊こへんに立たせ給たまふ地藏堂ぢざうだうの傍かたへある、无縁むゑん墳ふんの埋う葬じやうのはや三七さんじち日ひになり侍はべり堪たぬ歎なげきのやるかたなさ、俱ともに死しすと思おもへども、いれし事ことの羈はりとなりて、一日いちにち々々ひひとながらふる愛山河あいざんがの湍たぎをはやみ、往方かうも知らぬ身みの指所さしどころも、那な小洞せうどうに露宿ろじやくして、放はなゆる人の袖そでも附つき又また里人りじんの門かどに立たてやうやくに日ひを隔かる程ほどに、這浴館ぜんよくかんの庖くりや溜たまりよ、餘あまれる飯いひの多おほかるを、饑うらかしつゝ、棄すてらるゝと人の噂うわさに聞きへしかば、朝あな夕ゆふも外とに立たて、その冷飯ひやめしを乞こひけるゝ庖丁ちやうてい人にんもやあらん、走はらん人ひと、魔鬼まおに右衛門ゑもんとか喚よび做したるが、その度たび毎ごとに喚よび入れて飯いひのさら也なり、羹菜かみさら、這那ぜんとな

く養くたりけれ、最慚愧さいざんけいと思おもひつゝ、是こゝにぞ饑うを凌あがれたる人ひと、れ情なさけの憑たのしさに、問とる、隨まに恠しかくど我身わがみのうへを報つげしか、那な人ひといよ／＼憊あはれ、憊あはれ母ははの精靈しやうりやうに備そなへよとて、餅もちを取とらせ、錢ぜにをも養くしを稀まれなる檀那だんなと思おもふも、ぞけふも亦また下くだ哺ぶに夕飯ゆふめしと乞こひに來きつる折那せな鬼おに右衛門ゑもん獨ひとりをり、その身みの子こ舎やに招まねきよせて思おもひかけなき懸幕けんまくのよしを、いと淺あましく口説くちま立た頑童がんどうよせんとして、調た戯はれしを腹立はらだしさよ罵辱ののちめて突倒つきたたしつゝ、脱だんとせしを、又また搔か抱かきて放はなさぬ、聲こゑを立つゝ角かくひし程ほどに、其その頭かぶにありける軒きん磔さ兒ごの一具いっぐ壘粉らいふんに碎くだけり、是こゝにぞ駭おどく鬼おに右衛門ゑもんの忽たちまち地聲ぢせいを寄よ立たて、這乞ぜんこ焉な奴やが、が大胆たんだんなる人ひとなき折せを覘うかがふて、我子わがこ舎やに潜ひそ入りし、東西とうざいを盜ぬん爲ななるべし、さるを趕おれて逃にるとして、相公さうこうのねん、碟さを搯さらきし、一ひとつらた、たあらぬ罪戾つみざら也なり、且また細こめて後のちにこそ相公さうこうに申上まうべけれど、分説ぶんせつさせぬ、伎倆ぎりやうの早繩はやなづな團だん々々卷まき、細こめて手拭てぬぐいをもて、猿轡さるづつばを銜はせて、這個ぜんこ板厨ばんぢうの内うちへ抱抗いだかつゝ、戸かどを閉たたり折せから他たが朋輩ほうばいなる雜色ざしきの甲乙かへつが來きつゝ、見聞けんぶんくもなきにあらぬと、偷見ちうけん也なりといふに、より誰たれとて憐あはれもの、いなし料りやうらざりける枉難まがたがたに、身みの囚徒しゆととありしより、世よをも人ひとをも恨うらしと思おもふ、甲斐かひあらず、縲紲しほり物ものもいれず、音ねに泣なくのみ、今いまさら思おもへば、鬼おに右衛門ゑもんが慈悲じひの眞まことの慈悲じひなら、で只ただ淫慾いんよくの與ともなりしを、知らず、餌えに寄より、圈套かいはに掛かられたるこそ、朽くをしけれ、斯かれ、今宵いまこゝろ更さら闌らん

て怨を遂んと欲する歎然す。主君に聞わけて罪ないとするにぞあらん。透を得ば立出て脱去らばやと尋思をしつゝ、年来信ずる觀世音の御名を唱て有ける程に、その甲夜の間、御酒宴ありとて庵厨働き勤しげにて、人の往返の跡絶なければ、毫ばかりも去る便を得ず。小夜深しより、猛可の驟動討大刀音の烈しく聞へて、修羅の街衢に異ならぬ。我身も俱に殺さるゝ歎と思ふ胸のみ轟きて活たる心地せざりしに、事果て却金瘡人と思しき這人さまの懺悔話の波聞へしより、亡母親いひ遺されしをしも思ひ合しつゝ、哀しさに憶せ泣聲立侍り。這人さまの假名川なる目四郎とのでましまさば、我身の實の父なるべし證據の今方いられしとぞ。那腰着の迷子牌は是ぞ實父の記念なる環會ふ日のありもせば、照契にせよとていぬる比母御の遞與給ひしを護身囊に藏めつゝ、肌膚放さねを這里に在り是擲せと、速しく項は掛たる肌膚神符を披きて出と腰着牌を小六はやく受取て手燭は照して左見右見つゝ、武藏州荏原郡假名川客店肝入之兒子目四郎と聲高やかよ讀ながら且感じ且喜びて、目四郎正可よ聞たる歎この證據のあるから、この巡禮の一少年名を庶吉と召なすもの、和主が落胤疑ひなからん名告をせよと召活る聲もる共に、庶吉の金瘡人に絆と携着ておん身の我等が爹々よの冤屈の答

に囚れたる禍還て福とありておん目に掛りぬる喜しさに就て又最哀きの這深痰故の儘にてましまさば、あはも醫療の届んに左の腹へ刃尖を突立給へいと、しく苦痛さこそと推量られて憑しからぬ今般の對面遣いで過さば斯までに歎きのせじを現身の命に限りありとて、もなほ姑且の存生て思ひ限なく宣ふよしも聞べきよしもいりして、よやよ喃々と揺動して聲を惜す泣にけり。這回今だ盡さねども張敷こゝに限り有ば巻を更て這次に復解分るを聴ねかし

開卷奇驚俠客傳第二集卷之一終

第十三回

義烈を感じて俠民身首を歛じ
 靈夢を説て聞人墓表を建つ

復説巡禮庶吉が初て實父を認めぬるその孝順の切なるに、耳无山も鎮くべく、山柵花も物い
 はん況や五常を具足して世に萬物の靈といへる、人木石よあらざれば、子ゆゑの闇を今ぞ知
 る恩愛情狀愛歎悲泣に死苦を忘れし目四郎の愁然として頭を擡げ且庶吉を見右見て原來

獨子の音間に産せし這身の胤でありけるよ親をいひん面伏なる這年來の我うへん豫傳へ
 り聞つらん和郎が養父の武士ならせや六稔以來母共侶も廻國せし如何なる所以ぞ浮世の
 餘波に聞まほじといふ聲細る霜枯の虫あらずに露寒き涙に哽ふ庶吉のやうやくに目と推
 拭ひて我身の養父の楫取老母介朝行と喚れたる微祿なれども新田の譜第脇屋少將に仕へま
 つりて船田殿の夥兵なり最新新田の城に在りし時生育なかりしそがうへに前妻身まかりた
 りければ母御の我身を携て那後妻になり給ひぬと年歴て後に聞知りよき恁而爹々の程もあ
 く右少將に俱しまつりて陸奥の國府二年を累ね義隆奥を落給ひてもなほおん伴にさむらひ
 て武藏相摸にありける比まで我身の母御と共侶にさほ上野に遣されたり斯而九ヶ年前つ夏
 義隆討れ給ひし比爹々の朋輩の夥兵幾名と歎共侶も厚木なる御旅亭に留置れて這底倉への
 將てゆかれず纒に近臣五名をのみ從へ給ひし御運の微なき這里にて亡させ給ひしよしのは
 やく原木に聞へしかば威散々に落亡たるそが中に我爹々の世も從ん事を欲せせ我の微職
 の武夫なれども三世當家に仕まつりて君恩尤淺からず然ると本處も留置れて末期のおん伴
 せざりし遺感かるとながら今いしも是非に及ばす切て殉腹撞衝て五家臣達も異ならぬ世

に忠信の志を果さんものをとおもひ決めし事情を恚々と寫も遺してその夜艾竟に刃も伏給
 ひぬと風の便りに聞えけり母御此歎の然ぞありけん我身七才の夏也けれバ只愛とのみ思
 ひつ、明し暮して三稔を歴たる春の季より時疫流行て母御の親族爹々の氏族も大かたなら
 ず身まかりて頼む樹蔭のあらずありたり當年母御の宣ふやう我身備を携て老母介主に添ひ
 しより才に一年許よして峯上隔て山雞の一所も棲せ年を歴て俟甲斐もあかりしより有藥
 に頼む弟兄さへ所親も遺なく死亡しに慙に活残りし過世の業報竭すやありけん後の世さ
 へに心もとなし這里にて餓を等んより亡君亡父の菩提の與に靈山靈地を巡禮して佛の冥助
 を願ふべし如右こゝろ得よと告示されし逆旅の準備の杖と笠の外に東西なき親と子が馴に
 し里と立出て乞食してゆく幾百里坂東西國六十餘ヶ所の觀世音を拜み奉りさほも諸薩垂跡
 の靈場をうち巡ると既に六年に及びしかば今茲の貌姑峯に趣きて亡君を吊ひまつり厚木の
 里に杖を曳て亡夫の墓に詣んといひれしにより共侶にうち除來ぬる這山路にて思ひがけあ
 き母御の病着既も危く見ゆし折我身を枕方に召近着て今まで具に告ざりしが備の實の爹々
 ありその故の箇様々々とおん身の事を告知され親子の證據に贈られたる迷子牌の事までも

こゝろ得さしつ頭陀袋を播擲りて牌を遞與給のし親の歎きの後の事。母只一人子一人なる旅宿の心細かるよ。我身まからば誰をかも所縁も浮世を渡りやせん切て廿になるあらば牛にも馬にも踏れしを十五といへば年不足にて季多詭辰の小胆兒愛に熟ても又いくばくの劬勞しつべし。痛ましや實の爹々いといとやくより身持悪くて家を喪ひ往方も知れなり給ひさし程。歴て傳へ聞しかを然とても鬼ならぬ人の心のなからずや。名告も遇ば親也子也斷とも絶れぬ血絡の恩愛よも看殺しにへえ給へし。舊里なれば假名川人よ。問ば所在の知れもせん尋よかしといひ遣されし。母御の靈の導きてや料らす環り會ながら。親子の宿因短符の明るを等ぬ死別れ。轍の跡の水を喪ひ降の猿の樹に離るゝも我歎きにいよも倍さし悲さかなと聲立て腸を斷孝子の哀傷聞くよ得堪ぬ。目四郎も涙坐に庇て。原來和郎の養育親の脇屋殿の御内人。船田主の夥兵なりし。敷這方さまこそ右少將家の公達にてまします。則和郎の御主君也。養實二君の志を繼て忠義を盡しねのし。さてもく〜とばかりよ舌も剛りし。必死の苦み勵りながら庶吉の小六に對ひ願をつきて。世が世であらばおん目通りを允さるべきものあらねども親の忠義を思食て使せ給ひ。有がたからんといふに小六の感涙に目をしばた。き領さて貧賤憂苦に人

とありても物のいひざらぬ。才器の程もいと愛たき。孝子の哀傷查したり。我年來の志願を遂て冤家藤白安同等を斯餘波なく討果せし。儂の實父目四郎の案内の幫助に依て也。今よりして何處まれ俱して苦樂を共にせばやと思ふにも似ず。惻りし自殺の本意をかりしに。料すも。今亦こゝにその子を得たり。人一善に進むとき。則一善の果報あり。又一惡を行ふとき。則一惡の業報あり。譬ば環の輪るが如し。惡を去り善に與して。且義の爲に死して悔なき。目四郎の終焉にその落胤の孝子に値遇して。後あることを知る。歡びに陰徳陽報。慙たす造化の精巧。一大奇事。神出鬼没といひまくのみ。やや目四郎。今よりして這庶吉。我伴當且弟ともおもひ做して。久後までも看届ん。是を末期の心やり。成佛せよと宣諭を深き情に。親子の歡び。目四郎の血に染たる左の隻手を推抗て。戰れつゝ幾遍歎。小六を拜む。嬉しさに心寛みて。忽地に絶なん。とせし氣を激して。眼を睜る。聲細やかに。噫有かたき。一期の洪福親の衆目を欺く。與ふ死して榮ある小官人の。ねん身代りに。死天の旅子。又二世の忠臣と。做も登らん。逆旅のおん伴那世。這世と身ひとつをわきて。ぞ頼奉る。孩兒がうへ。安かれども。なほ安からぬ。我死さば。美事に腹と祈らずも。わらば。居多の敵を殺盡せし。本事に相應し。からせとて。後に疑ふもの。あらんと。思へども。朽を

しゃ。武士ならぬ身の悍くても、又尖才に一二寸突立しより心後れて、思ひの隨に引繞す事も得
 ちらで半生半死の容佳らぬの我ながら矢傷野豬にも劣りたり長物がたりに天や明なん是ま
 で也。と右の拳を左手を掛てキリキリと腹一文字に掻切る程よさを漬る鮮血と共に大腸小腸
 顯れ出て勿地變る面の色も今ぞ浮世よ別れの一呼吸見るよ得堪ぬ庶吉の派に心くれ竹のよ
 と泣つゝふし沈む哀傷さこそと小六が引接南無阿彌陀佛みだ佛と唱る六字四苦八苦七ツ
 の過て向明の鐘鐺々と鳴沙る彼誰時と生滅々已寂滅爲樂と目四郎の刃を抜て腕頭を掻んど
 しつゝ兩三番突外しつゝやうやくよ吭管掻切てぞ俯たりける登時小六の身を起してやよや
 庶吉哀別に得堪ず歎きに這天を明さは目四郎が死の面筋となりて身も亦俱に捕れん路次の
 備に一刀を分捕して快立ね記念の牌の拿歛めし歎東西な遺れぞと獎せば庶吉やうやく涙を
 禁めて身と起しつゝ那這ある戸骸の頭に遺散たる刀を一口取抗て這亡骸の那腹黒き鬼右衛
 門にて候へといふに小六の見かへりて原來其奴の這頭に在りて嚮に目四郎に討れし也。その
 兒の仇と知らずして討し愉快討れし因果靦面斯こそわらめ快這方へを先に立て又庭門
 より出んとするに天結陰雨降りそよきて垂明空の赤は闇かりいかにせましと見のへれば

這縁類の片隅に篋と笠と多くありこの安同の若黨等が盤敷買かへりの準備なりしを是究竟
 と庶吉よ奪出さして共侶よその篋を被つ笠を引提て主僕いとしく出て小六の既に一丈
 あまり先に找みら左右の樹蔭に思ひかけなき人ありて癖者等を喚禁る尖さ聲に晃く白刃
 んとせしを笠投着て身を論せし小六が修煉に這那足を救れて帳ぶを透させ振撃よ一人の首
 と墜落して返を刀に又一人と起しも立走下と斫る窮所の深痕に苦を叫びて仆る身邊へ
 吉の走近つき驚きながら音踏さ事やといふ聲よりはやく小六の透し見て庶吉其奴が十々滅
 を刺し這等の外に外面に遣りし敵のよもあらじといふ間に庶吉の武林はじめに十々滅の一
 大刀さして往方へ足柄越を京師のかたにと共侶に滑出つゝ路なき路にわけ入る山の雨露で
 も袖に露けを衰出の父の横死と亡母の事のを胸に有明の月を燭に落てゆく主れ俱してぞい
 るぎける原るに庭前にて小六を柱えて撃れたる一個の安同が奴隷の良にて能悉耳菜八を喚
 做せもの又一個の厩介と喚做たる安同が馬の鐵奴也這等の殊に酒を嗜て醉臥とさし隠るま
 で死人に等しき酒癖あり壁は那剗玄石が一千日の醉に似たればこの故よ身の務の等閑にな
 る事ありて主の咎めにあへりしも數番なりければ日属の俱に禁酒してをさく傾みたりけ

れども。主の安同が湯治し果て氣賀かへりの前祝に今宵も酒宴あるよしを耳朶八はやく聞知
 りて。怒る折も我ひとり。喚ばば生甲斐なきに似たり。夜に奉公のなき身なるに。甲夜過てこそ
 喚べけれと。尋思をしつゝ。酒肴を多く竊みて。準備を整へ却同病を相憐む。既介をその身の子舎
 に招き寄せ。密意を示して。他と敵手に献つ。酬れつ。思ひの隨に酔たりければ。それが儘俱に睡臥て
 主の安同が撃れしを知らず。その曉がたに耳朶八の内。逼りけん例より。快く眼を覺し。淨手せん
 とて。起出し折大變を初て知りて。酷く驚きおそる。峴ふに。約莫道浴館に在と有る主も家縁
 も。皆悉撃果されて。残るゝその身と。既介のみ仇の既立退けん。そが中。一痕を負ふて。災難たる
 が一兩名面亭の。ぬたに在りと思しく。其聲の聞はしを。峴濟し竊歩して。故の處にかへり來つ。却
 既介を幾番と。かく搖覺つ。恚々を件の異變を。報知するに。既介も亦驚呆れて。いかせましと。
 相譚へば。耳朶八雲時沈吟して。主從遺なく。撃れしに。只我等のみ恙もなきを。醉臥て。そぞ知らせ
 と。いふとも。聽るべき事。にのわらせ。逃たるな。ぬりと。疑はれて。縛頭を。刻られん。然ば。とて。道儘に
 逐雷して。内閣からぬ。身を暗して。一生が。い世間。陝くありぬべし。所詮。出處に。埋伏して。面亭の。賊
 の。退く折。不意に。起りて。討捕らば。我と。和主の。功名也。然とき。の。後難なく。面を。起すのみ。ならで。官

府沙汰も宜しからん。這義の。奈何と。聳くを。既介。聞て。一議に。及ば。然ば。準備と。すべけれと。て。身
 装しつ。刃と。引提て。又。那這を。峴ふに。庭の。かたなる。縁類の。雨戸。外れて。ありければ。原來。賊の。道里
 より。入りたり。出るも。庭門。あるべし。と。俱に。聳き。領きて。竊に。庭に。立出て。雨を。樹蔭に。凌ぎつ。今
 か。と。等たるを。小六。知らず。庶吉に。先たちて。はや。庭門。より。出んと。しつるを。耳朶八。既介
 と。聲を。合して。左右。より。撃んと。找みし。計策の。圖も。當れども。技鈍ければ。台期。せ。老。這。那。俱に。小六
 一撃。れて。人にも。知られ。せ。なり。に。けり。恚れば。耳朶八。既介が。相謀。ひたり。ける。趣の。小六。といへ。せ
 も。是を。知ら。せ。況。安同。が。驚。の。這。時。通て。命を。隕して。後に。傳る。よし。か。かりしに。程。經て。耳朶八。が。女
 房の。良人の。枉死。を。うち。歎。さて。降巫の。元絃。を。降せし。折。終。恚々。と。詳に。報たる。により。件の。よし。を
 纒。も。悟る。も。あり。ける。と。ぞ。しか。れ。ども。耳朶八。の。その。宵の。仇を。小六。なり。き。と。知ら。ず。撃れし。もの
 なれば。降巫の。招にも。這義。の。降らす。この。是。後。話也。看。官。宜く。查す。べし。然。桂に。底倉の。色。長。の。け。ふ
 安同。が。氣賀の。宿所。へ。立。還る。よし。猛可。に。聞。ぬ。て。昨宵。夫役。を。宛。られたれば。右。邊。屋の。主人。と。俱に。
 土民。幾名。歎。駈。催して。小。荷。駝。を。牽。せ。竹。輿。を。吊。せて。天明。時。候。浴。館。なる。門。前。に。伺。候。しつ。門。戸。の。開
 く。を。等。たり。ける。日。は。や。高。く。升。る。まで。寂。寞。と。して。音。も。せ。ざ。れば。大。家。齊。一。訝。り。て。堪。へ。ず。門

戸を敲けども絶て應のなかりしかばいよく疑惑の胸をからせこの故に邑長の石壁屋を連
 立て外面を那遣とうち透りつゝ規ふ庭門の戸のみ開きてありしを訝りながら闖相る一樹
 下にむごく斬られて仆れたるもの二人ありこの什麼と驚譟きて先夫役等に報知せ大家裡面
 に找み入りて相れバ無惣や安同主僕並に數を盡して身首處を異にしつ鮮血に塗れし亡骸
 の間毎々々に累々たり又奥と曲亭の間腹搔折て俯したるあり相るに御内の人ならせ仇な
 るべしと猜するのみ後に安同の臥房なる隔亮に寓遣したる數行の文字を見出して昨宵藤白
 主従の恚名殘なく擧れし助則といふ狂者が脇屋義隆のおん與と蓄き怨を誓めしなりと
 初て越に悟るのみ然則在るべきにあらざれば邑長の石壁屋の主人と俱に安同が氣負の宿所
 に赴きて解恚々を訴へけり然ば藤白の從類の思ひかけなき凶變に一家の周章沸が如く老黨
 若黨一騎馳に多く底倉に聚來て亡骸を檢つ衆議を凝らして那遣と部を定め或ハ汗馬に鞭を
 鳴らし鎌倉に赴きてよしを管領家に聞かわけ或ハ夥兵を從へて仇の餘類を索るもあり又氣
 賀へ走還りて安同の妻長総に底倉の爲体並に老黨等が衆議の趣を具に注進しつるも有けり
 左右する程にその次の日鎌倉管領持の執事上杉憲定入道の沙汰として三浦新介平時高檢校

使を奉り伴當多く從へて底倉なる浴館に來着しつ且多かる亡骸を甲乙と檢し果て安同の老
 黨並に邑長等が稟すよしを曲々に問糾せども安同主従の擧れたるその宵の事を知るものな
 ければ衆口総て分明ならせ自殺したる一個の仇は是則遺墨に見えたる助則と喚做せものに
 て義隆の舊臣なるべししかれども單身にて恚居多なる敵々擧果さん事あるべうもあらず願
 ふに助大刀の支黨ありてはやく退散したらん歟其頭の照驗あらせやとて緊しく質問れしか
 ども大家知らぬ事なればとばかりにして云甲斐なし尙道一個の仇のみならず數を盡して擧
 れたる安同主従の不覺言語同斷今戰國の武士に似げなき狗死といひつべしされ主僕の亡
 骸の汝達宜く執做て後の御沙汰を等かねし又助則ハ賊徒也はやく當所に梟首して餘兇を懲
 すべきもの也と嚴に宜掟て却時高の鎌倉へ歸府の馬蹄をはやめけり去程に安同が横死の風
 聲隠れなくはや藤澤へも聞かしか著演竊に是を訝りみづから巷に立出てなほそのよしを
 うち聞くに安同主僕二十餘名のいぬる夜源助則といふ狂者に囁にせられたる爲体の恚々也
 那助則の義隆主の舊臣にこそありつらぬ年齢の三十許嵐桃花面相にて蒼髯あり箇々々の
 打扮にて美事に腹を斬たるが藤白殿の臥房ある隔亮に遺墨ありこれによりて復讐の事情の



底倉風葬著演
 竊探虚實

知られしこそ。このきのふ現て来つる人より傳へし實説也。とて奇談に誇るものさへありけり。その言大同小異あれども約り里の戸毎に額を集め耳を傾け諺ふよしとうち聞くに皆道順のみ也。ければ著演いよく疑惑ひて左さま右さま思ふやう世に同名の人多かれども安同主僕を撃たるもの諺と小六がとづから撰とし名乗と同じさもいと奇也。又その人の面貌と年齢を問考るに目四郎によく似たり。非餘同名也といふとも小六の既に古人にありぬ。又面貌と年齢と似たりといふとも目四郎が小六の諺を知るべくもあらざ知らずして假名の暗合したる事あればとて目四郎なごが本事みにて二十餘名の大敵を撃集す事あるべしや。憶ふに作の助則の實は世の人の猜せし如く脇屋殿の酋臣ならん。その誰にもあらばあれ。單身にして亡君の與にその仇二十餘名を嗣にせし武勇忠誠今昔獨走の英雄也。俺不幸にして慙る人に交るを得ざりしかども新田の家臣と聞ぬれば空谷逢音の思ひあり加之安同の小六が與に父の警俺身にも亦恐みを結びて害せんとのを計較たるものにしむるを料すも擊集されし未見の死友我身に執ても義俠といはん慙れば我亦その首級を諺すのあるべからざ。要こそあれど尋思をしつゝその背妻の晩稻にのみ意哀の機密を諺やき示めて。次の日の朝未明に獨背門

より出てゆきしを奴婢們的知らで。おほ宿所に在りと思ふも多かりけり。却説野上著演の笠深く戴き、底倉を投て赴く程に。日の長ければ路次をいそがす既にして黄昏時侯より底倉の里に來て梟たる首級を尋るにけふのはや第三日になりぬ。這山里の申明亭に尙これありと聞えしかば。懸て其處に赴く程に。日の暮果て烏夜なれども其里に夜を成る土民們が高張燈を點し建て。火を焼くものさへありければ。其邊數間四方の月の宵よりも明かりけり。著演これ便を得て梟たる首級を熱視るに。噫。這首級の今さらに疑ふべくもあらざりける。目四郎なるにうち驚れて。睜きもせ。雖相々々些も差錯なかりけり。尙成人の愁に我を怪むともやと思へ。バ久しく歩を駐め。老其頭を過る如にして。走退きつゝ。又鵠立て。肚裏にかもうやう。那目四郎のいぬる比小六が旅宿の伴をせんとて。我に約せし事あれども。小六が横死にその義を果さず。を朽をしく思ふをもて。命を棄て安同等を討果して自殺をしけん。這推量に差はず。他一旦の恩義を感じて。竟に我身に係るべき枉難を刈拂ひし也。その思へどもその迷墨に源助則と署せし事こそこゝろ得ぬ。その助則の小六が諺他がみづから撰みしを。我ぞら知ず。死後に及びて。金を包みし措字紙の中より初て見出した。りける。をはやく目四郎の知たる。賊知ずば小六が諺を署して。

孝義と他に譲らんや這等凡夫の了簡及及びがたかる大奇事あるに目四郎の若生親の
 假名川の逆旅主人にて那身の無頼の博徒也悪技よハ熟たりとも武藝勇悍千万人に捷れしも
 のよハあらせかし然るを只その身獨にて二十餘名の大敵を廻にしたりし奇中の奇事とい
 ひつべし凡慮の及ばぬ事ながらその縁る所を復推量るに嚮にハ本意を得遂ぎして世を早う
 せし小六の亡魂那目四郎夢縁て實父の與に怨を雪め且我與にも仇を倒して未然の利害を
 除きしもの歎尙去る鬼祐微りせば目四郎なンドが本事よていかにしてよく做得んや小六が
 靈の馮たればこそ目四郎ハ知るよしもなき助則といふ諱を那遺壘に署せしならん恁考合す
 れハ初の疑心氷解して思ひ半に過るよ似たり去るにても目四郎ハ當初安同に密事を頼れた
 るものぞれば藤白の若黨が認りたるもありけんよ夫等ハ遺なく討れし歎今よ至て助則の目
 四郎たるを知るものなきハこも亦一奇といハまくのみ我も初ハ這義と悟ら傳只その孤忠を
 感ずる隨よいかで首級を取歛めて葬らばやと思ひつハ潜びて這里に來よけるに思ひしよし
 ハなほ疎函にハ既に目四郎なりけるを方今面前に見るからハ手を空くして還らんや明日那
 首級を取卸して棄らるハ折拾ん歎更深て今宵奪ん歎いかにとべきと胸よのみ思難つハ惘然

となほも得去ら傳在りける程に忍地後方の樹立の間に人四五名聚合來て密談の聲してけれ
 ハ著演驚き且訝りて竊歩しつハ其邊に稍近着て立聞ハ他等ハ地方の莊客ならんそが一人の
 尋くやう九ヶ年以前この地方を藤白殿に賜りて領知せられしより以來年貢ハ故例に倍して
 責償らるハのみなら老村に課役ハ問なく時なく宛られて耕作の便着を失ふと多かりといハ
 ば又一箇の同家がさればとよその事なれ今番の湯治遊興に民の歡きを思ハれねば温泉に生
 活做すものハ坐して喰ひし五十日困窮至極したるのみ旅客聚合來ざりしかば誰とて泣ぬハ
 なかりきといハば又一箇の同家が患ハ我里のみにあらじ山より東の農戸の藤白殿に瓜を
 剥され身の膏肓さへ這年來採竭されしも多からんに主の横死ハ没性の幸ハ世の鄙語に瘦鬼
 もて仇を報ふといふよしも是等の情由でありけんかしといハば大家笑坪に入てこれよ就て
 も梟首せられし助則と歎いハ猛者ハ這一郷の城隍也那人ハ新田の餘類脇屋殿のおん爲に命
 と捨て大敵を盈にしたる大義精忠世の人通て譽ぬハなし因て今より密談して那亡骸と葬る
 べしと我も思ひ人もいハば這頭へうちも聚合へし也梟首ハけふまで三日に及べば明日ハ首
 級をとり棄られんその折密ハ軀をも共に柩にうち歛めて里の寺院へ送るべしといふを一人

が推禁めて否葬るゝよけれども間近き寺へ遣しなば那方さまに奥着られて蓄害其首に起るべしといふに大家有理と應てしからば左せん右せん歎て商量果しかりしかば一個の同家が沈吟じて這里より那里と擇んより藤澤ある遊行寺へ昇もてゆきて葬らば路の程迥にして後々までも後安けん且那首に福良長者と喚れ給ふ郷士あり義の與ふ財を惜まで人の難義を救せ給ひし廣大無量の慈悲功德の風聞這里にも聞えたり遊行寺の那香華院なれば戦死の鬨一萬許を拾集めて葬り給ひさそれのみならず施主絶たる石塔に月々に楮を手向水と沃ぎ盂蘭盆毎に人々の興に布施して菩提を吊ひ給ふその慈悲多く枯骨も及びて拿除かるべき墓碑石塔も歴然としてなほありと藤澤人の噂に聞にき恚れば明日那助則の首級を竊に遊行寺に昇もてゆきて恚々頼みまうして葬らば福良長者の聞知りて後々までも無縁亡靈と俱に香華を手向らるべし這議の甚麽と聾くを大家聞つゝ感心してその議定は精妙也然らば明日桶極に首級と軀も竊も歛て暮るゝを等て擡出して通宵走りなば曉がたに那寺の門前に到るべし同家多きの漏易かり這一夥計にて事足りてん翌の術與を錯にちと迭に謀し合せけり去程に著演の料らす件の密談を遺もなく聞果て密やかよ退きつゝ更に心よかもふや

う善に與して悪を輝るゝ通ての人の心なれども那里人等が這地の主の死を歎びて親しからざる目四郎を憐むは是俠氣の所行にして安同の年來の貧墨邪慳を知るに足れり恚れば今宵我手を下して首級を隠そに及ぶべからず那里人等が相謀ふ隨意我香華院へ送らせて後に我亦施主になりて目四郎の菩提を吊るゝ世に知らるゝとわらずして後々までも安かるべし吁然也と肚裏に分別はやく決りけり這時暮て程もあければ著演の底倉にて急要あれば藤澤の近村へゆく旅客也といひ誘へつゝ籠夫を央ふて足と多く取せ件爲竹輿にうち乗りてその通宵走せければ天のまだ明老藤澤なる宿所近く乗着けり登時著演の藤澤の里の入處にて竹輿よりはやく立出て轎夫を遣し遣し宿所の背門に立在て人を喚き戸を開るゝを等得て奥より赴きければ出る折も還りし折も知るもの絶てなかりけり然而著演の妻の晩稻も底倉の爲体及目四郎が事の趣箇様々々と聾き示せば晩稻の胸を潰して且感涙の進むを覺せ小六が事さへいひ出て雲時の歎きに堪ざりしを這時までも貪睡て母の傍に臥たりし奴婢介も目を覺しけん件の緯の趣の末をのみうち聞いていまだ初を知らざれば身を起しつゝ母に對ひて根掘り葉を欲り問しかば著演の隠す由を聾き示し口を禁てあかして

是等のよしを漏しおせると戒めけり。恠れハ約莫江湖上に目四郎が義死せしを知りたるもの
 野上親子三名の外に、いまだあらず。況小六が陽殺して亡父の怨を雪めしよし、神あらぬ身
 の悟るに由なく、歎きの越に彌倍たり。恠而野上著演のなほ思ふよしあるをもて、這日遊行寺に
 参詣しけり。大檀那の事なれば、住持の上人そが儘に、方丈に招入れてはやく對面し給ふ程に、看
 茶の禮既に訖りて、四表八表の語次に、著演の住持に對ひて、恠申さば何とやらん浮きたる言に
 似たれども、昨宵某靈夢を見たり。譬ハ全身鮮血に染たる。一個の勇士忽然と枕方に立て告るや
 う。我のいぬる夜横死のもの也。底倉人の幫助によりて、明日遊行寺に送葬せらる。願ふの和殿施
 主になりて、菩提を吊ひ給ひぬかしといふ歎と思へば、駭覺にき夢の五臟の疲勞にて、憑むに足
 らぬ事ながら思ひがけなき奇夢なれば、うちも措れ申そのみ。這事果して應驗ありて、けふ尙
 柩と當關若に送り來ぬるものあらば、法慮に稱のぬよしありとも、その安葬を允させ給へ異
 日に官災その餘も口説の外より興るとしもあらば、某給て身に引受て、左も右も計ふべし。這義
 を頼申さん與拜謁を請ひまつりし也。といふに、住持の異議もなく、いなる趣こゝろ得たり。
 滅濟の出家の所役況、劍難横死のものを濟度の彌陀の本願也。もしさる事のあるならば、宜く葬

り得さすべしと、早に承引給ひしかば、著演斜あらず喜びて、しからば明日又参詣して夢の當否
 を知らまく欲と、その折見参すべけれど、告別して退出にけり。左右する程に、その次の日よか
 りしかば、著演の準備の布施物を、伴當に齎して、又遊行寺に赴きけり。登時住持の上人は、やく
 著演に對面して、きのふ施主の告られたる靈夢の果して應驗あり、今朝未明に底倉より柩を昇
 もて送り來ぬる里人等一火あり、その仁兵義有衛禮作智六信三とか喚做す。五名山寺門を敲き
 て願ふを聞くに、この罪人の亡骸なれども、稀なる義士で、いへば我々竊に相謀て、當院の土に倣
 まく欲と、いかで葬り給へといひけり。よりて先役僧をもて、緯の仔細を問せしに、件の尸骸のい
 ぬる夜、艾底倉ある浴館にて、藤白隼人主従を名殘なく討果して、故主の怨を雪めたる。脇屋義隆
 の餘類にて、當坐に自殺したりしを、管領家持の下知に依て、梟首三日に及びしよし、まで詳し聞
 えにけり。當下愚僧思ふやう、凡常變死の亡骸也。ども容易執措さかたかるよ。况や是の管領家の
 寵臣主僕を多く害じて、梟首せられしものぞかし。非除那首の里人等が、忠義と感じて葬るとも
 近き道場に送らずして、遙々と我寺へ葬らんと欲するの故こそあらめ。こゝろ得かたかり、尙這
 事世に聞いて、官府沙汰に及びなば、その禍を我寺に移さんとの所行ならせやと思ひにけれ

早速に允をまじし事なれども昨日施主の靈夢といひ頼れたるとさへわれは枉て柩を留措し
 て那里人等を還したりかれどもいまだ葬らざるをさく施主の詣來給ふと等たるにこそ候へ
 ど潜やかに報給ふを著演つらくうち聞てかん疑ひに去るとなれども梟首三日の後ならば
 まで後難候べき底倉人等が里を隔て柩を當院に寄たるに上人の不二法徳を仰ぎまつれる
 故なるべし某既し那義士の靈魂に頼れたるを果さずの倒に崇を免かたからめ好も悪も著演
 があらん限りは毫ばうりも御寺に難儀を係奉らじいかで葬り給へかしと請求ると切なり
 ければ住持の上人黙止し由なくその意に任し給ひけり當下著演喜びて聽て納所の老僧を招
 してつよしを告て即便義士の葬式料七々の讀經料大衆へ布施の銀子まで目錄に合して遞與し
 けりしかれども日のある程のその憚なきにあらざこの黄昏に葬るべしとて且葬式の準備あ
 り著演主僕に茶を薦め夕饌を差めなせして姑且時を移す程に既に黄昏になりしかば道人
 等の鐘を鳴して衆徒と本堂に聚合しめ沐浴小舎に容惜したる那義士の桶柩を擡出して本堂
 なる彌陀の御前に昇居けり亡者の梟首の密葬して觀る影もなき柩成ども施主の當山の檀
 那なる著演が財を捨恁執行ふ葬式なれば讀經の大衆二十口住持の引導の偈句を唱て更に法

坐を占給へば鉦を鳴らし木魚を敲く追薦の法則町堂也絳果し折著演の道人等に指揮して件
 の柩を小六が墓の傍に深く埋め殯を締せなどして更闕て宿所に還りぬ這日の伴も立たるに
 字六と面七なりけるが事情を知らざれば又是老爺が事を好みて施主なき亡者の施主になり
 て可惜鈔を費を樂しげに見給ふひとと竊にわざみ笑ひけり是よりして著演の目四郎が
 七々の忌日毎に寺に詣て柩を手向すといふとなくその卒哭忌に墓石を建て義士目郎之墓と
 いふ六大字を勒しけり去程は底倉の里人仁兵義右衛門作智六信三等のいぬる夜義士の柩を
 昇て遊行寺に赴きし折住持の早に允し給ひて問答數回に及びしをやうやくに乞課て一貫
 文の鐳錢と共に桶柩を役僧に遞與して聽て逃るが似く走りて底倉にかへりし後ハ九
 ゆくべき要なけれど心に係らざるよあらねば折々噂をまつるのみ夏は過て秋もはや八九
 月に成りし時候仁兵の人に央れて鐘倉に赴きたるかへさに遊行寺に立寄て那義士の葬られ
 けん墳也とも觀ばやと思ひて墓所に至りて那這と多かる石塔を相亘とに館某之墓と勒した
 る墓の傍に尙新しく磨立たる墓碑ありて義士目郎之墓と勒したり是歟と猜してなほよく相
 るよ左右に誌せし歲月の應永十八年四月廿四日とありさればこそ是なまり智六が逆の了簡

り何等の疑ひいへきと言爽に議したりければ評定故老の甲乙も敢て異議に及び下官等も豫より思ひざるにあらねども那安同の御先代より出頭しりぞの寵臣なれば上の賢慮に憚りて慈にその罪を定めかね候ひき然ると佐殿房州の宣ふ趣公論也誰か感服せざるべき我々どもその餘のあらを御同意にこそ候なれと異口同音應へしと執事憲定入道うち聞て衆議の一律文の旨に稱ふて珍重なり他と重用し給ひしの上のかん解事のみならず愚考も亦安同を適御用よ立もの也と思ひにけるの便佞利口に惑されたる徳なりと現盜臣の一箇の利のみ這聚斂の臣の如きの民を虐げ毒を流してその害憶兆に及ぶもの也他が横死の公私の幸ひこのうへやあるべしと快げに諾ひけり恚而憲定入道の評定衆と共に伴に件の衆議の赴を管領家氏に聞ぬありて安同が罪過の事恚々也と稟せしかば持氏聞つゝ直と呆れて我のつやゝ思ひざりける他が奸曲言詞同斷又その横死の爲体寔は沙汰の限り也然バ汝達の定めし如く當にその罪に行ふべし自餘の事ハ云々と嚴に命せらる憲定これを奉りて即便三浦介時高を又氣賀へ遣して安同が采邑のさら也年來貧り貯たる金銀家財を藉て皆悉没官せられ妻子并に從類の遺なく本地を逐れけり然ば安同が老黨若黨雜色奴隸に至るまで那竹底倉よわらせして死を

免れたる歡びハ又掌を反とごごとく祿を喪ひ家を逐れて私財雜具と拿出せども近頭の里人も莊客も皆憎むのこ些も憐むものなければそを預け措く家ハあらず多くの途にうち棄て只崎の子と散すが如く緩の由縁を求めつゝ皆八方へ離散して往方も知すなりにけりそが中に安同の妻長総ハ原是相摸と甲斐の境なる丹澤の莊官某甲の女兒也十年許前つ比二親ハ身まかりつ家督の兄も世を早うして今ハ任の世あれども舊里なればそ此家の底に寓るべき事なるに長総ハ素より密夫ありそハ藤白の家の若黨にて拾笠小夜二郎と喚做すもの也長総ハ這年來その良人安同に嬖妾も居多あり荒淫強酒なりけるを喫醉く思へど禁むべき術なき隨に邪念起りて卒然らば我も亦道を守りて阿容々々と生涯巢成にせられんより要こそあれと尋思をしつゝ此彼と竊に擇むに近習の侍者小夜二郎ハ初安同の寵陽なりしよ三女介に寵を奪れ臘年も長たれば額髪を剃除さして近習の列に侍らしたり然バその人となり男子態美しく且管絃の技あども大抵ハ習得て婦女子に孝順なりければ長総此と密通して早晚樂みを取ると多かり恚れバ安同の討れし折も夫婦の情義敢からず悲泣の涙ハ外視のみ内心にハ小夜二郎と男妾にせまく思ひて忌憚るとなかりける樂みいまだ央ならで猛可に離別の哀みあり

當下長総思ふやう丹澤の我親里あれども既にはや世を累ねて任の家督になりたるに叔母を
 ればとて寓居る時刑餘の人ぞと貶しめられて東熊の頼みからず進退其首に谷りて後に悔
 しきをわらん所詮何郷へ赴くとも幸にして我財祿の間銀の多かるに我愛郎と共侶も浮世を
 渡らば樂しかりてん然りとて懸て小夜二郎に絆々々と密談して猛可に逆旅の準備を整へ兩
 三個の老黨にのみ小夜二郎を將て親里へ赴くよしをいひつしするに勢ひに附き榮利を料り
 し主従なれば今這折に主の安危を思ふものなく其身々々の損益に執も逆上て見かへらば從
 行んといふものあきを長総の倒に没怪の幸と嘗も咎めを我にの年の十あまり三ツも四ツも
 弟也ける小夜二郎久後かけて夫婦にならんと思ふばかりに人より先に出てゆく今を初の旅
 衣我所天ならぬ袷笠と投て往方の定めぬども京師のかたを心當にいくよ宿りにつく杖をち
 からに踏る足柄の足しに信て通りけり話分兩頭去程は館小六助則にいぬる日の曉がたに掛
 取庶吉を從へて足柄山にわけ登り都路遠く赴く程に人跡絶たる山路にて血に染たる衣裳を
 谷河にて洗淨め身甲と手鎧臙盾と庶吉が被たる禪衣へ皆その流水に推沈めて跡を埋め形
 を棄し却ゆくと行隨に雨に喰ひ風に梳る旅宿の憂苦ともものとも思はず愛る所の養父のうへ

に禍をかかれと念とるのみ約莫一句許にいて平安京に來にければ三條大橋の頭なる旅店に宿
 りを投めて夏果るまで這里にをり爰に南北兩朝廷のねん和睦ませしより京師の僅方も長閑
 にて前將軍義滿公にいぬる應永十六年に薨り給ひて三年になりぬ今足利四世將軍義持の
 治世にて賞罰正しからぬども故老の寵臣多く補佐して先代の武威餘りあればや叛くもの
 立地に伏誅して風波起す四民廢れし家業を興してあほいつまでも太平の國安かれとぞ祈り
 ける然る小六の世と潜ぶ身の這里も外視の厭じければ額髪を剃り成人にありて名を隠し氏
 を更め館に易るに達をもてして達小六と唱るのみ又助則といふ名と告らばある時の赤關
 ども唱へて出生の地を表しより是よりその名漸々に江湖上に高く聞えて世に遊俠を數るも
 のの小六を以巨擘としたりこの是後の事にして世の人いまだ知ざりけり問話休題却説小六
 の逗留の程日毎々に庶吉を將て洛中洛外這那となく名所故跡を歴覽して地理を考へ八景
 を測るに只慣り胸に満て野花山月も樂しうら老嗟嘆にへ太上天皇 龜山天皇も東宮にて渡ら
 せ給ひし小倉宮も恙なく御座すよし聞へしかども東路ならぬ京都にも憚の關多かれは今荷
 荷も思ひ立て訪奉るべきよすがのあらづ左右する程にはや三伏の夏過て京の北なる白河に

も秋風のたつ時候にありけり。そのとき小六ハ思ふやう由なや京師に旅宿を果ねてたゞ足利家の富貴を觀つゝ、遺恨ハ胸を焦せるハ、嗚呼我ながら隣りの寶らを數るに似て益あかりさ。いまより大和に趣ひきて吉野山なる先帝の山陵を拜み奉まつり、那首の舊跡古戰場を吊らふべけれど、尋思をしつゝ、遂に京師を立ち去りて、また大和路に遊歴と後醍醐天皇の宮陵ハ吉野の山の奥かどよ如意輪寺の御堂の背ろに御座となりけりと豫てさしをよすがにて、峨々たる高峰ハ攀登るに庶吉もまた年來逆旅ハ熱たる甲斐ありて、後に跟々俱に進きて、那宮陵ハ詣つ。是れ歎とばかり相奉まつれば、主僕且懷舊の涙だひとしく、吒みたる人間榮枯得失の理りを譬ふれば、梢ハ匂ひし春の花峯に彩る秋の楓、孰れかその根に飯らざるべき、現夢の世の夢なれば、貴き賤しき推並て盛んなる者必らず衰るふ世にこの生を請たるも、誰かこの死を免るべき。然しも十善の君として、天日嗣知召す御位の最も正可に三種の神器を傳へ給ひて、六名曲もなく治めさせ給ひぬる愛たき大御威徳にも任し給ひぬ、枉津日あり尊氏てふ賊臣の暴逆ハ江湖上また安からず、舊都のおん住ひ克ハせ給ひぬ、この行宮ハ年闕て、竟に崩御給ひける。そのおん跡を吊ひ奉まつれば、青塚苔滑かにして、石泉纖々と流れ、白揚早謝して、落葉離々と亂れた

延元四年 是年興國八月六日、這君崩給ひし比、一上達部一云侍の遺陵にて、今ハはや忘れ果へ

從忠房

さしにしへを思ひいでよとすめる月かなと詠たりしも、思へば今なほ一日の如し、悲さかあどいへばへに、いハ傳昔を忍るゝ小六ハ實前ハ隱居して合掌默禱時移るまで、意衰の所願を訴れども應るものハ野禽の聲峯の松風音添て、凄愴さを彌増ける。是より又後村上天皇の宮陵と拜み奉り、後龜山天皇の行宮の趾ハさら也、諸司百官の宅地見るに、就き聞くに、就て只斷腸の嫌となるこのみぞ多かりける。却山中の神社佛閣鳥路熊經の幽あるを、葛に携岳を傳ひて、遺さく巡禮し果しかば、更に又麓に下りて、或ハ笠木の山に登り、或ハ南將の古城を尋ねて、約ハ大和十五郡を隈あく、歴覽せし程に、秋ハ盡て多もはや、十二月中洗よなりけり、登時小六ハ又思ふやう、俺身幸あく生るゝ日の遅かりければ、南朝の奉爲に一層の力を盡すとあしといへども、切て一年三ヶ月先帝の御廟を衛りて、勸仕の微忠を表とせし。年ハはつかになりたるに、何處に春を迎んやとて、遂に吉野に山籠して、敢又麓に下らず、藏王堂寺の坊舎なる空寮を借賃て、姑且其里を宿としつゝ、後醍醐並に後村上の宮陵ハ參詣して、御垣を拂ひ、香華を獻るに、庶吉もよくこれに仕へて、割籠を脱ひ、谷水と汲なごす雪の朝雨の夕も、生僕の患、誠辛苦を厭き、那ハ請道に參て、最正

首に勤行ふ程よ今茲の暮て應永も十あまり九ツといふ春二月の時候になりけり。恚りし程に
 有一日庶吉の些の恙ありければ小六のみ快立出て例の如く後醍醐の宮陵に参仕へて且山塵
 埃を搔拂ひ然而氷を汲み櫛を献り姑且祈念しつる程に忽然として南の岑に琴の調の聞えけ
 り怪しや那方の山又山のみ人の住むべき所ならぬに何にかあらんと思ひつゝ念じ果て退く
 折心ともなく見かへれば蕭闌たる一個の了鬚の何の程にか後にをり莞やかに小六に對ひて
 とのへ脇屋右少將の郎君にこそをいそめれ我神仙嬢の將て來よと宣ひして等て那首に在そ
 也卒道方へと先に立て去向も告せ伴ひけり小六はいよく訝りてこの狐狸などの所爲なら
 ずやと思ふものから推辞よ由なく引るゝ隨に恍忽として跡に跟ゆく路の程その幾十町なる
 と記へずゆくど既に迫にしてと見れば岳石の累り立て五十尋あまりもあるべからんと思ふ
 ばかりある頂上は輝娟たる一個の女仙琴を膝よりうち乗して端然として跣坐したる身長にも
 餘る黒髪は肩より掛て匂やかなる桃花の脣臥蚕の眉玉よりも清白なる肌膚衣徹る綾羅の袂
 の翻翾として天津五節の舞樂は降らば花にも似たり金做と那身の光明は赫奕として蟾蜍靈
 免の殿裏に遊ぶ月かと思ひる五彩の瑞雲腰を遶りて身の中天に在る如く三十二相具足して



神仙なるを知るに足れり。とばかりにして其が頭に近着べき路のなし其處とるやと思ふ程に。白雲油然と足下に起りて凝りて階梯になりしかば。小六のなほも了髪に誘引れて梯を踏渉るに些も危きとあらで女仙の身邊に赴きたり登時件の了髪の腕に女仙に對ひて小六を俱して來つるよしを報て側に侍るにぞ小六も共にうち瞻仰て跪坐て氣色を伺へば女仙のやをら琴掻遣りて眼を開き小六に對ひて善哉勇士近く杖をね阿郎の忠孝世に提れて文武兼備の才長ながら薄命にして志をいまだ伸る所なし然はこそ鹿獨たる戰馬の間に生出て親に別れ君を喪ひ遂にその身を異姓に寓せて稱人と成ることを得たり。恁而其頭の厄釋て男子四方の志を果さんとしつるよ及びて先當山なる先帝の宮陵は仕へまつれる丹精賞とべしといへども後醍醐天皇の大御靈の這所にましまさず。今より七十有三年前の秋天皇崩御給ひし比賊徒浪治の御執着にて御靈の亡失させ給はず節に死したる文武の諸臣の冤魂を召聚へて道里の舊都へ程遠ければ御本意を遂させ給ふに便なきをいかゞせんよりて睿慮を旋らし給ふに龜山の仙洞に行幸を做し給ひんとて寶輦に御して出させ給へば百官前後に従ひまつり俗人の樂を奏して那里へ遷御做しまゐらせしを當時侍從忠房と京師の夢想法師の夢に正可よ見つると

ありけり忠房これを筆記して遺忘に備たりけれども秘して人に見せざりければ今なほ道義を知るもの稀也。恁れば先帝の大御靈の道御吉野の山に在さず然るを香華をまゐらせて仕へまつるの益なき所行也。この義を阿郎に知せんとて竊に招きよせにきと玉音妙に告らるゝ小六の奇異の思ひを做して額つきたりける頭を擡げ仰うけたりひひぬ然るに今より何處を投て立出てよからんや。又南北兩帝の御誓約ませし如く小倉宮の當今の東宮に立給ひて御世を知召べき歟。この義も示し給ひぬかしと問を女仙のうち听て阿郎の道里に要なきよしを今知りて速に立も去まき思ふとも又料ざる障りいで來て清明の時候に及ぶべし偶這地に春を迎へて開くべき花を等で邁ん遺憾かる事なれば急がで自然に儘せよかし却時を得て下山に及ばい。神風の伊勢よ遊びぬ那首の南將殘爐の北畠氏國司たり。勢に附き世に違ひて憑しき事あらざとも思ひかけなく故人にわらん。又小倉宮のおんうへに這次の御世知召とべき御前約ありといへども義滿義持胸狭く只南朝の皇胤を絶まゐらせんと思ふのみにて皇國の治亂に遠慮せず驕慢不信を旨として執政ぬる事多かればいかにともすべからず。その天いまだ定らで。人天は勝つ折なれば阿郎們が純孝孤忠も徒事になるに似たり。後の惑を解べき與に輪回

の理りを示さん。敏押後醍醐天皇のおん過世と考へ奉れば、則是天武天皇の後身にてをりしま
しけり。又北朝ある光明帝の嘗時天武天皇と御位を争ひて亡され給ひぬる大友天皇の後身也。
過世の御果報盡ざりければ、最初後醍醐天皇の北條高時入道が御位に即奉りたる持明院殿
光嚴を推退けて、建武に回復ましくたれども、いづれ程もあく尊氏が暴虐によりて世間乱れ尊
氏又光嚴のれん弟光明帝を執立まつりて、武威を華夏に振ひしかば、遂に後醍醐天皇の吉野に
潜幸ましく、南朝とわかれ給ひき。是より以降五十餘年諸國に蝸角の戦ひ絶ず、南朝の御
三世を累ねて三種の神器を傳へ給へば、文官武臣忠義の毎家を忘れ命を擲ち、後竟に一統の
御世に做ましく欲せしかども、時運至らず、西筋となりて、今北朝御一統の大御世とあらせ給ふ
事。前代に天武天皇の吉野の宮より潜出て大友を討滅し給ひし輪回によりて、今生に後醍醐
天皇と生出給ひて、那大友の後身なる光明帝のおん爲に、吳竹の世を陔められ、吉野の宮にたつ
霧の露ぬ怨と、患難て竟に崩御給ひし也。在昔天武と大友の御位争ひ、原是天智天皇の虚讓
名聞を好ませ給ひて、皇子大友のありながら、そを皇太子に立給ひ、皇太弟天武をもて、東宮に
做させ給ひ、その那虚讓名聞よて御本意より非りしを、天武の早猜し給て密に嫌忌の禍を避給ひ

義詮の
和訓太
平記に
ハヨシ
ノリと
と又一
説にヨ
シアキ
義教義
昭この
子孫に
あれば
同訓い
ふかし
き也詮
に就の
義あれ
バ實ハ
ヨシナ
ベリシ
なる

ん爲大友の位を譲り祝髪して吉野の山に世を不樂給ひし。こも御本意にあらざれば、御隠謀や
をりしませけん。大大御こゝろ安からず、左大臣藤原赤兄右大臣中臣金等と相計て亡なひま
らせんと欲し玉へる。その克既も急也ければ、天武の吉野を潜ひ出て近江路にて大友と天下併
ゆの戦ひあり、大友竟に戦敗れて陣中に亡給ひしかば、金等斬られ、赤兄も諷され、殘黨成伏誅し
て、天武御位に即給ひしより、大和州淨見原に宮造して世を御知と十五年遺朝より白鳳朱鳥の
年號を建立させ給ひて、姓を八種に定め給ひき。こを中宗と稱まつれる聰明睿智の聖主かれど
も、只御一代のみにして崩御の後、天武の皇后讚良皇女女帝と做りて、天下を知食にき、則是天智
の皇女大友のれん女弟持統天皇よて、よひしませ也。天武の本意を遂給へども、御一代よて又大
友のれん女弟なる持統天皇御位に即給ひしかば、是をその本意あるに似たり。譬ば北朝の光明
帝の尊氏に立られて御本意を遂給ひしかども、觀應二年に足利義詮が南朝の後村上天皇を迎
まつりて、姑且降参したる時、北朝の光嚴光明崇光の三帝の吉野に拿られ給ひしかば、義詮又崇
光帝の御同母弟を北朝の君よ做し、まらせしに、き後光嚴帝即是也。恁而義滿の時より後々、
持明院殿の御嫡流崇光院の御子孫のみ正統よならせ給ひ、なん然に、昔初後醍醐天皇と御位を

争ひ給ひし光明帝の只御一代なりし事。在昔天武天皇の御一代なりしが如し。扱又尊氏直義の前身。在昔大友天皇に薦めて天武天皇と亡ひまゐらせんと謀りたる金赤兄でありければ。今生にても大友の御後身なる光明帝に仕へて素懐を遂たる也。この它南北兩朝に名ある文官武將等の前世も或は大友に仕へ或は天武を幫助まつりし百官の宿業により觀生にも又敵射方となりける歟。是も亦知るべからず。然る天武も大友も又南朝も北朝も順逆その差あるものから皆是天照皇太神の御子孫にてをのしませば。その得失の皇祖の神の神慮の係る所なり。就を是とし孰を非とせん。畢竟の這風雲の會も乘じて榮利を謀りし。獍鴮伎害の大惡物の虎威を借り時運を得て世を擾乱したりけるを皇祖の神も今速に懲録め給はん事の克のせ給ひぬをいかゞのせん。人多ければ天に勝つ時運と天命を知るもの。天をも恨みず人をも咎めず世に忠信の狗となるとも。乱離の人にならじとのみ念じて英氣を養ふべし。輪回の佛の説く所賢となく不肖となく。料ざりける。横難に遇るを過世の業といふ。忠臣孝子の不幸なる。義士貞女の薄命あるも。皆是過世の業報也。といふとき。營に報ふに恩をもて。さる心起らん。然るして。事の不祥に遇ふ毎に。這も輪回なり。那も亦業報也。と生悟りして。君父の爲にも。怨を雪め。その身の仇

を思ひせわ形の武士に似たりとも。その行ひの出家に同じ。恠ての五常を蔑如して。蒙々たる。未視ぬ雛狗兒に異ならず。抑又悲しからず。や然るを今愍に輪回の説に憑るもの。後醍醐天皇と光明帝と各々その御子孫の正統を繼承たまひざりける。理りを示そのみ。又那遺義法師の法の如き。南北朝と立わかれて。麻のごとく。亂れたる。六十餘州を討も治めし。大功あるに似たれども。驕恣にして。君臣の禮義を思ひせ。不信不實の性なれば。善政罕にて。虐令多かり。この故も六十餘歳まで有つべし。命數なりし。帝皇その算と奪ふて。五十一にて。殞りに。是則天誅なり。應報なしとすべからず。是等の意味の姑蘇姫に對面の折と得て。然而詳も知るよし。あらん。云べきこと。是まで也。快々宿所に退り。ねかしと促しつ。又醇返と宏論奇辯に。耳を澄せし。小六わ只願感服して。示教の趣肝胆に。銘じて承知つかまつりぬ。然るにても。人歟。神歟。君の素生の知まはし。又姑蘇姫と宣せし。も何人あるや。猜しがたかり。這義も示させ。玉ひねと問ふを。女仙の聞わへず。否とよ。我身の這山にも。河内なる高峯に。遊びて。年を歴たるのみ。素より名もなく。氏もなし。又姑蘇姫の事。のしも。阿郎と宿縁あるものあり。そを今具に告せ。をも。これも遠からず。思ひあはするよし。あらん。天機を漏るとい。要なきこと。と論しく。聽て。側ある。瑠璃の壺の蓋。播遣りて。儼

よ三粒の仙丹を取出し紙に括りて小六に贈りてやよ勇すたましく這里へ招きしかども。毫ばかりも欺待あらずよりてこれをまわらざる。一粒のこの處にて服して效を試みなへ。残る二粒の後には必用する所あらん勢等閑なし給ひそと論すを小六の受戴きてその一粒を吃下せば香氣忽地馥郁と口中は充脾胃に走りし快然として清々しし氣力日頃十倍して思慮を増し智慧を富し是よりして日を経るまで食ざれども餓ざりけり。恚血小六の神女曲に喜びを舒別れを報げ又了疑に送られて復那雲の階梯を渡りてかへりゆく程に丁髻の後方より忽地に聲をかけてやよや殿東なす山岫を攀せはや初櫻の開侍りといふに小六ハ遮しく見かへらんとせし程しもあらず愕然として歩を失ふ雲の階梯中絶て身を倒に千尋の谷へ陥りよきと思ひし。是假寐の夢にしてあほ先帝の宮殿を拜みまつりしそが儘に額つき臥て在りければ。駭覺つし身を起し惘然たる心を定めて那這と見かへるに眼み遮るものもなし。夢歎と思へば口中に藥の香氣は耗せせ。残れる二粒も懷に在り原來那仙嬾の幻に見へて過去未來を説示し給ひし也。噫有かたし慚慰しと獨語身を轉して其方の高峯と數回伏拜み黙禱して歌舍にいそぐ春の日の山靜にして那這と霞引時候ながら途果敢とらで黄昏に宿所に辿りつきたつ相

れば庶吉ハ病苦にうめきて衣うち被ぎて臥たりしをこの甚麽と覺きて喚覺しつゝ容子を問へば今朝ハ爾までにあらざりしに午より寒熱往來して口さへ乾きて堪ずといひけり。よりて小六ハ柴折焼て白粥を煮沸しおせしつ準備の前藥もろ共に薦めて親切に勸れども然とて些の效もなし次の日ハ人を央ふて山脚の里より醫師を迎て藥を徴め術を盡し着病怠りなきものから病着いよしく劇うありてこの夕より衰果たる庶吉ハその曉に忽然として呼吸絶けり小六が慄いばかりけん享年纔に十六歳命勝越に嗟たる歎そハ又這次の巻に解分るを聴ねかし

開卷奇驚俠客傳第二集卷之二終

開卷奇驚俠客傳第二集卷之三

第十五回

齊紉歌ヲ遺して助則隱逸を知る
 臍帶藏を志して老樹以徃を託す
 再説達小六ハ日履心を盡したる者病竟にその甲斐もなく庶吉ハ呼吸絶果て喚活れども應せ

顔づくくとうち目成りて嗟嘆堪ぞおもふやう人の命の長短さ過世に請たる定數あり
 とも幸ひよして良醫遇ハ齡を延るともわらんを折も折とて重櫛峯の遣御吉野の旋宿に
 わなれば岐扁の術に匹しくて霜露の病術も後終り救ひかたきに至りしを悔て及ぬとながら
 我料も目四郎の補助よりて安同門を思ひの隨に討果せしにその誓ひを云と述る閉き
 く又我が與に自殺をしつる那俠者の落胤ある少年なれば久後までも身に從へていかで苦樂
 を共侶よせばやとて得て來にけるに思ひしとハ飛禽の鴉の習と疊語ふ死別れてぞ悲しけれ
 什麼何とせんとばかりに頭を傾け手を又さて尋思も悶るゝ愛胸の歎きを遣るかたなかりけ
 る折から小六の懷より香氣忽地馥郁と薫るも初てこゝろつきて噫忘れたるとこそわれいぬ
 る比那仙嬢の夢中に授け給ひたる仙丹の覺ての後も我懷に在りける由恁而歌會にかへり來
 につけるその黄昏も庶吉の病着劇しく見えしかばうち驚きつ事に紛れて那仙丹を鈍ましや久
 しくなるまで思ひも出せ外も藥を徵めしハ珠玉を忘れて瓦礫を愛し和氣丹波を訪ずして
 博乱湯を市に買ぬる田舎兒にも似たりけり然るにても那仙丹の今まで失せずありけるか只
 その殘香のみある歟と穢語つゝ懷を那道と搔撈るに幸ひよして仙丹の那折紙に包し儘にて

落て左の袂に在りしを稍拿出しうち戴きて原道藥ハ三粒なりしをその一粒ハ我夢中に腹し
 試みたりしより肥暎日頃十倍したりと思ふにも似ず甚麼ぞやこそ庶吉の病着に用ふべか
 りしを忘れしハ只是他が命運の既に盡たる兆ある歟遮莫枯たる苗も活るハ雨露の恵にあり
 要なからせやと右手を伸して日庶吉が胸臑頭を那道と拊試るに内身既に闕冷たれども中腕
 ハなほ温也然ばこそとて速しく身を起しし、提桶の水を茶碗に汲とり火を鑽被て然而那仙
 丹一粒を撮拿り雲時念じて庶吉が口中に水もろ共に沃ぎ入れてその吭を拊胸を捺るに藥ハ
 胃中に届りけん現死を起し生に回せる神藥の效時を移さず庶吉ハ忽然と甦生り眼を開きて
 身を起さんとせし程に涎沫を吐き汗出て心地爽然になりよけり小六ハ今這仙丹の奇效を感
 ぞる不勝の歡びなほ正首に勦りて然而粥を造て薦めしハ庶吉ハ二椀啜りてその背ハ然睡を
 したりける詰口に至りてハはやその病を塗り果て小六に對ひて看病の歡びを演なぞ登時
 小六ハ庶吉に那仙丹の奇特の顛末いぬる日獨後醍醐帝の山陵に詣し折憶ずも假寐したる夢
 中に女仙に招れて告示されし言のよしを箇様々々と報知らして那折紙に授られたる仙丹ハ三
 粒ありしを一粒ハ女仙の薦め儘して夢中ハ喚たりき餘の二粒ハ後々に必用るとわらんと

いれしよしそらうち忘れしを和郎の呼吸絶たりし折那仙丹の香氣によりて思ひ出しつ試みに嘯せしより胃中に届きて這回陽の歡びあり願ふに人の病厄も又是時あり日數ありて死に至るもの活るものも必避遠あるあらん然ばにや初より那仙丹を用ひずして最後に用ひて即效あり是も又神仙娥の逆測らせ給ひたる方便なる歟と町寧に有するよしと説示せば庶吉いよく感佩して席を避け額をつき小人何等の過世ありて歟半月あまりの大病を看とられ奉りたるのみならず去る仙藥の奇效によりて再生ぬる身の歡びの皆是君の徳に憑る一世の洪福何もの歟これ優といべき仰けり高き今番の御恩の吉野の山も敷ならずいかで犬馬のちからを竭して報ひまつらんと念ふのみ他し事なくいと答て是よりいよ、ますく、小六が興よ心を用ひて最老實しく仕へけり既にして春もはや三月の初潜になりしかば山櫻威開初て日毎に登山の人多かり登時小六の進むの準備を更にいそがして庶吉に聳くやう嚮に我夢に見給ひぬる山嬢の示現よりて先帝の大御靈の此吉野の山陵よをいしまさずを聞しより快這山を立出て亦復他郷に遊歴せばやと思ひにけるを仙嬢の然ないそぎをいそぐとも必障る事ありて開花時候なるべきぞと示されたるが果して錯りずその折去向を問まつりし

に神風の伊勢よ赴け那里の今おほ南朝の北畠氏國司たり悲しきとあらずとも思ひがけなく故人に遇んと誨給ひしとしもあり加旂去歲の夏我養育の義父野上の大人が儕の實父目四郎又密談の折竊聞たりし我身を延して遣さんといれし去向も伊勢なりき裕と云恰といひ今さら他所と求むべからずはやく那地にゆくべしとてこゝろ得さしつ藏王堂寺の坊主に歌舎を返したるその詰且庶吉を俱して前路も櫻開く初瀬越して遠からぬ旅にしあれど二三日此首に立より那首に遊びて第四日の未牌時候に伊勢路の此と岳坂の麓の里の石名原うち除來ても未暮ぬ日永き甲斐と飼坂の里稍盡處を過る程に舊たる一座の佛堂ありけり主僧齊一進み入りてと見れば靈驗馬頭堂と寫したる扁額を掲げたり當下小六の庶吉と俱に觀世音を伏拜みて退くときに見かへれば堂の傍に盆池あり池の頭の櫻が下に葭簀を掛亘したる茶店ありて此店舖を成る一個の老者が柱に倚れて打盹をり小六の此里にて多氣の城下の路程をも尋ねべく北畠家の動靜をも問バやと思ひしかば卒憩んといひながら發兒又尻をうち掛れば庶吉も下坐なる發兒に寄て休息し登時翁の客を相て火を吹起し茶を烹復して薦て去向を問ふとす此頭へ通て北畠滿泰郷の采地にて多氣の城への路の程一里半と聞えたり抑北畠

三位右衛門督源村上満泰郷の南朝棟梁の忠臣なりける中院一品入道親房公の曾孫よて三位右衛門督兼伊勢守頭泰卿の嫡子也乃祖北畠親房公のその學和漢を貫つて忠誠諸葛武侯の風あり息女の後村上天皇の中宮立給ひしかば朝野の尊敬大かたあらねと哺を吐きて士に降り髪を握りて客を迎へしといふ周公旦に異あらず君を補佐して私なく戦馬の間を歴て勳功しばくありければ正平七年春正月准后の宣下を蒙り給ひ是より先奥國元年に常陸の小田の城に在して神皇正統紀五卷を撰み給ひその次の年春二月に藤原抄を編述ありもて末代の龜鑑とす學術高明推て知るべし後醍醐天皇の元徳二年に病より剃髪して法名宗元とまうひせしが是より三十許稔を経て後村上天皇の正平十四年に薨給ひの享年六十七歳也世に惜れたる精忠節義の獨此殿のみならず兒孫各々朝家の興に死力を盡さるものあらず嫡子中納言顯家卿の足利氏と數戰の後堺の浦の戦に年二十又二よて竟に陣歿し給ひけり時に延元三年也又親房公の舍弟也けり權中納言顯時卿並に五男太宰大貳信親卿時に權從三の正平十三年秋七月筑石の戦ひに陣歿の間見あり時に顯時三十九歳信親の二十八歳也さこそが中に親房公の三男右大臣顯能公の伊勢州一志郡多氣の城に在しかば多氣の御所と稱

多氣の原多氣郡にあり和名多氣に見ゆ同名異地也

せらる顯能の嫡子左中將顯泰卿の正平二十一年に伊勢國司に補せられ給ひき時に從三位右衛門督天授二年に權中納言弘和二年に從二位の亞相に昇進し給ひつ元中元年夏四月四十五歳にて薨り給ひぬ恚而顯泰の嫡男親能の時に至て勢ひいまだ衰へず伊勢一州十郡大和一郡伊賀一郡志摩二郡約四ヶ國十八郡を管領してその身の多氣の城に在り後阿射賀嫡子顯雅の大河内の城に在り舍弟俊泰の垣内に在城と這阿射賀玉丸關野神戶の城に關の一黨神戸峯鹿伏木造川北栢植山路阿保の一族老黨諸弟恩顧の志移らず故國司顯泰卿の時よりして譬へ唐の節度使の如く實に南朝一方の捍城にてありければいぬる元中九年の冬南北兩朝御合體の折前將軍相國入道足利も北畠をのぞく沙汰して今なほ伊勢の國司たり親能も亦その恩を感じて太上皇山帝の太子小倉とよもて今上後小の東宮に立まぬらせんと誓れたる約束あれば足利家に恨を遺とべからせとて萬事その意に違ふとなくいと丁寧にものせられしを義滿も亦歡びてなほも好を結ん爲に諱の一字を授けにけりこれより親能の名を滿泰と改めて小倉宮子上に見えたりの御位に即給ひん日を果敢なくも等より外に他事もなくはや年來を過されたり問話休題却説小六の飼阪の里稍盡處なる馬頭堂の境内の煎茶店に休

て。茶店の翁。這處より多氣の城へゆく路程と。那里の容子を問けるに。翁答て。滿泰卿の阿射賀を居城にし給へんとて。去歳より城普請の御沙汰あれども。今春は多氣に御座也。又おん子伊勢の御曹司顯雅君の大河内の城に在せば。約莫這兩城下の繁昌昔にかへら老といひけり。小六のこれを聞きながら。傍の柱を瞻仰るに。柱は二箇の針を打て。舊たる扇と出たるが。最良しき手迹にて。學び得てもなほ足ること。知らざりき親の書よむ子を。しもたね。五柳隱士とありければ。愛つゝ。連りにうち吟して。こゝは博士の歌なるべし。萬葉集第五ある。山上憶良の歌に。銀もこかねも玉も何せん。にまされるたから。子にしかめやもと詠たるを取れる也。憶良が歌の子實といふ世の常言の起本なるべし。又這歌の情異也。子の世の人の皆擧りそが中に。不肖の多く賢あるの極て。得がたし。父賢よしして。子も賢あらば。親の書をよく讀て。志を紹ぐとあらん。これを眞の寶とすべしと。詠じの則。述懐にて。高き情も知られたり。這諷咏家の何處の人ぞと問へば。翁の眞實立て。原來おん身も歌を好みて。詠給ふに。ぞあらん。せらん。這扇の歌主のうへに。いと哀れなる話説の候。去向を急ぎ給ひ。せ。話し。稟さん。聞給へ。おん身も。懸て。過り給へん。這里よりの多氣のかたへ。約と十町ばかりなる字を。五柳と喚做と。瘦村に。稻城右膳守延といふ。學者氣質の退

祿人あり。原の國司の御家臣にて。俸祿三百貫を賜りしに。南朝北朝おん和睦ありし。此國司の京都前將軍家の諱の一字を賜りて。滿泰と改め給ふを。守延主酷く諫めて。その議を惡しと申ししを。朋輩の讒言にて。野心あるよし。聞へしかば。遂に那身を禁錮せられて。百日あまりに及びしかども。野心の實なき事なれば。繼に罪と宥られて。身の暇を賜りける。恁而稻城守延生。その儘妻子を携て。那五柳に退隱しつゝ。一字を。文作と改めて。其頭の里の総角に。讀書手蹟を。教なせして。十年許を送りにけり。文學武藝大かたならねば。京鎌倉に赴きて。今官を。氷め給ひなば。發迹ると。易からんを。俺の國司の諱第也。忠を盡して。用ひられず。冤屈に。放るゝとも。二君に。仕ふ可らずとて。細き煙を立ながら。なほ清貧を。樂みて。村の字を。家號に取りて。五柳隱士と。唱へたり。あ。唐山司馬晋の時。陶淵明を。かひし。賢人の門に。五株の柳ありしか。則五柳先生と。稱へし。故事は。縁るものならんと。有一長老の。宣ひき。恁まで。愛たき。性なれども。過世悪くて。男兒。あら。ず。才に。一個の女兒有。その名を。何といふ。やらん。今。茲の。十六七なるべし。容止の。最美麗きに。心操さへ。鄙ならず。縫刺の。技いへ。ば。さら。也。走書。又。愛た。く。て。二親に。孝順也。筋目。好き。豪家より。いかで。想に。せ。ま。く。ほ。し。と。て。氷人をもて。い。い。せ。しも。幾名。か。あり。けん。を。文作。殿の。婿を。擇。て。まだ。允。され。ず。と。聞。へ。たり。

怒りし程に國司の權臣木造内匠親政大人の嫡子なる木造木工介泰勝主が件の稻城の女兒の
 事美女なるよしさへ聞知りて好色の癖なれば見ぬ戀も胸や焦れけんいかで側室に娶らんと
 利をもて誘われしかど丈作刀殿のいかにして女兒を售て時勢人の妾と遣すべき非除館
 満泰をの御誼にて女兒を徴させ給ふにより我身も俱に召返されて伊勢半國を賜るとも妾あ
 いふの御誼にて女兒を徴させ給ふにより我身も俱に召返されて伊勢半國を賜るとも妾あ
 ンにまゐらせんや況木造泰勝が父と姉との權威もて利に誘引ん人依るべし正妻也と
 も婚姻を允すべきものにはあらずと辭を放ち救圍て一切承引ざりければ泰勝主も又怒りて
 その議ならばせん術あり必思ひしらせん迄とて罵り狂ひ給ひしとぞといひつゝ聲を密まし
 てこのこれないしよの事ながら然る腹黒き主なれば腹心若の驚いくたりに欺機密をしめし
 隙をうたがひ丈作刀殿の外に出し折矢庭に女兒を奪取らしつしゆくしよに躲し措るよと
 この事はやく聞はしかば丈作刀殿の怨に得堪ず次の日多氣へ赴きて國司に愁訴申せしかど
 も然とて證據なき事なれば木造主の冤枉とて頼陳じて物ともせず老爺の一十二の權臣な
 るよ姉御の館のねん側室にて引板屋殿と喚れ給ふ這内外の補助もありけん國司の薄情や感
 け給ひて證據なき事なればとて御信用なかりしかば有司達訴人に論して訟狀を返せしとぞ

この故に丈作殿の憤り胸は満てその冤を叫べども事聽れぬばいひ甲斐あらず所詮大河内
 へ推參して愁訴のよしを御曹司に歎き申さば萬一ツ宜き御沙汰のあらん歎とて宿所へ立
 もかへらずに又大河内へゆりまくしたるその夕昏のとにやありけん櫃阪山の頭よと山賊な
 どの所爲なる歎憐ひべし丈作どのの獵箭に胸膈を射徹されて臆てむなしくなりけりその
 る多氣に聞へしかば五柳村へ下知ありて村長等を召よせられ死骸を運與し給ひりければ五
 柳村に昇もて返して送葬儀のごとく執行ふて事の濟しが痛ましき主の内儀也最愛の獨女
 の奪略られて剩長人の横死に仇と知らず只泣明し泣暮して飲も薦まき夜の目も合せ一日
 二日と浩嘆疲勞て病臥て在すると人の噂に聞たるのみ却這扇の丈作どのこのの觀世音と
 信しまつりて折々まるり給ふ毎に我等が店舖に立よりて茶を喫みて浮世雜談を聞もしつ話
 しもして樂みにせられしがいなる日是我店舖にうち忘れて還り給ひにけりその次の日の
 とにやありけん件の權難起りしかばかさねて來給ふ暇のあらで黄泉の客となり給ひたる主
 の記念で候へば那内儀の參詣あらばその折返しませぬと思ふものから忘れぬ爲に柱に
 かけて措きたりき恚いふ情由で候いと心長開き物かたらひを小六のきつと思すも拳を擦

り齒を切りて世に又聞に得堪ぬ。不平の事のわりけるよと敦まきつ又その扇をつらく見
つゝうち吟しつゝ連りに嘆息したりける。庶吉も這長談を聞果る折心つきけん暮初る日の空
を瞻めて多氣まで一里半とかいへばけふの前路のちほ遠かり卒とよ立せ給はずやといふに
小六の領きて茶店の翁は稻城の宿所とよく問極めて立つ折に庶吉のこゝろ得て茶價を翁に
取しける却説小六の這池畔の茶店を出てゆく程に心におもふ赴と庶吉に聳示して是より多
氣の歌店にいそがそ五柳村よ立よつて那這を尋るに最も老たる三株の柳をそが儘に柱に取
て樹垣を締造したる内に避塵しさ茅屋あり又二株の大楊柳の背門のかたにも見へしかば是
なるべしと庶吉に兩折戸を敲して稻城氏の這許よな俺們的他郷より來ぬる武夫でいが問試
んと思ふよしありて故意立よりいひ也。こゝ開て容れ給はずやと聲高やかに喚門へば内より幽
けき老婦の聲して稻城の宿所の這里あれどもいぬる日主人の世を去りて留守する俺身の病
着に閉籠られて立も懶惰し宿りを投め給ふとも然る折なれば承引かたかり逆旅主人にてい
あらずかしと推辭むと小六の推返してその義の豫承知也宿を乞ふといふよりあらず合愛の
うへに就ていかでちうらにならばやと思ふよしさへあるをもてうち驚しまゐらせたり病苦

を忍びて對面あらばその折意衷を嚙とべしといふに老婦のうちも措れず然らば等せ給ひね
と答てやうやく身を起しつゝ出て折戸を推開きて相れば小六が人品骨相いと美しき逆旅の
武士にて思ふにも似ず年弱かるよその音聲の疑ひもなき東國人と思しきに俱したる猿子も
趣ある少年でありければ原來由ある人にして又那冤家の問課者でいあらざるべしと猜しつ
卒這方へと先よ立て母屋に伴ひ茶を進て先その來意を諮ねけり。登時小六の這老婦を主人
稻城守延の妻房なるべしと思ふにぞ丁寧に時候を舒てその病着を問慰め徐に頭を回して相
れば這家舊たれども坐席の三間敷四間ありて主人の身まかりたりしより手習ふ童の書机な
ンと。その家々にもて去たるにや稻城したる手習墨の那這席薦を塗して魔班にあらぬハ
なし。そが中に唐机に和漢の書策を積登したる頭にハ書箱あり柱に掛たる鞆もわり塗鞘の稜
剝たる片釣の鎗一條坐席の承塵も見へたるよぞ茶店の翁が噂に錯ハす文あり武ありし隠士
にこそと思へばいと惜しかりける餘波い哀れ白木の木主に清白ハ士と寫されしと小机に
安措て花あり水あり常香盆の煙と共に露やらぬ怨然とと想像る小六の老婦もうち對ひて
某ハ東國の處士達小六と喚做ともものなり當國司に舊縁われハ安否を伺ハ申ん與に今番這地

に來つれどもいまだ多氣へり赴せけふしも人の噂によりて。丈作主の人となり。その退隱の緯の頼末令愛の事。今番の横難主の横死の事までも大かたあらず。聞知りたり。某偏愚の性として。不平の事と聞くとさ。怒氣胸は滿て勝られ。然ば親疎の差別なく。その冤を伸恥を雪めて。人の患を拂んずと思ふものから。年弱ければいまだその義を試せしかる。貴所の横難の某國司に舊縁あり。對面の折時宜によりて。訴申さば。令愛を拿復す。歡びあらん。歟是も亦知るべからず。この義を商量せまくほしさに。恚の推參致したり。實もこれらの事あるや。と問れて。老婦の感涙の進むをし。推拭ひて。人の凋落の折からの親族故舊も疎くなり。ゆゑ総て浮世の習俗なるに。尙抄弱き方さまの人の噂を身に摘て。いと親切なるれん計ひ。世に有がた。親子の幸ひ。この上や侍るべき。既に推量せられしごとく。奴家の主人稻城丈作守延が。妻老樹に侍り。過世悪くて。男兒あら。老獨女。壻招後れて。去歲よ。今茲と過を問。執念深人に奪れし。往方の其首ぞと。猜しても。證據なければ。愁訴も得達。老利良人の撃れたる仇。ハ歟と思へども。そも亦照驗の事なれば。いと朽をし。くも哀しくも堪ぬ。怨に身を措かねて。病煩ふのみ。婦女子の甲斐なき。年來信する。觀世音の御名を唱へし。朝な夕な。祈念に他事もなきものから。喪中に侍れば。拜れぬ。

神も憐み給ひけん。菩薩の特更感應の慈眼を回し給ひてや。初ておん目に掛りぬる。おん身恚まで憑じき。幫助によりて。奴家が女兒を返さるゝとありも。せば。その再生の御恩に侍りはや。人傳に知られし。ごとく。女兒の往方も。良人の横死も。方儘問れたる趣に。些も違ひ侍ら。老かし。恚い。誇貌に。我子を譽るに。似たれども。他の幼稚さ。比よりして。親に孝順なりしのみ。浮たる方に。こと疎くて。なべての女の子に。異なりし。義理に賢しき。性なれば。那仇人に。掠奪られて。日を経るとても。身をば儘さで。怒に觸て。殺さるゝと。あから。老や。恙もなきや。と思ひ。過しのせられ。侍りと。歎くを。小六の。慰難て。皇和も。漢土も。今も。昔も。死を。怕れずして。操を守り。身を。潔くせし。烈女。節婦の。戦世の。多かれども。いかで。う命に。及ぶべき。那好色の。毎の。縦美。女子の。強顔くとも。心長。閑く。哄誘して。従へん。と。こそ。欲する。ら。め。その。義の。心安。かるべし。就て。某多氣に。到りて。國司に。見參せん。折に。よしを。訴稟すとも。令愛の名さへ。年さへ。知らず。不便。候いん。具に。知し。給ひ。ね。と。問へば。老樹の。黠頭て。宣ふ。趣こゝろ。得侍り。女兒の。今茲。十八歳にて。應永二年乙亥の。秋七月七日の。誕。生にて。名とは。信夫と。喚做し。侍り。といふに。小六の。眉根を。纏めて。沈吟。じると。半時。ばかり。やうや。くに。頭を。擡げて。その。又。奇しき。事も。こそ。候へ。某も。亦。義妹の名を。信夫と。喚做たる。あり。便是。某。

と同庚にて應永二年乙亥の秋七月七日生まれしよし。臍帶裏に寫着ありと。そが母親の折々にいひも出しを我小耳の底に留めて今に忘れず。しかるに女弟の某と俱に陸奥にありし時。七老になりける秋九月城隍神會を觀んとて出しに。人肉經紀にや攫れけん往方も知らせなり。けり他が二親甲乙等の原某が妹母あれども養育の恩淺からね。年來養父養母と稱へて骨肉にしも異ならせ。夫婦忠誠艱苦の中に果敢なくなりしいと惜しさに。某諸國を履歴の折信夫が生。死存亡をいかで尋極んと思ひし事も久しくなりぬ。最も无禮なるとながら。おん身の令愛信夫と。の實の親子でをいする歎と問に老樹の胸を瀧して。さてもく。とばかりに姑且應難つ。も涙死目目を履瞬さて訝り給ふの理り也。今さら隠そべくも侍らせ。既よ推量せられしごとく。信夫の實の女兒にあらせ我亡夫のゆくりもあく拾ひ拿つ。養ひしより。はや年來にあり侍り。その故の恁々也。箇様々々と已往の物語にぞ及びける縁由を原るに。時の應永八年の秋九月老樹の良人守延のなほ北畠よ仕へしかば。この比陸奥の寶川へ使を奉りしかへる。さば八山嶺をうち險ぬ來る。越後州古志郡不毛山の麓路よと見れば。歳六ツ七ツ許なる一個の女の子の何にかあらん。最も老たる樹杪に攀登て在りけるに。そが樹下に。一應危なる一個の旅客うち瞻仰

て降よくと喚かけて連りに招きなせし程に。件の女の子の守延の行轡にうち乗りて。鎗燈櫃奇めしく伴當十名許を將て近者來ぬるを直下しけん。忽地聲をふり立て。やよよとの等助けてたびぬ。我身はその悪人に拐されたるものぞか。救せ給へと叫びける。登時稻城守延は。や輜子を駐させて感來其奴の癡者なり。擲捕りぬと。烈しき指揮に承りぬと。若黨中間走り蒐りつ。那癖者を推捕稠んとせし程に。悪人のうち驚きながら。些も怯ぬ面色して。との等卒爾し給ふな。那女の子の我姪也。いぬる比より心乱れて。筋なきことを口走れば。療治の爲に醫師許將てゆかん。とて搭駝つ。這樹下を過る折姪女の樹枝に手を掛けて背を離れ梢に登りて。喚ぶとも下りず。困じたり。恚いふ情由でいへばと頼むを女の子の推禁めて。との等その悪人のいふことをな。所給ひぞ。我身いかでか故なくて。這樹の上に登らんや。願ふの救へせ給へかしと。哀み請て已ざりける。その間に守延の旅轡より立出て。兵等其奴を走らせな。剛才這那の言請應對竊に虚實を猜せる。よ女の子の愁訴の實にして疑ひの其奴にあり。猶深る事歎と。敦圀たる再度の指揮に。性急雄の若黨二名阿と。應て走蒐りつ。悪人の利手を拿んと競ふたる。又此網の勢ひに免れがたしと思ひける。悪人の吐嗟を叫びて。掻潜り突退て。藪地に逃走るを伴當等。いなほ脱さじとて。大家齊し



福成守延
 山中
 古徳
 六所
 の
 板
 子

Edison

一趕ふ程に道里の山脚の二條路にて右手に樹粒隙もなく左手に千仞の谷ありければ悪人の喘々趕登さるゝ雨後の山の葛藤に足を纏れて身を横容ふ谷底へ忽地墮と滾落て生死も知らずなりにけり是により伴當等の故の所よかへり来て然而守延に那癖者が千仞の谷へ滾落たるその爲体を報しかば守延听つゝ傾きて然もこそあらめ問すとも那身は悪事あればこそ逃て深谷へ陥りたれその悪あらば冥罰にて崖に撲し骨砕けて必即死すべきものなり然にても這所の人家遠ければ樵夫の外に人の往還の架ならんに今那女の子を救せして歎きを遣す不便の事なりとの思へども八九尺の足掛もなき巨樹の杪に攀登らんと容易からず什麼すべきと問試るに用具籠を荷擔る奴隸の故郷の伊賀の山里にて樵薪を生活にしたるあり在下に仰付られれば立地に那樹に登りて女の子を扶御すべしといふに守延歡びてその幸あるとぞかし露さぬやうに快くせよといそがしつ女の子も緯憇々と喚り示して主僕樹杪を向上てをり然程に件の奴隸の細引の麻索を腰に挟み幹を抱きて攀登ると逸速く瞬間は樹杪に到て女の子の腰に麻索を結看つゝ下枝まで小腋に抱きて下り來つ其首より徐に手繰卸すを若黨受奪てやをら抱きて守延の身邊へはやく扛き居へけり女の子の既では拯ひを得ても遠く

來にける身の所縁心もなく思へばぞ只潜然とうち泣きしを守延相つゝ慰めて那癖者の做し趣女の子の親の名里の名を町章と鞠れば女の子のやうやく涙と斂めて我が親里の陸奥なる信夫郡の片頭關と渡瀬の間ある浪人某甲の女兒あり今茲に甫の七歳にて名を信夫と喚れ侍りいぬる日城隍の神會の折四隣の女の子に誘引れて漫行をしてけるに那癖人に攫れて遠く這里まで俱せられたりその通途幾番か脱去らまく思ひしかども晝の背に眺ひもしつ然らねば手を掖さ推並びて些も由斷せざりしかば思ふのみにて便りを得ず夜も亦側に臥たればせん術あらせうち泣く毎に那悪人が慰めて左ても右ても這里まで來ての親里への還りかたかり我越後ある新瀉歟三國湊へ將てゆきて愛たき家に奉公させん其折我等を小父公といひね那里の人皆富饒にて甘好東西多くあり美衣を被せられて最艶妖しき諸姉妹と共侶に且し暮さば憂を轉して歡びを做す樂みのなからせやのそを泣くと歎勿泣そと問あぐ時なく賺しつゝ餅を買ふて取せなせしてけふの越路よ入るといふ山又山の雲分きて踰つゝ來れば麓路ある去向に老たる山樵あり我身の山路に勞れたり那悪人も駭疲勞れて我身を肩にうち乗せつ既に件の樹下を過らんとせし程に東へ差たる大枝を見れば間の遠からず手を抗伸さ

ハ携らるゝともやあらん携得て身を那樹梢に脱れれば人の幫助を等んずと思ひつゝ將てゆ
 かるゝ程に料るに差らすその樹下を過れる折に那大枝に兩手を掛たる勢ひに挑拿る如く肩
 をはちれて憶を樹上よ返登され辛く毒手を脱れしかば又その上もる大枝に携りて梢よ登り
 けり其時悪人驚譟きて或の罵り或の賺して攀登らんとしたれども下より枝に手届かざ
 足を掛くべき節もなきに因じ果つゝ目成たり憊る折からとの等のおまじ山路をうち踰て
 來ませしは是我與に天の助けを聲ふり立て救ひを求め侍りしうちも措れず那悪人を深谷
 の底へ趕滾して拯せ給ひし歡びの詞に述も罄しかたかりなほこのうへの御恩に我親里へ
 送らせ給へいかでくと諄返す年才に倍たる伶俐しさの情形語言に見れしを連りに感ぜる
 守延と俱にうち聞く伴當等さへ耳を側て駭き嘆して世に亦儻なつなる女の子が奇しき智
 慧才學の得がたき所爲ぞと稱へける。

第十六回

不毛山麓路に義士童女を憐む
 野井地藏堂に俠客驟雨を避く

去程は稻城守延の世に有がたき神童女の奇才も感じ且憐みて背を撫つゝ左見右見て通接度

此子の伶俐さ心操さへ縹致さへ由緒ある武士の女兒ならんその親里の陸奥なる信夫と聞け
 ば路の程此里より隔も遙にて進退共に不便也いかにとべきと沈吟しつゝ更な女の子にうち
 對ひてや信夫とやらんよく聴ぬ我の是伊勢の國司北畠殿の御内人稻城右膳守延と喚做た
 るものにして宿所の伊勢の多氣にあり今番かん使を奉りて奥の寶川へ赴きたる歸途にわあ
 れども我私の旅ならねば阿女を送りて遙遠とその里まで適がたかり然ばとて伴當に所後
 なきものあらざれば分ちて阿女を送らざるその人なきを争何せん所詮伊勢まで將て還り
 てよしを主君に申しわけあへ人多く付させて送らせ給ふともあるべし甚麽この義を承引く
 やと問へば信夫の兩袖を顔に掩ふて又潜然と泣つゝ答難つるを展問れてやうやくに思ひ絶
 けん涙を斂めて左ても右ても單身でいかへり得がたき親里の天さつかしく侍れども然宣へ
 ば術もあしけふより御庇に憑まく欲を宜く計らせ給ひねといふに守延領きて却伴當もこ
 ろを得させ行轡に信夫を乗してその身の歩行にて先に進みてその宵歌店に若し折嚮に
 信夫を扶御せし奴隸並に若黨等を勞ひつ賞祿を取らせて信夫を身邊に招きていふやう嚮に
 阿女が親里の名を恠々ときゝたるのみいまだ父親の名字を知らず思ふよ必由緒ある武家の

退祿人にこそありつらめ具に報よ甚麼ぞやと問を信夫に聞あへきそに宣するとながら問答
 は參々さま母々さまとのみ唱へて實の名をいねばはやうち忘れ侍りにきを今思ひ出そ
 とも今返さるゝ俺身ならねば要なき事に侍らずやと推辭を守延意裏に猜して恚まで伶俐
 女の子なるにその親の名も氏も素生も知ざるとのあるべきや然るを隠すの故あるとにて目
 今送返されぬその身の安危不定也名告らば親の蓋なるべしと深くも念ふよしあらん是も又
 常庸なる女の子の及ばぬ事なりきと悄悄に感じて再問せしかのめれども照驗になる書記
 のあらん歎と思へば信夫が腰に附たる神符袋を解して見るに内中に陸奥の持竈明神上野
 なる赤城明神武藏の箕田八幡なんど護身符三四枚と紙に包みし臍帯ありて應永二年乙亥の
 秋七月七日午初刻生しのふとのみぞ寫したるこれも又その親を知るよそがなければ故の
 如く蓋に収め腰に返して一日二日とゆく程に愛々しさも彌増て遂に捨かたき思ひあり既に
 して日を累ねつゝ多氣の城に歸着さしかば先信夫にの仲達を謀て宿所へ遣しつ守延城に登
 り返命を聞へわけて休息の暇と賜りその宿所へ退きて妻の老樹に恚々と信夫が事を説示
 して他の女の子の事なれば今より御家に儘するん宜く勸り給へかしといふは老樹の愛歡ひ

で才に感せ厄を憐み世に隔もなき款待ければ信夫のこよなく恩義を感じて主夫婦を慕ひ
 けり去程守延の信夫が緯の趣をいかで主君に贈りあげて免許を請て陸奥へ送り還すべ
 けとて姑且便宜を伺ひしに主君北高親能の改名の事はより守延獨其義を否して面を犯り謀
 めたる是より不測の罪を得て百日許禁錮められやうやうに宥られて身の暇を賜りければ五
 柳村へ退隠して遂に又仕官を求めず恚れば信夫が陸奥なる親を索ねて遙々と送還す事も得
 ならずこの故に守延の妻の老樹と商議しつゝ有一日信夫を召近つけて最不樂むげし示すや
 う豫に阿女が親を索ねて故郷へ送り返さんと思ひし事の画簡となりて今浮浪の人となり
 たり此里よりして陸奥まで無慮千二三百里六町の旅なれば今さら企及しかたかりなほ又
 折もあるべきに恚なる事も過世より結び縁しと思ひとりて徐に時を等ぬかし我身貧しく
 なりぬとも阿女一人の左も右もして鞠養ひて人と成すべうこの義をこゝろ得よかしと論せ
 ば老樹も共侶よいと丁寧に懇めて知らるゝことく我等夫婦の過世悪くて兒子なし寤寐不樂
 しく寄る年波の後々さへに思はれてはこゝ心細かりしよ年來深信したてまつる観音菩薩の
 利やくにて授させ給ひし歎容止愛たさのみならざなほ禱きは才聞たる儕を養育しつると思

ひかけなき幸ひ也。願ふに今より我等夫婦を親と思ひね腹こそ借さぬ實の女兒と思ふべし。歡しさに就て又想像る。舊里の二親達の最痛う打歎きてこそ在すらめ其も胸苦しきとながら。目今大人のいれしごとく猛可に祿に離れし。我等のみの不幸にあらす儂の與より幸なき。うへの薄命ぞと思ひ絶てやよや好き子ぞ聞分よと迭代に理り切て論す詞の眞實心の羈となりて憑しく又悲しきも八入増す蘇枋再染の紅涙袖に餘りて苦しさをしのぶに堪ぬ身ひとつの秋かぞと思ふ冬枯に開後れたる撫子や霜に痛める朝の原の尾花が裾の葎なくより外に術知らぬ信夫の才に頭を擡げて言をわけたるれん論し。有がたきまで慚愧き一期の幸で侍るめりいぬる比惡人に扱されたる儘にして尙だん救ひに遇ざりせば浮身の宿に年長て宿遊女にこそせらるめれ。非除故郷へ還されず。に會すなるとてもを恨しと思はんや願ふに女兒と思食てかん憐愍を垂給ひ。御杖の下にも密まく欲す願へ。過世に結びくる家尊家母にこそをいそめれ。我身に隔り侍らぬものといふに歡ぶ守延老樹なほ云々と慰めて只掌の玉翳の花と慈愛むと苟且あら老次の年より守延の手本を取らせあせむるにぞ老樹も又縫刺の技を教て等閑なく。はや年來になりしか。一を聞て二三を知る才女されども性老實しく何事

も二親の教を請てその智に誇ら老萬事已を虚くして孝順大かたならざりければ髪の飾も身の皮も流行を好ま老驕奢を厭ふて養母の補助になると多かり恁而はや年十五六に及びて。京にも多く得がたかるべき羞月閉花の面影あり。この比より那這の風流男子們聞知りて婚姻を欲するもの幾名敷ありけれども守延の増を擇みて一切承引ざりしか。は是より不測の歿難興りて。信夫の國司の權臣なりける木造空介泰勝に奪略られ守延の横死して狐燈の油竭ぬべき家にの老樹一名處り。この是應永八年より今十九年に至るまで。十二ヶ年の事なるを先や看官に示さんとして約めて茲に寫せし也。是よりして又老樹が小六に對ひて云云と信夫がうへを説明す。前回を繼かれ。説話煩雜たり。前後を照し心を属て見らるべき所になん間話除煩却説。説老樹の小六に對ひて是等のよしの要を摘み繁を芟て説示を哀惜限りなかりける涙を袖に推拭ひて亡夫の科がも信夫を養ひとりし事恁いふ情由で侍るから。そが舊里なる二親の名さへ氏さへ知らぬとも降誕辰のみ臍帯を包みし紙に寫してあるをうちも忘れ忘れずと告侍りしより。そが義兄ある。かん身に名告會せしむらせて補助を得つる。い盡せぬ奇遇深雪ふる夜に贈らる。炭のものか。祈ても得かたかるべき幸ながら。又痛ましき。那親達の今の世にさき人

の懸に。入か給ひぬ。と後竟は。信夫が聞かば甚あらん。世は實の父母養ひの父さへ死天の旅衣の
 さねて着ぬる身の愛事。知るよきもなく身ひとつの愛苦にその身を措難て泣つゝあらん不
 便やといふも苦しく愚痴に凝る胸の痛を推難て涙と共に伏沈めぬ。小六の驚き且慰めて原來
 おん身の全弱の我女弟ふてありしよな。おもひかけなき命の恩人十二年の養育の實の親に
 も異ならぬ恩愛情義感深かり。稻城主の生前。此喜びを演ぜば。送は本意に稱ふべく。又那信
 夫が二親の猶も此世に在るなら。報も知じて。怡悦の痛を開くを見も。見すべきに。今のその
 甲斐なき人の像見ありける女弟。仇も取られ。生死の海に漂ふ无架身のよるべの磯へ瀕
 に。易る世の轉變を悲しげに。しが。おれども危弱の折は。料すも。來て一臂の方を竭す。寔に
 造化の神劑是切ても。幸ひ也。初刀自の愛女の素生を知らぬ時。たに。冤苦を聞くに堪され。バ
 某既兼愛の情を越に。宗として。來つゝ。事問候ひしに。信夫の。おん身の養女にて。我養父母の女
 兒なり。む。方備詳に知る。うへ。怨報に十倍して。火が。おん入るべく。亦も。闇。明日。夙早て。多氣
 に。越き。伴の。よし。を。訴。言。聴。る。と。も。聽。れ。實。も。信。夫。が。所。在。を。搜。索。め。て。取。復。さ。ぬ。目。か。ら
 老。然。の。と。お。歎。き。給。ひ。ぬ。と。致。謝。な。が。致。謝。し。て。を。義。見。て。動。け。壯。士。の。誠。心。の。現。良。藥。區。で。老。樹。の

やうやく胸開けて又云と喜びの詞を小六の推禁め。其頭の口誦の今さら要なきは。や初更
 よやなりぬらん。某の村長許ゆきて。歌店を求むべし。といへば。老樹の頭を掉て。可愛の宿所に侍
 れども。信夫が兄公でを。おれれば。親。か。る。ふ。き。通。家。也。願。ふ。此。里。又。天。を。明。し。て。翌。快。多。氣。へ。赴
 き。給。へ。然。ら。ば。夜。飯。を。ま。ぬ。ら。せ。ん。嚮。に。の。才。に。行。燈。を。出。せ。し。の。こ。に。て。茶。だ。に。薦。め。ず。お。ん。伴。當。の
 徒然なりけん。此方へ召せ給はずや。といふ。小六の沈吟して。喪中。也。と。嫌。ふ。お。ん。わ。ら。ず。老。樹。を
 の。差。あり。とい。へ。と。も。單。身。嬌。居。で。と。り。も。る。に。忌。憚。ら。で。此。里。に。曉。さ。ば。李。下。の。冠。瓜。田。の。履。胸。安。か
 らざる所あり。夕饌もまだ欲しからね。今宵のは。やく。相。別。れ。て。信。夫。を。俱。し。て。來。た。ら。ん。折。お。ん
 管待を受くべけれ。那首に侍る伴の小厮の。楯。取。庶。吉。と。喚。做。た。る。腹。心。の。家。僕。也。お。ん。目。を。給。り
 候へ。といふ。よ。老。樹。の。見。か。へ。り。て。そ。の。憑。し。さ。人。な。り。し。を。事。ま。紛。れ。て。等。閑。な。か。げ。る。無。禮。せ。允。じ
 給ひねかし。や。庶。吉。の。と。や。ら。ん。初。て。お。ん。目。に。か。り。侍。る。よ。其。里。の。酷。く。端。近。也。此。方。へ。進。み
 給はずや。といひつゝ。も。身。を。起。せ。ば。庶。吉。お。ん。恭。しく。老。樹。對。ひ。安。否。を。諮。ぬ。て。不。幸。の。悔。を。陳。な。ど
 するに。老。樹。も。又。思。ひ。が。け。な。く。助。助。を。得。た。る。喜。び。を。告。る。折。か。ち。鎗。々。と。初。更。の。鐘。聲。聞。け。け。登
 時。小。六。の。身。を。起。し。來。て。老。樹。を。喚。か。け。別。を。告。て。は。や。外。面。へ。出。ん。と。せ。し。を。老。樹。の。養。時。と。推。禁。め

て本村に亡夫の弟子の親多くあり。村長の宿所よりおほ近きも侍るある。一筆案内をしはべらん。そをもてゆかせ給はずや。といふを小六へ聞あへず。その幸ひあるとながら那訴の一義われ。おん身母子と親しかりける。事をし他人より知らすべからず。咱等も任し給ひねと詞せはしく。舞き示して刀を引揚て立出れば。庶吉も又遅しく辞別しつ。主従二益の笠を拿つ。従ひゆくを老樹の終に留難て後を契りつ。共侶に門まで出て目送りけり。憊而小六は庶吉と得て。村長許赴きて我等の國司に舊縁ありて東國より來たるもの也。けふしも路を食りて多氣までゆくま。く思ひしか。とも初夜過たれば不便也。宜く計ひ給へるべし。といふに村長こゝろ得て守の所親でをいしあ。他所へ案内を致とに及ばず。在下御宿を仕らん。此方へ進み玉へとて姓名を問ひ。疲勞を勵り。廳て客房に迎入れて夕饌を進めたる。管待態の大かたならぬを。小六は辞ひて庶吉と俱に枕に就にけり。春の夜なれば短くてはや向明とせし程に。小六はやく庶吉を喚覺し起。出て共に早飯を薦られ。鳥の茂林を離る。比村長に辞し別れて多氣を投ていざぐ程に。既に城下へ程近かる。郊原を過る程しも。われ三月の天も生憎に。花ちらす。べき驟雨の忽地に。颯と降そ。ぐに笠宿せん家へ。あらせ。只身を容る。可ある十字佛堂のありければ。主僕齋一走り入りし。

に風さへ猛り烈しくなりて。憊ても濕吹に濡らさる。小六は得堪ず。庶吉に。その戸を閉よと急せども。門扇戸あれば。吹扇動れて。推閉れども。開きけり。登時小六は。四下を相る。這堂内の皆土席にて。正面に立像ある。石の地藏菩薩あり。この佛前に布做たる。方四尺許なる。一箇の片石ありける。是究竟と引起して。扇發る扉に倚掛て。相れば。件の石の蹟の方是。乾井よて。深一丈ありなるべし。什麼何故に。這處よ。この井あるやと。吐けば。庶吉も聞相て。こゝろ得がたく。思ひけり。憊る折うら。雨は起れて。這十字佛堂よ。濟るものあり。その徒二名と。おぼしくて。扉を推て。入らんとせしに。些も開かざりければ。甲乙俱に訝りて。生憎や。けふは限りて。戸の開かぬ。殺生も。出たるにより。野井の地藏の像せ給ふに。あらすや。といへば。伴當舌うち。鳴して。現いければ。その理あり。抑。這堂内の昔より。野中の孤井あるにより。夜行を急ぐ。旅客の落死たるもの多かり。因て。地方の農夫等が。埋んとして。けるに。是等が。猛可に。病着發りて。身故りたるも。掛からね。這井の幽の祟りぞとて。遂に。また。これを埋めず。そが。礎石を。蓋にして。落て。死したるもの。與に。地藏菩薩を。建立して。這堂内に。安措したれば。今で。野井の地藏と。稱へて。鄰郷までも。知らぬ。いさ。憊る縁起の石佛なるに。死したるもの。靈もありて。殺生人を。忌嫌へる。そのゆゑ。なく。あるべか。

らす。什麼けふの山獵の何等の御要で候ぞや。と問へば。然なりと黙頭てけふの御要をまた知ら
 ずや。和郎の那密事にも拘つらひたるものなれば。今さら隠すべくもあらず。我家の小官人が嚮
 に奪拿給ひたる稻城の女兒信夫とやら。宿所に隠し措き給へとも。まだ御ころに從はず。
 威勢をもて迫りなば。本意遂易き事なれども。然しての風味薄からず。いかで他が心から思ひの
 随ようち靡して賞玩すべき便直も欲得と。其良方を徵め給ふに。山獺といふ獸あり。その性甚淫
 なるものにて。同類ならぬ猿猪狸。兎に至るまで。その牝を見れば。趕迫りて交らずといて。とな
 し。尙遇せして。敵手を獲ざれば。その情慾のやる方なさに。漫に山の樹を抱きて。幾日。歴れども。放
 れねば。立枯にさるものぞと。西戎のこれをもて。房薬よみ。故に。その價最貴かり。然らば。山獺の
 血を。奪て。酒に。雜て。飲すれば。甚ある貞婦烈女でも。春心の發起して。飽まで。男を。慕ふと。磁石の鐵
 を。吸ふが如し。と。有一醫師の中。ましか。小官人。歡給ひて。その山獺。本邦にも。山に。罕に。あり
 とし。聞けば。程遠からぬ。大坂山。國見岳にも。あるべき歟。是も亦知るべからず。汝の素より。獵を好
 みて。角弓をよく。射ぬれば。嚮も。典記右衛門と。共侶に。我那機密を。聳示して。丈作奴を。結果けた
 る。本事によりて。命ずる也。櫃阪山を。初として。其頃の。高峯と。涉獵て。見よ。那山獺を。射て。捉らば。賞

祿の先度に十倍して。何まれ彼まれ取すべし。よくせよ。かして。町寧よ。仰付られたりければ。儀の
 如くに。準備して。今朝。未明より。出し。折天好晴て。暖なるに。這頃で。雨に。遇んと。心も。つかず。雨衣
 を。忘れて。來ぬるは。我のみ。さら。敵介。郎も。脱落に。けり。といへば。敵介。聞惚れて。原の。けふの。山
 獵の。獲東西次第で。我等まで。御意に。預る。樂み。あり。勿論。今番の。山獺の。然る。藥に。なるもの。なら。ば
 欲りし。給ふもの。ぞ。よし。あり。今に。解せぬ。稻城が。事也。他。小官人の。情人。信夫と。やら。ンが。親な
 る。よ。喪れし。よし。を。那。未。通。女。が。聞。知ら。ば。必。怒。みて。事。の。障。り。に。なり。ぬ。べ。し。こ。も。故。ある。歟。如何。ぞ
 や。と。密め。き。問へ。ば。潜。め。き。て。そ。を。ま。だ。知。す。や。疎。齒。也。嚮。に。稻。城。守。延。が。女。兒。を。奪。も。復。さん。と。て。多
 氣へ。ま。り。て。訴。た。れ。ども。我。老。爺。と。引。板。屋。殿。の。おん。威。勢。に。齒。の。立。す。證據。なき。事。な。れ。ば。訴。と。て
 狀。を。返。され。た。れ。ば。後。安。き。に。似。た。れ。ども。尙。大。河。内。へ。越。訴。して。曹。司。に。歎。き。申。さ。ば。又。妙。なら。ぬ
 所。あり。そ。を。い。か。に。ぞ。と。推。ても。見。よ。御。曹。司。の。正。室。腹。にて。引。板。屋。殿。と。睦。し。から。ず。這。義。に。より。て
 御。曹。司。の。若。稻。城。奴。を。最。負。給。ひ。蟻。の。塔。より。堤。崩。る。悔。ある。べき。歟。測。か。た。かり。この。故。に。守。延
 を。暗。討。に。し。給。ひ。し。の。亦。是。一。事。兩。用。に。て。信。夫。にも。山。賊。の。所。爲。ある。よし。に。い。ひ。做。て。故意。この。義
 を。報。知。せ。阿。女。心。を。轉。して。今。より。我。に。從。ひ。我。も。亦。阿。女。が。親。の。冤。家。を。索。ね。擲。捕。て。爲。に。怨。と。雪

ひべし。恚ても推辭歎從せず。と口説給ひ、孝女の事也。幫助よりて親の仇を獲られん。與に靡やせん。と深くも計らせ給ひし也。這義の我と與記右衛門の外は知りたるものなさま秘よ外にな洩しそと。毒さ示をうち聞たる。敵介只管甘心して雨の霽る、を覺ぬまでに。姑且餘念なかりけり。然バ小六の初より庶吉と共侶に這悲僕等が密談を聞つ、迷目注して憤然として怒に勝せ。憚る心を推鎮めて嚮に扉に倚掛けたる石を惜々地に拿除きて。なほその言の果るまで戸節の穴より聞きつゝ、息を籠して在りける程に驟雨の朝を終すといひけん。道德經の言。愆雨の歇み雲斂りて朝日長閑。よりけり。去程に外面に雨個の惡黨。逃しく濡たる袂を絞り。あどして敵介の塔背たる箆割籠を揺抗れば。又那一個の若黨の手拭をもて角弓を推拭ひつゝ、天を向うて卒ゆくべしとて共侶に走去らんとせし程。思ひかけあき堂内より白徒等と喚禁る聲より。はやく戸を蹴開きて。顯れ出る小六が勢ひ宛旋風の回く如く。驚き見かへ。敵介を頂髪抓み引よせて。礫に拿て二三間黏泥の中へ投着れば。俱々駭く。若黨を撲地と蹴仆す。白打の精妙蹴られて叫ぶ聲と共に。劬斗りて。姑且の息も吻得ず。仰反たり。登時小六の聲高やかに。天に耳なし。人をもてよく聽しむる自然の應報。我先たちて這堂内に在りしを知らぬ。若黨が不問

談に主の惡事を具にしたれば。紛れもあき。木造木工介泰勝に使う、奴等あらん。その身の姓名恚々と名告りてはやく。綁縛の索を受よと。罵懲せば。稍身を起と。兩個の惡黨本事に怯す。眼を睜りて。ほざきたり。舌猴子他卿の知本州にて。天飛ぶ鳥も疾視べ。隕る已等が大爺のおん威勢を漫に犯して。後悔するな。初の不意を撃れし故に。其頭の石に怪し飛で。聊不覺を取られども。既に密事を竊聞したる。辭者なれば。允しかたかり。觀念せよと。兩聲は罵りつ。左右より刀と見りと。抜閃めかして。砍んと進むを引外と。小六が修煉に手も出さず。足も乱れて。取次あき。刀を俱に打落されて。怯むを蹴反し。撃仆と拳の冴に苦と叫ぶ。二度の打楯に伏累りて。又起んども。せざりけり。當下小六の敵介が腰に狭し。獵索を庶吉拿れといそがして。その一條もて。若黨を引起しつゝ。細れバ庶吉も心ろ得て。亦一條の索をもて。疼痛にうめく。敵介が両手を緊く。結扭りけり。小六のこれを左見右見て。這個奴隷の敵介と喚做すよしを。我既に那里よりありて。聞知りたれども。若黨奴が名は何とかいふ。快々名告れ。偽らば耳を繁ぎ。又鼻をも刺ん。然でもいはずや。名告せやと。責懲されて。若黨の腕を斃して。嗚呼。令郎君允させ給へ。何地の阿人が知ぬども。既に推量せられし如く。在下の木造の家に仕る若黨にて。山勝袖内と喚做すもの也。朋盟。茶田與記右衛門と共侶

聖時と喚禁めて何人歎知ねども大事の訴訟ありとしいへば轎子を駐させん快々仔細を听す
 やと速の指揮にこゝろ得たる。一個の老黨聲ふり立てねん先姑且留りね。と喚かけられて皆齋
 一後方を見かへり。そが儘に列を乱さず土居たり。答時一個の青侍。小六が身邊に走り來てう
 ち對ひつゝ、孰視て和殿の何處の人民にて目今何等の直訴ある。姓名宿所夙意の趣目听くべ
 し。と御誼也具に申上られよ。といへば小六の含笑て仰てゝる得候ひぬ。我身の國司と舊縁あり
 嗚呼がましく候へども素生を明せば新田の一流縛約。大人の田縁まで達六小と喚做すも
 の也。這年來東國まで人と成り候へば知召すべきよしなければも身も着たる證據ありといひ
 つゝ、腰なる短刀をやとら手に取り推立て。這個後村上天皇の脇屋刑部卿助に賜りたる菊一文
 字の御劔也。這義の國司も口碑によりて知食てぞ在とらめ。是を御覽に入れたまひ。い。おん疑ひ
 の即坐よ釋んこの餘の一讀の見參ならで人傳に陳かたり。この意も披露を願ふのみといふ
 に件の青侍の沈吟しつゝ、點頭て然らばその短刀を某姑且預りてよろしく披露に及ぶべ
 し。と答て聽て短刀を受取りつゝ、速しく轎子の頭にまゐりて小六がひひつる趣を簡様く
 と聞の上て那短刀を見せまゐらとれ。バ滿泰听つゝ、手を拿て現這菊一文字の御劔の事。進后

北島親房の日記に寫されしを。我も年來知りたれば。今さら疑ふべからず。恁れば那莊俊の脇屋義
 隆の餘類なる證據既に分明也。對面せせりあるべからず。はやく竟兒を建させよ。と詞せし
 く宣示しつゝ。又短刀を青侍に遞與して轎子を出給ひ。青侍のそが儘に小六が身邊に赴きて
 國司對面せらるるべし。綽恁々といひ知して短刀を返しけり。然程に達の小六の青侍を先に立し
 て些も陪容たる氣色なく。既にして滿泰主の身邊に杖み近着程。老黨若黨その他の伴當主を
 守護して魏々堂々と威羅列たるそが中に滿泰主の小六を相て。竟兒を放ち揖讓して此へこれ
 へと招る。小六の一聲阿と答てうち朝ひ跪きて。逆旅の浪人みづから料らす尊駕を犯して大
 胆なる忠訴せんを請稟せしに幸ひにして。還棄られせ。恁速に對面を充さるゝと分に過たり。願
 ふに竟兒に着給ひね。といふに滿泰點頭てしからば許し給へかし。と應て傍を見かへりて。やよ
 賓客に圓坐を快薦めずや。といそがせしを小六の急に推禁めて。その義の辞ひ奉る。中途の所望
 を海容せられて。意衷を陳る。こよもあさおん管待に候へば。且忠訴の趣を聞召容らるべし。み
 づから先祖を名告ん。恥かいかし。所行なれば。い。い。でも憲查せられにけん。晚生苟もその
 後として。南北兩朝御合體ありし後。稍人と成り候へば。君父の與に忠孝を盡しまつる所なし。こ



みつや

川柳

みつや



小六逢
伊若し國
有子
語

あはれ曹

あはれ曹

小六

川柳

の故に去歲の夏初て西に赴きて秋より吉野に杖を駐め後醍醐後村上兩天皇の宮陵よ仕へまつりていぬる日まで候ひしが國司の南朝歴代の摺紳文武兼備のおん家柄にて祖先の餘光今もなほ赫燦として衰へ給はず唐山姫周の朝鮮に伯仲すべき名家にをりせばいかで安否を訪まわらせて故にし事を知らくほしさに思ひ起しつ御吉野の花の高峯をたち去りてきのふ當所に来ぬる折人の噂に聞はたる尤不平の一事ありその故に箇様々々と稻城の娘信夫が事その親丈作守延が愁訴並に横死の事始より終までその崖略を演説してこの義の君も豫より聞食たる事なるべし信夫の孝女の聞ひあり且守延の養父にて晩生が妹母夫婦甲乙が女兒なれども年七才の時悪人に拐されしを守延が料す拯ひ取りたるなりその緯の趣は今番初て聞知りなき恚れバ信夫の晩生の妹母の女兒で候へども故ありて晩生を兄と稱へ妹と唱へし骨肉よしも異ならせ自他七才の秋九月まで共侶よ生育たりこの緊要の事あらねども信夫が實の二親の世を去りし比よりして他が所生を索ねんと思ひつゝ來ぬる道地にて料らせ稻城の霜婦老樹に各告わひしかバ信夫が事も恚々と聞知る事を得たる也よりて忠訴の一條の嚮に御家臣木造木工泰勝に奪略られし信夫をいかで拿復して且泰勝を撃れたる信夫が養父守延

復讐の願ひ也そを忠訴と稟せしり亦是國司のおん與にて善を彰し悪を誅する國家の法度を糾されなバ本州いよく治るべしと思ふによりて今朝未明より駄店と出て多氣の貴城へいそぐ折から幸ひに道里にて御意を得ぬる事是性急の一得歟はやく泰勝を召捕て此義を糾し給ひぬかしと陳る辨舌爽に些も權威に憚らでその意を聲と勇士の魂世よ又傳多からぬ器量もはやく願れしを側聞せし伴當等の面を照し目を注して我君侯のねん理會いかにやあらんと思ひけり滿泰主のつくぐと所つゝ眉をうち擧めていひるゝ趣こゝろ得がたかたかり猶も稻城守延が女兒の往方を索難てそを木造泰勝の所爲なるべしとて告訴せし折則泰勝を召問して然而對決に及びしかども素より證據なき事にて只守延が推量の臆説あるを争何んせんよりてその議を退けて訴狀を返せし也又守延が横死の光景この山賊の所爲なるべしと地方の民等が稟すよより有司に命し夥兵を出して緝捕に由斷なかりしかどもいまだその賊を獲ず然るを和殿も聞僻めて歎又泰勝を敵手にせんとして中途の嗾訴大人氣なし正しき證據あるに在ずい狂人を趕んとて不狂人も走るよ似たり誰か疎忽といひざるべき三たび思ふに優こそあらじといと鷹揚に答めて既に立まくせられしを小六の霎時を推禁めて御説で候

へども晩生他郷の人として尊駕を犯す訴は證據なくて聽れんや那泰勝が隠居の則他が家の
 若黨山勝内奴隸敵介此個二名の招了して、締既に分明也。その故に箇様々々地藏堂の乾井
 の内に捕整措る頼末を詞せわしく演説してなほ疑しく思ひ給ひ、俱したる小野を案内よ
 立んれん伴當を遣されて牽出さして樹せ鄙語にいふ論より證據今さら多辯よ及ぶべからせ
 みづから問せ給ひせやといひ入れて満泰驚き羞てしからんに、我懲り嗚乎懲ぬあやまちぬと
 咥きつゝ、遽しく伴當を見かへりて英虞將曹明星二郎若等の那里なる十字佛堂に快赴きて達
 生に生拘られたる罪人等と率もて來よ快々せよと火急の生命承りぬと應も果せはや身を起
 す件の二名の難色奴隸を相從へて然而庶吉を案内にしつゝ、地藏堂に來て見れば野井に石
 を蓋してあり那内敵介の此井の内にと庶吉がいふに大家こゝろを得て石を擡んとしたれ
 ども些も動ざりけれ、絆の聲に此石を誰が拵卸したるやと問へば庶吉微笑て敢人手を借り
 しにあらす。我東人のひとりして拿も卸しもし給ひにきといふに大家駭呆れて然バ和郎が
 御主人の什麼幾人のちからやあるらん。さてもくゝとばかりようち目成りてありけるを、御已
 べさにあらざれば大家齊一立懸り力を戮し辛して纒に石と拿除きて、内と敵介を牽出し追

立て、總國司の面前へ推居つ、恁々と稟て索を扣てをり奴隸遠く退て非常を成も多かりけり去
 程に内と敵介の思ひがけなく、既に國司の面前に牽居られていよくます。驚怖れ膝
 折布て頭を擡得ざりしを小六の然こそとうち對てやとれ、内敵介もれん面前にて今一度向
 の如くに招了せよ快言せやと責る、勢ひ脱れがたければ、個惡僕等のおそるゝ、即便生の泰
 勝の惡事の趣遣もなく具に招了してければ、國司の小六を見かへりて、恁ハ和殿の働にて黑白
 分明なるから、泰勝が罪遣べからせけふ、先妣の忌辰により、我身廟墓に焼香せんとして、遺處
 まで來ぬれども、料すも殺伐の詮議は不淨を帯たれば、香垂院へ赴きかたかり、這里より城に立
 かへりて、即便木造泰勝を召捕して禁獄せん。且よくこの意を得られよといひ入れて、小六の些も
 礙議せせ仰うげばり、いへども、尙事運々て、泰勝が惡事隠見を聞知らば、はやく逐電とるとあら
 ん。然バ信夫將走る、敵亦從せば殺しつべし、願ひ這里より、晩生は檢鑿使添させて牽給ひしを、
 馬と雜兵十名許借給ひ、いへん使して泰勝の宿所は、騎着擲捕て信夫救ひ、いへんこの義を許容あ
 れかしと云に、國司の諾て壯ある哉、勇士神速その義寔に、然可なれども、和殿一騎てはやく那
 首趣きば、泰勝主僕猶疑て防戰及ん、敵此義も未知る可らせ、泰勝父、木造親政、去日阿射質へ遣

たれば目今宿所に非と故共從類家僕猶多り依和殿借東西有と論て近習に吩咐て轎子の内
 措たる木夾一枚拿寄てこの非常の事有ん折一人たり共我駢人たる其與の符契て當家相傳の
 烙字有我身外出の折と雖必其内一枚を轎子に容さして隨身したれば這里在泰勝主僕相拒と
 も是を出て示なバ皆謹て承伏せん努々疎畧有可すと告示つ、木夾を遞與て又英虞將曹を
 兒側よ召よせて汝ハ達生と共侶に雜兵を相從て快泰勝が宿所に赴け明星二郎ハ其懸僕等を
 牽立て我が迹より城内へ將て參可這它の事ハ恁々と控て小六に別を告て許し給へと轎子に
 移る日影の辰過てみにまだあらぬ春の花の草あき方へ燥返と伴當居多先に立後に跟さつ、
 路直さ多氣城投てかへりゆく間隔て明星二郎ハ奴隸に索を拿したる杣内と敵介を追立々々
 共侶に舊來し方へ趣きたるそが中に英虞將曹ハ土居て主の轎子を目送り果て稍身を起し小
 六に對ひて檢鑿使を承りしよしを告て牽殘されし主の乘馬を鎌奴に牽寄さして卒とて小六
 に遞與しけり登時小六ハ將曹と雜兵們を勞ひて遙後方に侍りたる庶吉を召近着て絆の趣恁
 々と此里より去向を指示して汝ハ馬に附かたからん英虞主に從ひて我投かたに到るべしと
 云つ、將曹にうち對ひて那木造の宿所を問に將曹答て泰勝ハ父親政と同居にて手斧陝巷の

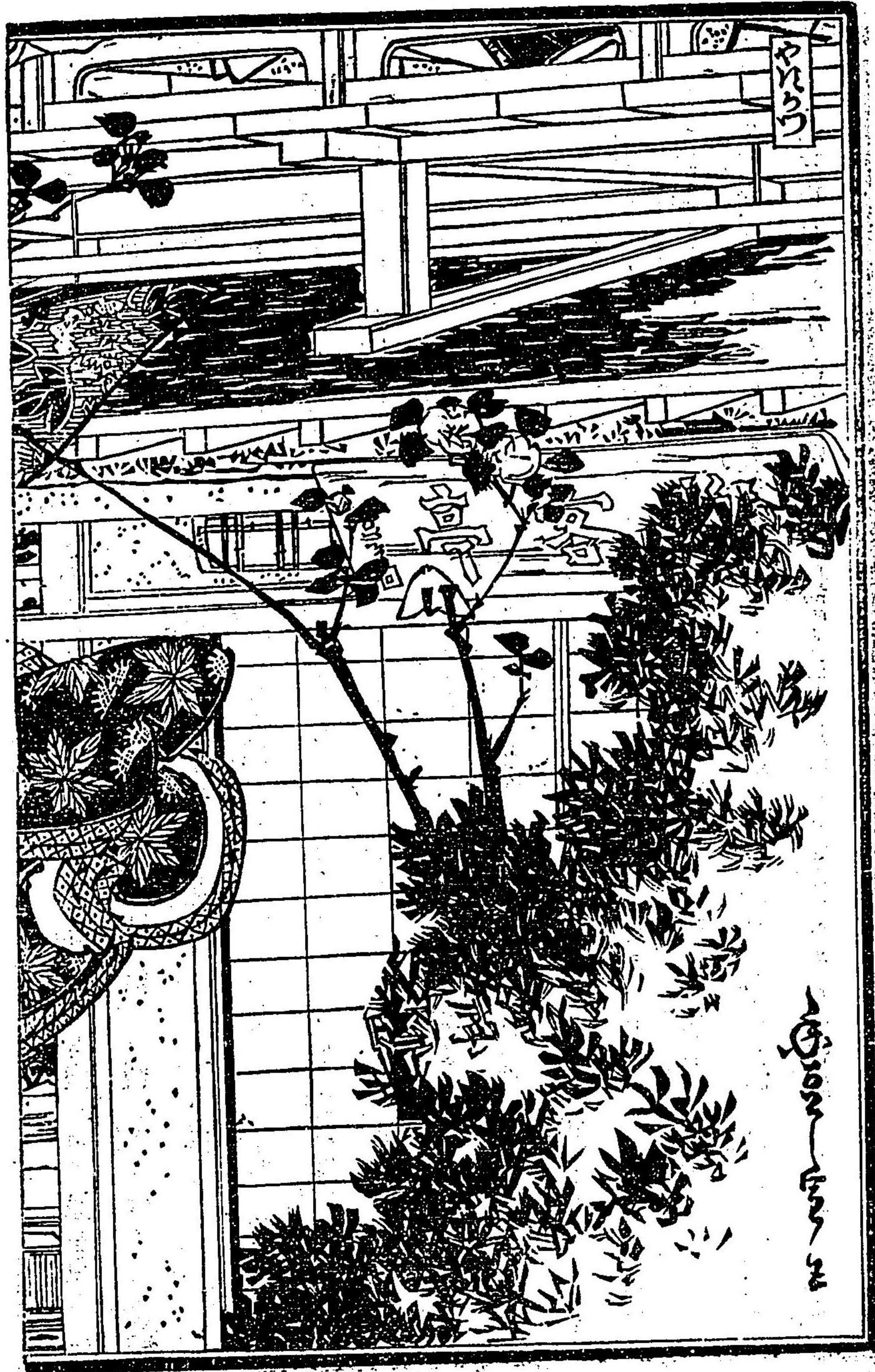
居宅に在り又三十蚊の里に別莊あれば其里に起臥する日もわらん孰に案内を致んやといふ
 に小六ハ眉根を揉めて本宅別莊二ヶ所あらばけふ泰勝が在る處を杣内敵介に問べかりしに
 然とい知らで脱落にけり什麼泰勝ハ日勤なるやと問へハ將曹頭を掉て否日勤にハいはず遣
 月の某日より病着ありと聞へしのみその在る處ハ知ざりきといふに小六ハ沈吟してしから
 ばその三十蚊なる別莊に赴くべし願ふに那泰勝ハ畧奪て隠し措く信夫を父母と俱ま在る本
 宅にハ憚るならん况病着に推けてうち籠り在んにハ何處へか赴くべき件の里ハ何處ぞやと
 問へハ將曹點頭て亮查寔にその由あり那別莊ハ這野邊より約莫廿四五町あらんその路筋ハ
 恁々也箇様々々にハ最町筆に差示そを小六ハ听つ、記臆してしからバ路次をいそぐべし
 御免あれと揖讓しつ馬にうち乗り鎧を蹴立て霧地に走らすれば雜兵并に庶吉まで皆後れじ
 と足に信して喘々ぞ趕たりける話分兩頭去程に木造空介泰勝ハ嚮に信夫を奪はひし折父内
 匠親政ハ新城修造の總執事よて阿射賀の里に趣きて久しく還らざりければも母親にとら深
 く秘して三十蚊の里なる別莊に腹心の奴婢を諷てうち潜せて折々に來つ、信夫を挑みしか
 ども素より孝烈堅固なる妙なれば罵辱めて日數経れども從ハ追らバ自殺に及ぶべき覺期

に懲りて心長閑く。日毎に術を易科を替なば。本意を遂んと尋思をしつゝ。いぬる日より病癒に
 假托將息の興と唱て夜も日も三十枚の別荘に在りき。のふ醫師の誨たる那山瀬を獲まくはし
 さに若黨内にてこゝろ得さして。奴隷敵介共侶に山獵せよとて今朝未明より。近き高峯へ遣し
 たる。其後に泰勝の獨つらく思ふやう聞くがごとき。那山瀬の即效至妙也といふとも。這頭
 の山になき東西あらば。勞して功と得かたかるべし。けふは日術を易て信夫が親守延の横死の
 よしを報知して。靡かば爲に力と盡して。仇を穿鑿り撃果して。怨を雪め得せんぞといひ。必
 親の與に俺をちからに做ざらんや。這計畧の提徑にて。孝女の心を弱く做すべき。その即效の山
 瀬に優劣のなきものならん。嗚呼然也。と肚裏に處致はやく決りければ。日属信夫を隠し措く矮
 樓に登りて。現ふに。夫の次をうち被ぎて。臥たる隨に睡りもせず。涙流る。塗枕の裏見の晒布
 も外なら。容顔毎に愁ひを合て。雨に惱る漁村の柳風に傷る露臺の花も。是に優さじと。看惚
 れたる泰勝や。をら枕方に寄添ひつゝ。慰めて然る日守延の横死の趣箇様々々。と實事虚
 談口に信して。報知しつゝ。又いふやう。是等の事を那折は快知せんと思ひしかども。只山賊は所
 爲とのみ聞へて。仇の安定ならねば。歎けきを見るも胸苦しき。よけふまでの黙止せしが。儂の心

ひとつよて我も靡かば。其山賊は。是我岳父の冤家也。樹を伐草を交拂ても。索求めて怨を復さん。
 然でも心に従せや。と其身の惡事を外々しく。思に被つゝ。口説けり。信夫の親の横死のよしを聞
 く。に得堪ず。吐嗟と叫て身と起し。伏沈む。駭嘆悲泣無量の憂苦に。流る。涙の雨より繁く。聲を
 惜ますら。泣しを才に思ひ返しけん。猛然として頭を擡て。蛾眉を逆建。星眼を睜開て。信と泰勝
 を疾視へ。聲を戦して。怨しや。武弁の奸賊長家の婦女子を。畧奪て恥を。知ざる。綺語艶談。只是人を
 苦しめて。身の樂を。做とのみならず。我親の死を。けふ迄も秘て。更に思がましく。爲よ。怨と雪んと
 言る。義理歎無慙の。白物女子と思ひ。侮らば。返由なき。悔あらん。嗚呼。哀歎か。家尊は。大人。我身
 の所以に。いくばくの心を。苦め夜を犯して。命果敢無なり。給ひけん。御運の末こそ。痛ましけれ。什
 麼何とせんと。計りに。賜を斷つ。孝女の哀情物狂しく。成迄に。猶も怒に。堪ざりけん。又泰勝に。打對
 ひて。我父身故り。給ひし。事故が。殺すに。在せ。共汝が。惡事の。故をもて。身の危きを見返らで。其禍に
 遇給へば。怨の。則汝に。あり。思知るや。と罵りて。泰勝が。傍に。措たる。腋挿の。短刀を。握拿り。早く。身を
 起して。拔放さんとして。けるを。泰勝透さ。打落して。小腕。奪て。動せ。怒れる。聲を。振立て。噫物々
 しき。腐女奴打。靡せんと思へば。心長閑く。慰たれ。恩も。情も。辨へ。せとて。道儘。よして。允さんや。



三十四



三十五

三十五

其義ならば手と結紐り足を繋ぎて本意を遂げ遣方へ來よと掖立るを立じと角へと女子の力に克ふべくもあらざれば稍振放ち掻潜ても脱るゝ方なき必死の覺期に身を汚れじと矮樓を欄干に衝き足踏かけて跳揚りつ裁稠の間へ挫と落たりける這物音に奴婢四五名危瀕のかたより走出て相れバ信夫の卷石に勝をいたく撲しけんはや息絶たる光景に藥よ水よと罵詈ぐを泰勝の矮樓より直下しつゝ聲をかけてやよ然な謀ぎを隠藏東西也はやく納戸へ引入れて術幹をせせやと諭そののみづから其處に趣きて又勦んいさそがにて活すハ日鷹の心盡しの画餅にやならんと吐きつ今さら短慮を後悔の額を病して忙然たる胸安からせ思ひけり恚る折から達小六助則の獨駿馬に鞭を鳴らして三十枚の里なる泰勝の別荘に來よければ囚りと下て門内へ馬を牽入れ繋留めて呼門もせず找み入るに一家兒の奴婢の威信夫が即死に聚謀ぎて多く納戸のかたよ在り咎るものゝなかりしかバ小六の四下を看回らす矮樓にも人ありとおぼしく咳の音聞へしを泰勝あらんと猜したるその機に臨みて些も猶豫せず忽地に聲をかけて空介殿の在する空殿空殿と喚るにぞ泰勝の胸安からぬ尋思の折に其名を喚て心共なく應といふ答に小六の突然と矮樓に登來よければ泰勝駭訝りて怪や和

殿へ何人ぞと問せも果す近つきたる小六の屹と立向ひて知せや俺の國司の使者達小六と喚做たる原是東國の浪人も木造泰勝罪惡ありその事露顯に及びしかバ則國司の密意に儘かして俺召捕んと來たれり覺期をせよと罵れば泰勝の吐噓とばかり駭きながらなほ怯まき思ひ復せし聲苛めしく這辯者が何をかいふや俺身に犯せし罪わらず非除その罪ありとて封疆索より四州に亘りて一万五千の軍役を出させ給ふ俺君の智勇の家臣匿しからぬに津濱りの浮浪人をねん使に立られんや憶ふに汝の俺が機密を泄聞たる事わをもて權して金よせんとてか貴命を詭る騙賊の魂胆其頭の術に乗る俺にのわらせ目に物見せんと短刀を兎と引抜く勢ひ悍く斬んとせしと引外と小六の透させ扇をもて刃を丁と打落して怯む利手を引肩被てちからは儘して投たりければ泰勝の眞柱に頭を撲し眼眩みて雲時の起も得ざりける響きに駭く斧田與記右衛門這它も若黨奴隷までこの何事ぞと胆を潰して推續さつゝ散動々々と大家矮樓にうち登るそが中よ與記右衛門のはやく眞先よ進登りて那爲体に些も礙議せず主人の冤家服さじと名告かけつゝ腋挿の刀を抜て面も掘らず聲を小六の最ともて愛流し踏込で眉間を破と打惱せば吐噓と叫ぶ與記右衛門儚す刃を馬里を捨て透進く弱腰下高ふ蹴ら

れて俯走る二三間。是も柱に面を俣して向齒三枚擡げれば流る。血さへ鼻血さへ煎蘇枋の大場傾けらるゝに異あらず。嗟ら苦しむ聲悲しげに。壁に朝ひて平張たり。後れて來ぬる若黨奴隸の小六が本事に胆落て只獨々と罵るの。と推捕稠たるのみにして進む稀もあかりけり。登時小六の聲高やかに虎狼の奸黨この期にもなほ天罰を知らざるや。我の他郷の旅客なれども義の典に親疎を擇まず弱を助けて強きを折き冤と伸怨を雪めて。世の奸惡を鋤まく欲する。宿念越に愆すけふその事の手揪。野井の地獄の頭にて泰勝と同惡ある。内敵介を生拘たり。こゝをもて信夫が所存守延が擊れし趣通て泰勝が惡事の頭末。他們が招了より露顯の折料。す國司の先妣の廟所へ參詣の與出。まして那野を過り給ふ程。我泰勝が罪犯を恠々と訴て山。勝内敵介等を國司の從者より牽渡し且泰勝を緝捕の與則使節の木夾を預賜りたりければ。牽せ給ひしれん馬を借奉りうち騎て檢鹽使英虞將曹等に先たちて走らせ來つ。方儀泰勝に使節のよしを示したれども實事とせず。那惡僕と共侶よこよなき無禮に及びしかば。已とを得せ擡。掴みて主従を投懲したり疑しく。是を見よ英虞生緝捕の夥兵等も程遠から來つべきぞと。詞せわしく告示しつゝ。懷を擡擡て那木夾を拿出すを見れば。果して疑ひもなき國司家傳の烙

字あり得實とばかり跪居く。若黨奴隸いへばさら也。泰勝并に與記右衛門の這照鑑にいよく。遠てやうやくに身を起せども撲傷の疼痛に勝され。腰さへ立せ且羞て俱に頭を低て在り小六のこれを見かへりて。やをれ泰勝從類們信夫を何處に隠したる快々這里へ將て來せやといふに。大家語言ひとしく仰でいへども。伴の妙を今さらに推隠して何にせん。信夫の剛才這矮樓より落て絆斷れいひぬ。その折の泰勝のみ此處に在しか。甚なる故賊その義の知らず又活べうも候はずといふに。小六の駭嘆して已なん。他が薄命俺もし這里へ來るとの一响はやく。命を隕す愆ちのなからんに。命運茲に竭たる歎亡愆也ども。扛もて來て俺に相せよと急せ。ば承りぬと答たる。そが中に兩三名勤しく階子を下立て。信夫を蒲團に推包み。手繰にしつゝ。推登して小六の身邊に扛居しを。小六の蒲團を推ひらかして。相れば寔に呼吸絶たる死顔ながら。色も變らず。迭ま七才なりし秋相別れしより。年闕ても有聲に残る幼兒貌の其歎とばかり思ふのみ。画餅になりたる再會の甲斐もあげきを推隠と小六の獨村胆の心つきつゝ。思ふやう俺御吉野に在りし時。仙嬢の授給ひし那仙丹のあほ一粒。藥籠の内は在り。嚙に庶吉が死せし折這妙藥の奇效より。て死を起しぬる例もあるに。且つ仙嬢の示現にも。殘る二粒の後々に用るとお

るべしと宣はせしが果して錯す今又これを用ひなば信夫を救ふとしもあらんとはやく尋思
 をしたりしかば又衆人よりうち對ひて信夫の道里より落し折窮所を撲して死たりとも那身は
 受たる傷の見へせ若良薬を用ひなば息吹返す事もあるべし俺幸ひに腰に附たる薬籠に奇薬
 あり清浄水に火を鑽掛て快もて来よと吩咐れば若黨一名こゝろを得て一個の奴隷共侶に速
 しく下立て時を移さず件の水を茶碗に汲とり折敷に載て恭しくもて来にけり小六のこれを
 傍に措して信夫が胸を拊試るよ聊温まりければ臈て一粒の仙丹を拿出して水と共に信夫が
 口に沃ぎ入れ仙嬢を黙禱して姑且胸を拊る程に信夫の忽地吐嗟と叫びて眼を開き身を起そ
 蘇生に大家うち驚きて奇也々と稱へたる中に小六の歡びの氣色面に顯れてやよや信夫心
 地の甚麽身節のなほも痛る歎俺の國司のおん使にて泰勝等が倣せし悪事の既も露罪に及び
 しかば召捕に向ひし折阿娘の剛才高さより落て身故りたりしよし聞へにければ試に我感得
 の仙丹あるを拿出りし用ひしかば即效既に愆たで慙る蘇生の歡びあり阿娘の亦何等の故に
 みづからその死を急さしぞやと問れて信夫の恥省たる貌を改めを頼つきて誑使上は御座す
 淡き女子に待れども自迫りて死を樂んや奴の親の撃たれしよしとけふまで知らず身の憂苦

をのみ歎げさに堪え侍りしに嚮に那泰勝が箇様々々にいひしかば父の横死を稍聞し知りて
 いやしく怨みのやる方ささに擊果さんとしたれどもその事克のせ拉れて剩この身を細めて
 本意を遂んと挑れたる身を汚されしと必死の覺期を極めて道里より裁稠の間へや落たりけ
 んそれより後の覺ざりしに然る有かたき藥の即效再生きぬる御洪恩何の時にか忘るべきな
 ほこの上れかん慈悲に世になき父の警敵を森も果して現在の母の歎きを慰るよまがも欲
 得と願ふのみいかで宜くよろしくと憑む言葉の露ばかりだも國司の使者の實の親の守傳さ
 し脇屋の公達小六丸ぞとまだ知ねども孝義に厚き烈女の誠心小六の不覺に感涙の找むを入
 に見られしとうち紛らする咳きと共よしばしと嗟嘆してその義の心安かるべし阿娘の父を
 撃さるも亦泰勝が所爲にして若黨内與記右衛門に密意を示し遠箭に掛て射て殺したる趣
 は今朝内と敵介を我料すも生拘りて他等が招了により分明なれば途にて國司に訴稟して
 事のこゝよ及る也慙れば泰勝主僕の罪戾今さら免るゝ所なし必死刑に處せられて件の怨と
 雪ん事日を偲へて等べきのみ去るに嚮し泰勝の慙に我を疑ひて主僕無禮に及びしかば己と
 を得せ拉ぎて聊懲したりければ見らるゝ如く撲傷は衰りて半生半死の爲体天網恢々疎にし

て漏さる心地快事ならせやと諭せば得便と信夫が歡びなほ想しげに泰勝を見かへりつ疾視
 て虎狼も猶夫に獲られて檻に入るよ及べぬ鼠にしかせなりにたり是も亦かん使の御庇と思
 へん慰め侍りといふよ小六の領きて那相内と相謀て守延を射て殺したる與記右衛門も這里
 にわらんはや逃たる歎甚麼ぞやと問に信夫の衆人の答を等と指さしてその與記右衛門の那
 奴で侍り主共侶に投擲されて腰脚立すあり侍りしに竟に漏さぬ天の羅網ひの恚ぞありけん
 かしと報る折から國司の雜兵并に庶吉英虞將曹も漸々に走着てこよ來會してければ小六
 の則泰勝主僕の事の趣信夫が自殺をを仙丹の奇效によりて甦生らせたる事までも首より尾
 までその崖零を説示せば誰か感嘆せざるべき庶吉の笑しげに小六に對ひて恭しく遯參と陪
 話てそが儘に主の後方に侍りけり

第十八回

裡應外口法を濫る
 理論方正枉を榮む

登時英虞將曹の小六が武勇の働さを只願ふ賞讃して然而泰勝にうち對ひてその身の罪惡露
 顯により小六を使に立られたる君命を宣示して這別莊に在る所の奴婢の名を問人數と糾す

よ與記右衛門と共に若黨二名奴隷の通て三名よ過ぎせ又婢妾も三名ありム等ハ擣よ驚と怕
 れて逃て那這に躲れしを一個も漏さぬ召聚合て日属の始末を鞠るに若黨奴隷ハ泰勝が信夫
 を零奪せし折拘らひたるものもありその他の機密を知せといへども信夫を隠措く惡事を悟
 ざるをわるべきや恚れば主と同惡の罪を免るゝ所なし一個も餘とべからせとて夥兵に下知
 して男女齊一舞々と細めて更に一個の雜兵の村長許遣して恚々と吩咐けり因て三十畝の村
 長の時を移さぬ莊客等に從興二挺を吊して這別莊に來にければ將曹則村長に夫役の所要を
 宣示して木造泰勝罪あれば主僕俱に召囚る泰勝の父親政ハ嚮に阿射賀に赴きて本宅にこそ
 の妻在のみ且這處ハ別莊あれば若等姑且うち成りて後のねん下知を等奉るべしこの機を恚
 つべからせと町軍にこゝろ得さししその竹輿一挺よ信夫を乗せ又一挺よ泰勝をうち乗
 せてこれにハ綱を掛て非常の備とて這它與記右衛門を首として數珠繫せし奴婢を雜兵等
 よ追立さして小六と共に別莊を出て多氣よ還りける去程に達小六助則ハ義俠思ひの隨に
 事成りて些も遺憾あかりしかばその身の庶吉を從へて又刑馬にうち跨り將曹等と咸先に立
 して後より徐に拍せけりこの日よりして遐邇の士民はやくも件のよしを傳聞胆と遺して小

六が義胆豪俠を賞賛せざるものもなく。名の神風の伊勢のみならず後々に至りて五畿七道に隠れなく。唐山なる田仲王劇猛也とも優へきやとて皆慕しく思ひけり。間話休題却説英虞將曹の達小六と共侶に信夫を勳り。泰勝們主僕九名を召捕て多氣の城へかへり來にけれ。豫て君命を稟たる有司幾名敷各々これを受奉て先小六主僕を勞ひて儲の旅舎一案内をさるあり。或の問注所に出仕して泰勝主僕の罪惡を糾斷せしも多かりけり。登時有職の毎の泰勝主僕及信夫を局内に召容れて先泰勝と與記右衛門等が悪事の顛末を鞫問ふ折山勝内敵介の細られて傍へ在り既に他等が招了にて罪惡露顯の上なれば泰勝も與記右衛門も頼陳をすることを得ず皆阿容々々と罪に伏して又いふよしもなかりけり。恚而有司の信夫を對ひて日屬泰勝に拿整られたるその身の始末を鞫るに信夫の犯し汚されずけふしも自殺に及びしを小六が所藏の奇藥によりて再生たる緯の趣なは詳に聞へしかば有司等総てその孝烈を賞てそが儘退してよしを國司に聞へわけ其夜獄舎に撃るゝもの泰勝并に與記右衛門。袖内敵介この外にも主の惡を資たる奴隸二名あり共に主僕六名也。その餘の奴婢の親政が本宅なる老僕某甲を召出して倍と閉籠措くべきよしと下知して預け遣しけり。小六のいたま此義を知せいかにく

と思ふ程。次の日英虞將曹の小六が放宿の徒然を訪慰めて昨夕泰勝主僕六名ひとしく禁獄せられし事并に泰勝が父木造内匠職政の阿射賀の作事に出役の折なれば即便那首御下知ありて御目前と允されそが儘慎居ならん又那信夫の母親老樹と五柳村なる長隣人等を召寄られひ只今來たれり即他等們返させ給ふ御下知由聞たり國司の貴客に御對面有へじと仰られしか昨夕より感冒にや聊不例なるより未その義に及れそ是等由を報知て安心させよと宣せし内意齋て來つる也と言に小六の歡びてそへ慚愧事よこそ候へ信夫の晩生が義妹にて那養母老樹も像示し事あれば自送て那首に到る歎然の這里て老樹等對面とせまほしけれども未國司に拜見せざれば進退自由致し難り奇て伴當庶吉を晩生が代として信夫母子を送らして五柳村へ遣へしと云に將曹異議に及ばそその左も右も貴意依べし然ればやく伴當を恚々の處まで出し給ひ便宜ならん某の先退りてその義を五柳の村長に傳へてこゝろを得さすべしいとがせ給へと期を推して告別して立よけり登時小六の庶吉を身邊近く召よせて目今聞けん情由なれば和郎の信夫母女を送りて五柳村へ趣くべし勿論和郎も知ることく老樹刀自の病着あり女兒窮阨稍解たる歡さよ病苦を忘れて這里迄來るとも未本復さるべし

況信夫ハ實の親の世になくなりたる事をしも所かば憂ひに累し哀傷然こそと想像れば是も亦不便也和郎ハ那里に留りて朝夕の所爲何まれ彼まれ心を用ひて補助なりね我うへハ世に秘いへども那母子ハ憚もなし和郎見もしつ聞ぬる限り信夫に報て慰めよ我ハ國司に再謁して那木夾を返しまつらばその折行て意衷を釋んこの義を心得よかしと言に庶吉沈吟じてその承候へども小人こゝに侍れば萬事に便なくをいそべし那里に止宿の一條ハ望しから老候と推辭を小六ハ聞わへきその益なき遠慮也三の饌もその餘の東西も皆國司より賜は和郎が側に在とて我身に便なき事ハなし稻城の母女を慰めて補助にならん誰が與ぞ我身に代由を思ひそこらの感なかるべしよくせよかしと町寧に諭て臆懷なる裏肚の端を開きて拿出金十兩を數て紙ヲ推包みしを庶吉よ遞與していふやう和郎が伴の母子を送りて稻城宿所到りて後にそれを老樹の刀自に贈りて我ハこせしと言傳よ娶居主人の事にしあれば故意手簡ハ遺さず取遣しそ袂によく巻糊て腰に纏よ快々よといそがして理切たる主命ハ庶吉ハ且感じ且畏て更に辭せず仰こゝろ得候ひぬ及ずとも誠心の届ん限り母女の興に憂を分ちて補助になりてん御心安く思されよと答て臆て速しく身装とる程しもあれ一個の奴隸

が走り来ておん客人の伴當に稻城の母女ハ問注所を退りて村長共侶よ目今宿所へ還る也このよし告よと英虞殿の指揮によりて叫まうと卒案内をせん快來ませといふに庶吉應をしつ小六に對ひて恭しく告別しつ伴の奴隸に引れて出てゆきにけり案下某生更題木造内匠親政の宿所に泰勝が事はやく聞にて罪惡脱る、所なく既に禁獄せられしを母親痛く驚き歎きて親族を聚合衆議を凝し救拿まく思へども術計出る所なし折から良人の城修造の物執事にて阿弥賀に在り憑む所の女兒のみ他の國司の側室にて引板屋殿と稱せらる鐘愛今盛ならバ父親收が權臣に倣登りしも女兒の庇也然バ又泰勝とい箸折膝む同胞なれバせん術めらんと尋思としつその黄昏より潜やかに橋子よ乗走らして引板屋の局に赴きつ閑談數刻に及びしを人大かたハ知ざりけり憚而泰勝の母親ハその詰且未明ハ還りて腹心の老僕等に機密を示しこゝろを得さしてその筋なる有司ハさら也獄卒までも漏すとなく多く人情を濟して泰勝がうへを憑み日毎に獄舎に食餌を送りて海問るゝとあらバ箇様々々にいふべしと情地に助言したりける憚りし程に泰勝が倣えし惡事ハ只信夫のみならず年來姉と父親收の勢ひを假りて忌憚らず或ハ人の妻妾と姦淫しあるひハ民間の美女を豪奪して犯して後に返

せしもあり留めて妾にしるるもありしを今番いふもの多かりしか。有司又々泰勝を獄舎より牽出してこれらの虚實を鞫問せしに泰勝即便陳するやう。今ねん尋の趣、某一切覺あらざ。その怨あるもの、流言にこそいひめ憐いへば身の非を知らず。言を飾るに似たれども信夫也。とて故なく奪奪せたるにわらざ。初某媒妁をもて娶らんと欲せしに那親稻城守延が飽まで罵辱めたる口の憎さに怒に得堪ず。正なき事をしたれども然とて某が若黨内與記右衛門は吩咐て守延を射殺させたるにいひて那若黨等も守延に罵られたる怨めれば殺して後。又某に告て忠義にしたる也。其情かくの如くなりしを然とて證據あるにあらば陳せるとても甲斐なからんと思ふて黙止候へども。再度の譴責はとを得て陳る所是實也。願ふに内與記右衛門を拷問あらば詳し知られん。某漫に罪を犯して命を惜にわらねども。此事聞はば斧鉞に就かば親さへ姉さへ安からず。家門の破滅及ぶべし。這意を查し給へかし。と啣言かましく頼陳して哀請ふて已ざりければ有司の憶ず面を照して俱に肚裏に思ふやう。現這不造泰勝の不行狀の癖者なれども父の一二の遺家より姉の館の御寵愛大かたならぬ側室也。その方さまより我等へ人情しバくありしよ。今この便宜を退けて方便なくの怨みられて身の上及びや

せん要こそあれ各々言に出ねど小人の尋思齋一理を枉て又獄舎より内と與記右衛門を牽出さして方僅泰勝が陳したる。赴をもて責問に這惡僕等の承伏せせ争ひ果しなかりしか。有司等連りに焦燥て拷問數刻に及ぶ程に内與記右衛門も苦痛に堪ず。心にもわらで首伏してければこの日の應に果にけり。恚而有司の再斷の赴を聞へあげて泰勝が罪一等を降さんと請申せしを滿泰の主諾ひてしからんに。泰勝の罪ありとて死に至らず。信夫を蒙奪したりし。是賊情に似たれども強姦せしにわらざれば。是も又罪重からず。只守延を射て殺したる。内與記右衛門を市に棄て泰勝并に敵介等の從僕三名の五十板笞撻懲して追放すべし。その餘いさせる罪あらざ。赦すべし。免すべし。と速に下知せられけり。以あるかな。泰勝の姉引板屋の方の弟の禁獄せられし日より閉整り發問へて敢又召に應せ。國司のこれに驚きて局に立より病痾を問てみづから慰め給ふと。兩三番に及びしか。引板屋の方の思ひの隨に弟の與に愁訴して何どか口説まうしけん。よくも聞知るものなけれ。現女謁内奏の和漢國家の蔽政にて賞罰是より乱るゝと。今も初ぬ沿習にあされ。滿泰主も俱に憂ひて便宜もわらば。泰勝を助んと思ひ給ふものから。然しも法度を私情に儘して自由よせん。いさそがにて摸稜の手段に

一旬あまり徒に過されしにけふ有司等が申せしよし。の判ずその欲に稱へば敢又尋思に及ば
 せ。締遂に命せられて。柵内與記右衛門の首を刎れら。泰勝並に敵介等の俱に追放せられけり。這
 時までも達小六のちほ城内の旅舎に在り。國司に對面せらるゝをけふか明日歟と等程に。英虞
 將曹と明星三郎の主人の内意あれど。日毎に小六を訪慰めてある。明の江湖上の物かたら
 ひは銷し日もあり。又ある時ハ武を講し古今の治乱を論しあどして。町草に管待ければ。小六ハ
 國司の安否を問に。病着ハ稍瘥り給へど。いまだ沐浴浴みをせられずなれども程遠から。沙汰
 あるべしと答るのミ。長き春の日慰難たる。鄰耳房の晚櫻夕の風に。零果て。新樹に更る三月の天
 も下三四日になりし時。候國司對面あるべしとて。將曹が案内に立せし。走卒の來にければ。小六
 ハ。勞ひ姑且等して。纏て準備の禮服に更めて出にけり。登時英虞將曹ハ内立關に出迎へて。儲の
 席に誘引ふ程に。國司北畠滿泰主ハ心腹の近習をのみ多く左右ハ傳らして。書院に在して對面
 せらるゝ。この舊縁の義と以貴賤を分たす。うち解て相譚ん與なれば。僅に賓主の坐を隔て。身邊
 近く招れしを。小六ハ阿容す。膝を進めて。病後の安否を問まうせ。バ。滿泰ハ又いぬる日の働きと
 褒勞ひて。快にも對面とべかりしに。憶せ風邪ハ胃されて。那歡びを舒す。過せし怠慢の罪を得り。

就て木造木工介泰勝が罪過の事な。何疑じきよしもあれ。バ。屢虚實を糺させしに。その情やうや
 く發覺たり。事の起本と原るに。稻城守延を射て殺せしハ。泰勝の所行にあらず。若黨柵内與記右
 衛門が守延に罵られたる怨によりて。遠箭にかけて。殺して。後に泰勝に告て。その身の功よせし
 よし。招了かさねて。明白あり。恚れば。是泰勝が罪過聊輕きに似たり。勿論信夫と豪奪して。別莊に
 隠し。措きしハ。賊罪をもて。斷すべしなれども。信夫ハ幸ひに犯されずして。あは處女也。とみづか
 らも。報有司等が申す所も。右の如し。恰と云恰といひ。重罪ハ二個の若黨泰勝ハ二の町也。こゝを
 もて。柵内と。與記右衛門を死刑に行ひ。泰勝並に敵介等を。杖罪に處して。追放したり。この義をこ
 ろ得られよかし。と人もなげにぞ告らるゝ。小六ハ所つ。冷笑ひて。最憚りなるをながら。その
 御誼とも覺す候。非除泰勝が。吩咐て。稻城守延を射させずとも。害せしよしを。告し。折那柵内等を
 罪とせせ。允し。俱に秘したる。泰勝が罪重から。せや。君那晋の史。董狐が。趙盾君を弑せりと。寫せ
 しよしを。聞給ハ。せや。晋の靈公ハ。不徳の君よて。その性酷く。傲りたり。又趙盾ハ。晋の正卿。その心
 操忠節なれば。よく靈公を諫れども。靈公。听かず。鬱悒く。思ひて。殺さんとしぬる事。兩三番に及び
 しかば。趙盾。脱去す。欲して。いまだ。晋の境を出ず。時に。將軍趙穿と。喚做すもの。靈公を。桃園に。襲

ふてこれを殺しよけり。これによりて趙盾のかへり来て位に復せしを普の太史董狐が書して。趙盾君を弑せりとして掲て朝に示せしを趙盾見つゝ訝りて弑せしもの趙穿也。俺罪なしといへりしを董狐の听かすさればとよ子ハ普の正卿あるに亡たれども境を出ず。反て國の亂を誅せず。子にあらすして誰やといひけり。孔子これを聞給ひて董狐ハ是古の良史にこそわなりけれ。法を書して隠すとなし。宣子を云。趙盾も良大夫也。法の爲に惡を受たり。惜かき境と出さば免んといひれしとぞ。語ハ左傳及史記に見へたり。這故事ハ泰勝の罪惡と異あれどもその理ハ是一致也。君ハ文武の名家にてをいそるにかばかりの理に感せ給ふ。素より故ある事なる歎今諫るハ六日の菑蒲その甲斐あるにいひねざる。法度の君の出所。君亦みづから破り給ひ。民焉ぞ從んや。孟軻の境に入る毎ハ國の大禁を問ふといへり。法律暗くハ罪を得易しはや身の暇を賜りてん允させ給へと告別して立んとせしを滿泰主ハ慌しく喚返さして。いハる趣。泊理至極。赧然として汗するまでにいと恥かしくおもへどもいさらせんかたなし。恚いハる愆。懲と飾るに似て鳥許なれども泰勝が祖木造政勝ハ後村上天皇の河内に巡狩ましませし折陪臣ながら軍功あり。その折先大父多氣の右大臣顯の感狀に今番の軍功拔群也。縱子孫に罪わがとて

も七代までハ赦すべしと寫れしよしを豫より傳聞たるをあるに泰勝が陳せる所と柚内與記右衛門が後度の招を甲乙應合しつるをもて儀の如くに計ひまき。この義を亮查あれかし。と故實を引る。當坐の陳謝に小六ハなほも膝を進めて御誼餘義なきとながら。然る由緒あるものならば初よりして縛捕の沙汰に御斟酌もあるべきに既に禁獄せられて後に古昔の由緒を云云と思召出されしハ憚りながら前後不都合。愚意に得かたきをあれども。晩生他郷の孤客にして貴きを犯し是非を論して。又申すべきよしもなし。いまだ信せられずして諫るときハ諷ると思ハれ志向じからで。交るときハ悠々たる行路の心なきとを得ず。恚れば且泰勝の罪過ハ左まれ右もあれ。他が祖の忠義に願て恩免の議を加はられさば。信夫が親守延の忠義を思召れずや。傳聞ふき守延ハ忠臣にして文武に長たり。國司のハん改名ハ京都將軍義滿公の諱の一字を授られ。その議及び給ひぬる。當日稻城守延ハ只管にその非を陳て面を犯して諫申せし。答により放たれたれども。他郷に去らず。二君ま仕へす。猶當國の逸民。よなりて非命に身故りしを。思ひ復させ給ひぬ。いよ。妻子の不幸也。且其女兒ハ二親に孝行の聞あり。守延の忠信夫の孝ハ後々までの美談ならんを憐み給ふとなく。何をもて民の父母とせん。願ふハ稻城の後

を立てその忠を賞せられ信夫が孝を門閭に表して善を勧め給ひなば慈さきして悪徒の走り
 亂臣賊子怖るべし古の有道者の人に贈るに言をもてす晩生弱冠鄙陋なる身の分限を見か
 へらで博士態つゝ備らん事とし越に求るにあら老惶うも先づ世に同朝歴仕の舊縁われバ
 人のいひざる所を擧て忠告せまく欲するの罪いと多し最多かり不敬を免ひ給ひぬかしど
 肝胆を吐く明辨理論に英虞將曹この它の近習も醉るが如く醒るが如く且感し且危ぶみて背
 り汗を流しけりそが中に滿泰主の心竊も怒るといへども素より長者の事なれば氣色にも顯
 りさずつらくと所果ていひるゝ趣亦是理あり信夫が孝のまだ聞ねども然るものならば賞
 とべし但守延を忠臣といひるゝとのみ信かたし南朝北朝いとめでたくかんと直らせ給ひに
 ければ足利氏を今さらに忌嫌ふべきよしもなし義滿惡意の旨を表して諱の一字を授られし
 是常家の面目なるも守延獨これを否して衆議に合ねば罪を得たりと論を以て小六の聞あへ
 ず否惡意の御説と異也鹿苑院殿滿當將軍持も信穿く表裏多かりそを誓約に背くことなくこ
 の次の御位に小倉宮の即られ給ひば君が御改名もその甲斐あらん足利氏倚約も背きて宮と
 退ぞけ奉つらばその折國司も必怒りて那宮のれん爲に壘を深くし壘を高くし甲兵三萬足利

氏を戦ひ給ふともあるべしその折おん名の滿の字を何處にか措給ひん返さんとすとも得べ
 からずそが儘名告るも快からず後悔其首に立よしなく世の胡慮になり給ひん歟是も亦知
 るべからず守延この義を思ふをもて面を犯して諫めけんその忠その義知るべきのみ最も惶
 さをながらひかし後醍醐天皇の新田楠よの軍功の大く劣りし高氏主に御諱の一字と賜り高
 の字を尊に更て尊氏に成されしに那人はやく叛きまつりて終に南朝に臣たらせこの折にし
 も名の尊の字を取復し給ふと力及ばせ給ひねば後々までの復失策いと朽をしきとなるを國
 司も心すき給ひて前車後轍相續て仄覆の悔警かたかり恚ても悟り給ひせやといひれて滿
 泰忙然と初て醉の醒るが如く羞たる貌を更めて高かな才子の妙論人の視聽を驚して後學に
 なるも多かり那稻城守延の後を立るの力かたくもあらねど男兒なきを争何れせん和殿今より
 藏瀆と幫助て長く留り給ひば俸祿の請も依るべし然るとき我媒始して信夫を和殿に妻せ
 ん則是守延の忠を賞する興なればと生論じて含笑れたる老婆親切貌あるを小六の得堪せ
 脆然としてその何事を宣ふやらん信夫の晩生が妹也寔に妹母の子也といふどもいかにして
 娶るべき御懇切の有がたさまで慙愧く候へども父母の遺體を禽獸と比することを得ざる也願

ふに國司の晩生が稻城母子を憐て那泰勝を憎みまを信夫に情ある故ならんと思ひ給ふに
 あらんずらん千尋の海を測るとも人の心の量るべからどかへすも物体なしその義の御
 免を被るべし且晩生の執袴の爲に籠中の鳥となるを願はずおは國內を武者修行してよく
 筋骨を鍛んと欲する外の候に老前に預り奉りたる木夾を返進すべく辭別の思ひも久しくな
 りぬ快身の暇を給へるべしと強而く推辭て懷より那木夾を取うつ、恭しく扇に載て近習に
 遞與さんとしてけるを國司の急に推禁めてそり且その備措れよかし當地に在留願しからず
 の今さらに力及ばず然バ我足利家へ和殿の事を聞へわけて舊族の獨子なれば我弟に等しき
 もの也武者修行の與廻國すなれば傳馬旅亭に障りなく下知せられんとを請ん因てその木夾
 のなほも和殿の懷にして異日の證據にせられよかし兼ふ南北兩朝御台體ませし折鹿苑院の
 沙汰として北畠の名家也何まれ彼まれ願れよ三ヶ條の許すべしと町寧にいのれしかば第一
 の小倉宮をこの次の御位に即奉らるべき事第二の當家子々孫々伊勢の國司たらん事とバか
 りにして第三ヶ條所望をいまだ報ざりき恚れば今番和殿のうへを承引れんと疑ひなしこの
 舊縁と忠告の實義に答る寸志なれば必ず推辭給てと懇切に説示して又路費の資にとて金一

百兩二包を目録に添て牽れにければ小六の推辭とを得ず歡びを演別を告て又將曹に引れつ
 退去んとしたりしに亦別席にて嬰應ありけり登時小六の將曹に就て所望の一義ありそ
 の何事をいふやらん又この次の巻首に解分るを聴ねかし

開卷奇驚俠客傳第二集卷之四終

開卷奇驚俠客傳第二集卷之五

第十九回

鴻便に託て義兒書信と齋と
 豺狼を避て母女海船に附く

再説達小六の満泰卿に見參し果て又別席にて嬰應の折英慶將曹にうち對ひて某させる功
 もなきに二百金を賜ると罪得がましき事あれども懇命推辭よ由なくて受奉り候ひしに又願
 しき一條のこれある故に候ひき那木造泰勝の既に追放せられしかども信夫が與に親の仇
 あり男魂なきにあらねば若復讐を願ん歟去る志願あるならば某も亦義も仗て俱に冤家此往
 方を索て助大刀せずあるべからず恚れば道金半を分ちて稻城母女に賜ねかし他等ハ女流

の事なれば大望その義及及せとも這恩祿に預らば則是守延が舊忠越に罕しからで君恩枯骨に洎べる也他們いよく復讐を想起とあらば免許の状を賜りてんこの某が願也この義を稟給ひぬかしと恃めば將曹異議もなく耳を傾けうち听てその義こゝろ得候ひぬなれどもけふの穽果たり明刺必聞えあげて回答を通達致すべし先盃をとり抗給へといふ小六の其意に任して歡びを懐席に着て又管待を受ける程は明星二部以下の甲乙小六が義勇を慕ふもの將曹と共に盃を薦め節を添て興を催ともなきにあらねど多く那引板屋方と泰勝が親なりける木造親政一憚りて這頭へ立も入ざりければ小六のはやくその機を猜して屢辭ひて醉を盡さず稍盃椀を收さして旅館に退らんとしつる折又將曹にうち對ひて某今の當所に要ありし翌に那五柳ある稻城許赴きて那里に四五日逗留をべし先に憑みまゐらせたる願事のおん回答に那里へ仰下さるべし自由の至りに候へども和殿を勞し奉らんこの義をこゝろ得給ひてよといふに將曹應をしつゝ内支關まで送り出て亦復一個の走卒を謀て旅舎へ遣しける愆而小六の黄昏時候に例の旅廬にかへり來つ走卒を勞ひて門より返して只ひとり進入らんとせし程に裡面より出て迎るものあり是則別人からせ楫取庶吉なりければ小六の相つ、訝

りて庶吉和郎の何の程も來つゝ留守して在りけるぞや稻城の母女に恙もなきやと問へば庶吉は侯老樹の刀目の病着の既に瘡り給ひに信夫どのも恙のあらねど道里と東國と三柱の釜々母子の事をのみ問もしつゝいひも出て涙の袖の朽るまで濡りかちなる宿あれば慰難て困じたり去程に刀目も妙もおん身のかへり來給ふをけふか翌歎と等給へども久しう音耗聞へねば小可も亦胸安からせ安否を諮ねまうさんとて未牌の時候に道里に來つ折から節に招れて見參の爲出ましたれば暮せの還らせ給ひと幹僕隸のいひしかどいかでおん目に掛らんと思ひよければその人を退かし立代りてかへらせ給ふを等たりきといふに小六の領きてその幸ひのと也かし我の明朝辭し去て稻城の宿所へゆかまく欲す然ると料らせ和郎が來て伴に立なへ極てよしなれども今宵かへらせぬ又那母女が等不樂て胸苦しくこそありつらめといへば庶吉頭を掉て否五柳を出る折久しう身邊侍らねば主の御用も多からん然る今宵の那里に明して翌こそ還りまぬらめとよく期を推して候へば等不樂らるゝとにあらすといふに小六の微笑てそいよく心つきたりきまだ夕飯をたべずやと問ふ間に幹奴の夕饌を餽り來よけるを小六のたうべも庶吉に譲りて飽まで喰しけり愆而又その次の日に早飯も果し

比英虞將曹より消息してけふ五柳へ赴き給ひ、伴當をまゐらんとて、馬をも牽し候はん。時刻
 を知らせたまへとありしを。小六は一切これを推辞して嚮に稻城許遣したる。小厮のかりよく來よ
 ければ東西持すべき伴當あり況二里に足らざる路次也。騎馬の義も辞し奉る。なほこのうへ
 のれん管待にのきのふ憑みまうせし一義を聞へわけ給るべしと回翰を寫め使を返しつ。然而
 幹奴に別と告て家具も夜物も有つる儘に逃興して馳て庶吉を俱して千竿の多氣城をたち出
 て又糸に糾る五柳村へ赴きけり去程に稻城の宿より信天のさら也。老樹さへ。小六が來ぬるを
 等不樂てきのふ庶吉を遣せしに他をらいただかへり來ざればいかに〜と思ふ程。この日
 小六の庶吉を將てやうやくよ來にければ老樹信夫の共侶に遠しく出迎へて上座に推薦め
 寒暖を演恙あさを祝したる看茶の管待初も倍て尊敬大かたあらざりける。そが中に信夫のみ
 叱ひ涙禁難て母の後方に待りたり。登時先老樹がいふやう先にの最も憑しく慰め給ひしかん
 詞の毫ばかりも差いせ給ひで信夫を救取り給ひぬ。その折の趣の庶吉をのゝ語にてはやく
 聞知り侍りにき。須彌做す御恩の高かるを伊勢の濱秋節短ある詞に陳も聲しかたかり。そも義
 の與と思食けん掛向の最も畏き信夫が與にの三世の御主君脇屋少將義隆様の公達にて御座

せしを知らねばこそあれいぬる日の無禮を允し給へかしと陪話るを小六の聞わへず盛衰時
 あり昔のむかし今の今なる我うへを明々地に稱らるゝの恥かゝやかしきとあがら。信夫が發
 母でをいそれば忌に及ばで庶吉が云云とはや告たるならん。只是信夫の義兄ぞと思ひれなば
 相應しからぬ忘れても今いへれしよしを必な外に漏し給ひそ我乃者多氣の旅館に抑留せら
 れて在りける程は稻城主を射て害したる袖内與記右衛門の首を刎られ犯人木造泰勝と敵助
 等の追放されたり。讞斷律の旨に稱はず甘心しかたき沙汰なれどもこの是素より故ある事に
 て泰勝の姉引板屋とやらん並にその父親政の權勢も憚りけん有司の毎外合して稟掠し情
 由さへあるを國司も亦得意にて衆議に憑られしを争何んせん。その事果てやうやくに昨日對
 面せられし折。我件の非を論じもしつ。稻城主の忠節ありしを論じて後を立給へと請薦め稟せ
 しかども國司の半醒半醉にて締就るべくもあらざりきと報て信夫にうち對ひてや。信夫恙
 もなきや先に三十蚊の別荘にて儕の厄を極ひし折名告るに便り宜しからねば故意素生を告
 ざりき。儕の實の両親の忠誠並に世よあき人となりにしとの大かたのはや庶吉が報たりけん
 相別れしより天の一方年來胸に忘れへせねと面を照ても名告るの迭に知る由無迄に絶て久

しき再會の本意を遂ぬる歡びの我のみならず亡親の魂魄今も亡びずいさぞな嬉しく思われん
 といひつゝ除に懷ゆる疊紙を打開きて拿出と戒名を扇の上にならち乗せてこれも歡き倍を
 種ながら又慰るよしもあらん二親達の戒名を涙を禁めて拜せやといひれて信夫の堪かねし
 一聲高くよと泣く袖の驟雨小休なくふる里の事親のうへ聞けば思へば端なき浮世と知
 れど今さらよ覺て悔しき夢の跡に殘るゝ法の名にのぞあふぎを奪つ戴さつ伏しつ拜めば
 はらゝどかゝる涙に看もわかで勝を斷孝女の哀み堪々し愛心の猿も起騒ぐ悲泣よひ
 としく愀然たる老樹庶吉左右より語言齊一慰れば信夫のやうやく志を焚しつ頭を擡げて
 れん論しの趣のよく辨へて侍るかし東なりける亡親の事をのみ最惜みてうち歎く歎と思へ
 れけんそれ將哀しからぬにあらねど我身の過世悲けれや親を四柱もちながら幼稚さ比よ
 り養れたる爹々公を失ひ侍りぬる折も折とて舊里の便り聞て又實の二親ながらふとの
 絶も果よし本意なきの孰を孰とわけかたき養育の恩生産の恩稟たるのみに反すべきとも克
 んぬ女子の甲斐なき身にしゝと悲しみのやる方もなくうち泣きし心を猜し給へかしと
 いひつゝ貌を改めて小六にむかひ顔をつきて絶て久しき見參り幼稚き折を思ひ出れば夢の

ごとくま侍れども然ばとて亦忘れぬ其眞實の親の相計て外視を潜ぶ與にのみ妹と喚れ奉り
 たるその秘事も親の名も此里ある養父養母にすら今までいひで過せし生さぬ中とて初よ
 り隔たるに侍らざかしおもひ淺くて悪人に扱されし身の往方頼む甲斐なき實の親に生
 別れつゝ足曳の山さへ海さへ幾百里遠離りていあふよしのなからんものを慙に名告るゝ
 要なき事にして親の耻也幼君のたんと與にも惡かりてんと思しよしのあれば也恚思ひつゝ年
 を歴て思ひかけあや我が厄難を救せ給ひし大恩人の素生を問へば實の親の守も傳き奉りた
 る注君にをいしよさんと歡しきに就て又哀しさも倍す世の轉變最々しき御旅宿の情由
 さへ听け幸なしと歎きし此身の數ならせ痛ましき事限りもなきを智勇兼備の徳長給ひし重
 々の御庇によりて親類もなき母さへ子さへ力つきぬる一期の幸ひ舊里の事詳に聞へて親の
 忌日を知るとも有繋み殫せぬ主従の三世の御縁にはべらまじ寔に不思議の御再會有がたき
 まで忝き御思ふことと徐やかに陳る言葉の露よりも脆き涙を找みける思ひのあかじ操做と
 老樹も鼻をうちかみて嚮けの言のいと多くてまだ歡びを哀しも盡さど多氣の旅館に留られ
 て御座せし初より御心屬て庶吉殿を遣はされたりければ幫助を得たるのみならず君の來路

信夫が親の忠信節義の粹の趣又藤澤ある野上の大人の儻稀なる陰徳義俠又庶吉との、養々
 の事養實俱よ忠義の頗未見聞しよしを記憶よく日毎に告られたりければ信夫のさら也奴家
 まで歡びもしつ泣もして艱苦を慰め侍りたり就て贈り賜りたる圓金十枚のそが儘よ所要な
 ければ使ひもせせ荷且ならぬ御恩なるよ推辞まつるの惶れれども限り知られぬれん旅宿よ
 の盤費こそ肝要ならぬ願ふの返しまつらまじ此義を許し給ひねといひつゝもはや立まぐせ
 しと小六の禁めて頭をうち掉りその亦要なき辞讓なり我做せ所の信夫が與にこの年來養育
 の恩に答る母御へ寸志事原を推すとき主従なれども養父母の思ひをなせし英直母屋の忠
 誠苦節に報んと思欲して做せし事なるに盤費の多少を論せんや然るにきのふ國司より金二
 包を贈られたり恚れば盤費に匿しからせ其頭の事への掛念せで信夫も俱に听ねかし昨日國
 司に見參し果て又別席にて饗應の折我又英虞將曹をもて稟入れたる二ヶ條ありその一條の
 件の金を分ちて稻城母女のものへ恩祿にせられん事又一條の烈女信夫が親の冤家と撃まく
 願ひ免許の狀を賜るべき事この義を稟試たる回答のいまだ聞ぬれども復讐の一條の必免
 許ある可ぞをを知つゝも誦稟せしん泰勝の罪を寛して追放せられし國司の非法をいと朽を

しく思へバ也縱免許の狀を得ずとも他郷に在て撃捕らバ國司も禁めかたかるべし遮莫信夫
 の女流の事也親の警々撃まとも孝義の道に虧るにわらず俺遊歴の次をもて那泰勝の在所を
 索ねて偵よかはりて撃果さんこの義を我に任するが則母御へ孝行ならん然るを感ふてとづ
 からはからず父に孝義を盡さんとて老たる母御に仕へずの孝義兩ながら面餅となりて命も
 俱に有ちがたき後悔其里に立べからず甚麼我意に従ふやと問ふに老樹のよるこびて信夫が
 答を等たでいふやう恚る折にの男子でも世も提れたるものあらずの好了箇のなからんに淡
 き母也女兒也生賢なるこゝろもて御教諭に侍り侍らんや信夫お承を稟さずやといひれて
 信夫の沈吟じたる頭を擡げ嗟嘆して目今母の稟せしごとく大及抜く術も知らぬ身の心か
 りの憚くとも及ぶぬ事をいかんせん御庇によりて親の仇を撃も捕らるゝことあらば平二
 が耕し耘る瓜を源太が坐して啖ふといひけん鄙語に似たる果報に侍り左に就ても甲斐あ
 きもの女子にこそといひつゝなみだをおし拭へば小六の然ありと領きてしかばまた商
 議あり信夫の母御もさゝたまへきのふ國司より贈られたる金をわかつてまねらせなば餓喝
 を免かるべけれども那泰勝よの親あり姉ありともは國司に重信せられて黨を植君を感し權

威内外に充滿たれば。必おん身母女を惜みて。睡眠の思ひをなさん。然るときは。最危かるべし。今
 愚意をもて。計らんよ。速に常听を去て。他郷へ避るに優ると。さし。深傳へも聞れけん。我義父野
 上。史著演大人の海内獨歩の豪侠にて。義の與に財を惜まらず。善も與して。愛を分ち。惡を拉ぎて
 禍を辭せず。我身九才なりし時より。妹母と俱に。那大人の養ひを受たるに。いまださせる報とせ
 せ。只我父の警敵。藤白隼人の義父にも。讐也。その擧果して。禍を禳ん。與入水を示して。世さへ親
 さへ欺らて。本意を遂つ。庶吉を俱して。京師に旅宿の比世の風聲を。搜聞し。義父の上よ。恙
 もあらず。只那藤白安同の主従不覺の咎あり。年來私慾の賊罪すら。那折露顯に及びしかば。遂に
 所領を沒官せられて。妻子並に。從類を追放されし。穢愆々と正可にいふもの多かりき。恠れば。今
 の後安かり。苟且ながら。一暮稔親に物を思せたる。よなほ信をせせむ。わらば。實に不孝の人とい
 へん。こも胸苦しき事あれば。いかで。悄悄地に。庶吉と。藤澤へ遣して。親の心を慰さめ。や。と乃
 の者思ひ。決めたり。刀自も。信夫も。庶吉と。共侶に。那地に到りて。野上の庇に。寓るならば。千萬人の
 幫助に。倍て。久後までも。安かるべし。庶吉も。膝と進めて。よく。听果て。こゝろ得よ。和郎が。那地に赴
 き。か。野上の宿所。留りて。信夫俱に。大人夫婦。奴婢。助等に。仕るが。是則忠也。孝也。そを。什麼ぞと

推ても。見よ。和郎が。實父。目四郎の。大人に。恩義を。稟たるもの也。又。信夫が。實の。親。英直翁の。その。死
 後に。孤忠。苦節を。大人よ。知られて。白紙の。空翰。計りし。如く。我身と。俱に。儕の。實母。母屋の。刀自さへ
 年許多。養れたる。恩を。復さば。是實の。親の。與よして。我身に。代る。忠也。孝也。我。做し。足らざる。孝と。義
 を。庶吉。信夫。力と。戮して。代りて。野上。親子に。盡さば。老樹の。刀自も。所を得て。今の。憂苦を。忘さるゝ
 日。あらん。是。良全の。計策。那里に。優たる。去向。なし。そと。云云と。意と。陳て。辭る。い。我知る。所に。あ
 らず。はや。く。心を。丹田に。落着て。後悔する。信夫の。母御も。否。よ。い。わらじ。俱に。尋思を。し。給ひぬ。と。尋
 さ。示す。遠謀。智略。誰か。感服。せざる。べき。听果て。吻と。息と。る。まで。返す。詞も。なき。もの。から。別を
 惜。庶吉の。頭を。掻き。つ。膝を。擦りて。最も。惶き。御教訓。鈍き。耳にも。よく。聞えて。推。辭奉る。べう。の。候。い
 ね。ど。便り。なき。身を。俱せられて。姑且。吉野。に。在りし。比。既。必。死の。病厄を。救。せ。給ひし。高。恩。あり。苟
 且。さら。ぬ。三世の。宿因。驥尾に。附く。蠅の。千里の外に。ゆく。までも。仕へ。まつりて。報。く。い。め。と思。ひ。し
 もの。を。今。さら。に。おん。別れ。こそ。本意。あら。ね。な。ほ。せん。術の。候。い。せ。や。と。口。説。けば。信夫も。涙を。拭。ひ
 て。稟。き。も。无。禮。な。ると。あ。が。ら。兄。を。し。稱。へ。まつり。ぬ。昔を。思。へば。亡。父母に。相。見。る。心。地。せ。ら。れ。た
 る。其。歡。び。の。幾。日。も。あ。ら。で。又。ね。ん。別。れ。よ。な。り。ぬ。べ。き。身。往。方。こそ。果。敢。け。れ。い。か。に。せ。ま。し。と。密。音

に歎きの杜の偽りのあき言の葉や世の春ながら秋より悲しき物思ひ露けき袖を又濡す胸の
 濕露の雨障り露間へ絶てなかりけり小六の恚る光景を左見右見つゝ嗟嘆して信夫の餘波を
 惜むとも庶吉までが女々しげに益なき諄言傍痛かり縦何時まで我後に跟て旅宿をしたりと
 も甚ばかりの事あらんや快藤澤に趣きて大人に仕へて奴婢助の陪堂にもならば文學武藝を
 習ふよすがもあるべきにこそを思ぬ歎愚魯也身に一藝を備へてこそ主の興にもあるよしあら
 め別を惜むが忠歎義歎信夫も這義を思ひぬかし簡の親の冤家の事我撃捕んと思へども尙貌
 姑望より東に在らば我那山と踰かたかり山より東餘倉頭を那泰勝が徘徊做さば野上の大人
 に恚々と告げて信夫の助大刀を做その庶吉和郎が役その折武藝に疎からば何をもてよく仇
 を撃つべき恚れば久しく我大人に従ふときその身に利あり然でも否歎と理を推て奨され
 てぞ稍曉得る庶吉信夫の共侶に貌と改め頼をつきて寔に懲りいひぬれん旨に従ひまつりて
 藤澤へこそ赴くべけれ宜く計せ給ひねど願へば小六も歎びてその一段の了簡也去向の陸歎
 水行にせん歎いまだ思決めねども野上の大人にまゐらする書翰の多氣に在りし日既に寫め
 措たる也汝達那地に到りなば信夫の母御と歌店に遣りて庶吉ひとり我消息を懐にして藤澤



義使母子が初方
 母由まよと忠義を海を

坂手島 伊勢の地名 産物の 糸和 藻あり 長く 糾りて 緒の 味 虎佳

ある野上の宿所に赴きて、悄悄に大人に對面を請ふて書狀をまぬらせよ。さらば刀自をも信夫をも必召取り給へ。なん然而大人の汝達が素生をなほも問給へ。信夫の養父守延主の忠義の趣その身の頼未庶吉の亦養父の殉死及實の親目四郎の義死の趣恁々と潜やかに報稟しね。その餘の事の書中に在り。但我事を問れ。汝達決して告べから。尙問給へ。見聞し隨に報稟すともけしうのあらねど。大かたの間れぬらん。俱にこの義をこゝる得よ。なほ首途の日を卜さばその折に又説示さん。刀自の特更東西拿集めて逆旋の準備をし給へかし。と言正首ある前路の指南にひとしく勇む庶吉。信夫老樹も俱に承歡びて商議やう。屋く果にけり。這閑談に日景の關けて未牌の時候になりしか。老樹信夫の小六主僕に夕饌を薦ん。とて辭して。庖漏に赴け。庶吉も亦手傳ふて炊きに暇生柴を折焼き。烟も咽びて。是さへ涙の種獨活も壘に立たる。女兒と母が譽を囀む。逆手島に袖の酢掛たる和海藻折布に小皿二三枚湯漬なぐらの蔬菜物。卒とて早の管待に時分よければ歡びを陳る小六の箸とり。抗て腹に實の登る去。秋の茄子。艱鹵を使ふまで給侍し果て又庶吉に差る飯の高装の親椀子。弁強上手阿漕の浦と思へ。ともふたみに受て幾番敷たう。果たる庶吉の甘布を手自ら擡たげてすばやく。庖やへ退かける。恁る折

ら外面よ若黨奴隸三四名従へ來ぬる。一個の武士あり。稻城の門に立在て物言さんと呼門とる。聲に老樹の立出て相れ。聊面善れる如し。何里よりぞと諮るに。件の武士の微笑て。老樹の刀自うち絶候。英虞將曹で候ぞやと名告るに。老樹の心つきて。現英虞主にをいしけり。程遠らぬ里に在りながら。守延が退隱より。十稔あまりと歴よければ。鉦や相遣れ侍りたり。誘這方へ。と先に立て。客房へ案内を。賓主の席迭の辞讓寒暖を陳恙なきを祝し。なせし程に。庶吉が遠しく涙もて薦る茶禮も果て。却將曹がいひけるやう。稻城主の勤仕の折。某同僚なりければ。交も疎疎からざりし。不慮の事にて。退隱の後。迭に憚り。あり人の批評も。影護さに。胡越のごとく候ひき。いぬる日。の息女の事にて。刀自のこづから。問注所へ。まわり給ひし折。からも。その職役に。あらざれ。バ對面も得せ。でけふに。及べり。主の遠行。息女の窮厄。心苦しき事のみ。ありしに。測らすも。好幫助を得られて。愁訴の筋も空しから。老事。團圓に。理りし。蔭ながら。歡び思ふ。不幸の中の幸なり。けり。最も愛たく候。といふに。老樹の涙。叱て。應するのみ。いふべき事も。岳間。隠れの。清水。水胸に。堰る。心地やしけん。惘然として。姑且の頭を擡げ。得ざりしを。將曹然こそ。意中。猜して。連りに。蟹目。走らざる。扇を疊み。傍に。措きて。喃刀自。那達生。の。這許に。こそ。在す。らめ。將曹が。訪來に。けり。と

このよし傳へ給へかしといふに老樹の頭を擡げて宣ふごとく那人の嚮に御館を退來て今々は奥に在す也然りとて躰て身を起しつゝ辭して奥へぞ罷りける權且して達小六の袴を着て出て來つ將曹にうち對ひて迭の口誼言訖れば將曹やを膝を進めて嚮に憑れ奉りたる那二條の御所望を寡君に披露仕りてその旨を伺ひしに寡君則宣ふやう達生に贈りし金子を分ちて稻城守延の妻子に取せかたかりその達生のこゝろもて左も右もせらるべし俺が指揮せんことにはあらざり又信夫に復讐の願ひの事那泰勝へ罪定りて既に追放したるものと又信夫に復讐の免許の狀を遣はずとさし法律立す道理は違へり尙他郷にて撃捕らば俺が知るところにあらざる也よりて老樹信夫們の冤家の往方を索ねん興ふ當國を立去ましく思ひ勿論他們が隨意なるべし尙亦泰勝が立還りて我封疆に潜在らば再犯の罪許すべからず擽捕せて首を刎ん這旨をもて達生へ答ふべしと仰られたり御所望不如意是非に及ばずこの義と心得給へかしと報るを小六のうち所て御誑の趣承りぬいと憚あるとながら法律其度に錯れぬ復讐の議も起るべからず然る復讐の狀を得ずとも那泰勝の信夫が與に親の冤家に相違もなし撃とわらば天運に儘するよこそいひめ所望も稱せしへ使札なりとも辨す

べきにみづから來訪せられしにて疏畧をかかし御深志見れ感謝に勝せ候といふに將曹嗟嘆して寔に不思議の良縁にて拜辭數度に及びしかば實に莫逆の思ひありなほも當所に逗留あらば折々に訪まつりて教を受んと思ひしに某今番鎌倉へ年始の使を命せられて首途もはや近きあり異日の再會料りかたかる殘念この義に候といふを小六の訝りてそいいと遅ら年首の嘉義也故ある事に候歟と問へば將曹頭を掉りて否故あるに候ぬども鎌倉殿へまゐらせらるゝ使の年に一度にて例水行を便宜とせ正月二月の海上の風波穩あらされば三月に到りて這義あり今茲に其使命を受けて後日首途致と也といふに小六の沈吟してその幸ひなる事にこそ候へ知らるゝ如く稻城母女の當所にて親族の後見をすべきものあり因て東國の所親許遣さんと思ひつゝ商議既に整ふものから伴に立するものとして尙少年なり庶吉のみ百里に及ぶ長旅なれば心もとなさ限りもあらざいかよせましと思ひ難たる折から憚る便宜あり尙附船を允されなば寔に附驥の大幸也この義を許容あるべきやと問へば將曹も雲時頭を傾けてその易さとながら我私の旅ならぬ使命の船なるをもて上裁を経るにあらざれば承引かたきとなれども畢竟貴所の御所望也這意を以聞ぬあげなば必障りなかるべし某こゝろ得候

ひぬ行装を急せ給へ首途の後日に志摩の鳥羽より乗船す那里來會致さるべしといふよ小六の歡びてその慚愧きを也かし然らば老樹信夫にも告知して歡ばせんその義を仰聞られよと應て聽て庶吉を喚近着て恁々と詞せの敷附れば庶吉のこゝろ得果て走りて奥へ退りけり去程に老樹信夫の俱に衣服を更めて出て客房に來にければ庶吉も亦後に跟てそが席末に侍りけり登時小六の老樹們に那附船の幸あるよしを簡様々々と説示せば老樹信夫の異議もなく母女ひとしく將曹にその喜びを陳るよぞ將曹連りに領きて那船中の男子のこゝにて詞敵になるものなければさぞ徒然にあらんすらん遮莫風だに悪からねば幾日もあらで東にいたらん翌只一日の暇になりぬ猛可の起行所為多かりんは又鳥羽にて面談せん快々準備をし給へと最正首に慰めて告別しつ身を起せば小六も俱に喜びを陳て齋一目送りたる折から五柳の村長の嚮ふ小六が稻城許來にけるよしを聞知りて安否を問つゝ來よければ老樹の聽て喚入れて小六と俱に對面す登時老樹の村長に猛可又東國へ移徒の緯の趣を告知して些の田園と家宅さへ翌一十日は沽まく欲むこの義を計せ給はんやと恃むを村長うち听てそのいと火速の事那りき田地の素より古券あり家宅も買んといふものなくの野生且引受て金子を

調進致すべしけふの退りて那地へ商量もしつよく考て翌の朝開よ又來てん等せ給へと親切に慰めて出てゆきにけり這夜の小六が來路をなほ詳に聞んとて老樹信夫の茶をも烹つ菓子薦めて管待たる團坐に漏ぬ庶吉さへに耳新なる心地して更闌たるを知ざりけり却説その詰旦村長はやく來て老樹小六に面談の趣をうち聞けば稻城の田園家宅と共に八十五金に買拿へしなは價よく售んとならば外へ商量し給へといふに老樹の應難雲時小六と商量しつゝ竟にその意に儘せしかば村長の寫來ぬる券書二通を懐より取出し打ひらきて老樹に見せ又小六に見せて則小六を保人よて花押を請て券書を収め金を遞與しつ首途を祝して宿所へ還りけり去程に老樹信夫の守延の後世の事を香華院へ憑んとて亦復小六に商量しつゝその相計にうち任し庶吉に留守を委ねて老樹信夫の小六と俱に稻城氏の香華院なる實證寺へ赴きて住持の和尙は對面を請ふて東國へ移徒のよしと陳別を告て且守延の墓碑料として金十兩又稻城氏代々の祠堂料に金二十兩共三十金を參らせければ住持の驚き慰め難て茶果しをとりめて管待さる當下小六の住持にむかひて某の東國より初て來ぬる信夫が兄也他等を鳥羽まで送果て再當寺へ參詣しつべし石工をいそがしてその折までも件の墓碑を建させ

小六が半隻履
ともて不死
示せし
の葱嶺
の故事
に憑れ
る也便
是前集
に著演
が小六

給へ。と期を推せば住持の異議なくうち懸頭てその義こゝろ得いひぬ。祠堂金の寺記に載て墓
にの忌日に香華を手向永代記祿の旨を傳へて廻向に開斷あるとなからんこの義もこゝろ安
かるべしと答て懸て納所の僧に手實を寫せて遡與されたり。這緯果て老樹信夫の。小六と俱に
守延の墳墓へ詣けり。僧殯のみなれば葦草を挿水を沃ぐ。小六も俱に合掌のこゝろの中。線
返す。年來信夫を養育の歡びを告奇遇を稱へて彌陀佛々々々と念をれ。老樹信夫のいどいな
ほけふを限りの墓程遠からず建られん墓表だも見るとのならせなり。ゆく身の往方別をし
かの妻よ子よ夢野の秋にあらねども思ひ絶ねば見もわかぬ芽出楓の紅涙花をき里に音とぞ
泣く哀慟限あかりしを。小六の諫め奨して俱して宿所へ還りけり。是よりして起行の準備も暇
なき折から近隣の壯客老樹が遠族或は守延が弟子の親たるものとさへ件のよしを傳聞別を惜
みて各々來つゝ共侶に幫助て行荷を造り果て翌の啓行を送らんとてうち連立。還りゆく混
雜いふべうもあらざりけり。日暮果てやうやくに其頭の事も驚ひければ。小六の門戸を鎖さし
て老樹信夫庶吉們を燈下よ招き聚合て國司より贈られたる二百金を遺なく出して。とゞめ
そなはち一百五十金を三に分ちて件の三名へ一個々々に遞與して。いふやうこの餞別に各

の半隻
履を葬
りたる
と照應
掲焉
達広脱
屨の頓
末の詳
かに傳
燈録に
見わた
り

々へ寸志也。裏肚を三齋製りてよく懐に収め給へ。然而藤澤に赴きて我大人許落着なむ。その金
はそが儘に皆大人にまゐらせて衣食の費も充ると住とそ大人の素より義の典に財を惜み給
へねども。然ばとて初より大人の厄會たらんと各々本意ならざるべし。縦野上に障りありて同
居の願ひ遂かたたくとも其金有は時宜は儘して進退を定め易かり是。併。國司の恩祿各々の
身に及ぶもの也。等閑な思ひ給ひそ。國司のその性君子の風あり惜むべし。思慮淺ければ。感ひ
易くて是非に暗かり我復讐の一條を信夫に代りて乞稟せし。那泰勝を當國に隠し措せじと
思ひしゆゑのみ。又那英虞將曹も才子にのあられされども。こゝろさま老實にて。當今浮薄の武士
に似ず。こゝをもておん身母女の附船を憑みし也。なれども。那船中の総て敵地と思做して。晝夜
由斷すべからず。但那船中のみにもあられ。昨もけふも。這里も。那里も。木造が興。と狗とありて。這
方の動靜を覗ふもの。あらん鳥羽の港口に至りても。各々詞寡にして。要なきをいふべから
ず。勿論別離の情に逼りて。うち泣て笑れ給ふな。この義の刀自と信夫が與に。そのこゝろ得を示
そもの也。庶吉も。恁こゝろ得よと諭して。又懷より書翰一封と拿出して。庶吉のふ示せし
ごとく。這一通の野上の大人へ。情々地にまゐらとゞめ。その金と一所せせ。で衣の襟

に縫収めてもてゆくを妙とせし俺手迹の犬人のよく認りてをいそげれども尙相添るも
 のこそあれ我行裏をもて来よと云付つ取寄せて手親びらきてそが内より半雙ある庭草履を
 遠敷取出して件の書翰共侶に庶吉に渡與して云やう其草履の去歲の四月我狂窓のおもゝち
 して入水を相摸河に示せし折穿て出たる庭草履也那折に我その半雙の渡船の内に留めまた
 半雙の後微に収措たるものぞかしそを我大人に見せまぬらせなべ立地疑ひ解けん句論外
 視を憚りて傍に人のなき折に無禮を陪話て見せまぬらせよ道餘の事ハ嚮に示しぬ短夜なれ
 ば再いのぎ通途もよく胸は復して必よ忘るべからず老樹の刀自の村長より受とり給ひし八
 十五金の残りなほ多かり我がまぬらせたる十金と共侶に秘藏して有用の用を辨じ給へ野上
 の宿所に歌り在らば東西の没るとなしといへども信夫が與に然ばかりの貯祿なくあるべ
 からずいまの足利一統の世界やうやく静にて海陸の通行かたくもあらぬぞ然とても海賊の
 患ひなしとすべからば只謹慎を宗として用心に優となし信夫も俱に掛念して身を愛し親を
 慰るを第一の勤にせよ人皆行も住るも前知しか難と多かり我御吉野に旅宿せし比仙嬢の示
 現あり夢よ去向を問まつりしに這神風の伊勢よ赴け世家の國司北島は是南朝の殘燼ながら

憑しきとなしといふとも舊故も遇んと誨給ひし仙言果して驗あり料ぞ女弟に環會にきこれ
 を思へば離合聚散も皆命運の中に在り又時至らば復相見て今の憂苦を共侶に昔がたりに做
 そ日もわらん萬事心を鬼にして不覺をな取給ひそと尋さ示す論辨放論に信夫のさら也庶吉
 も老樹も俱に感涙の找む頭を擡難て推辞ば又や叱られんと思へば返す詞もなく各々金をう
 ち戴きて應ずるのみ左も右もいぬいふに十寸鏡照さぬ方もなき英雄の影を仰ぎてやう
 やくにその歡びを陳にけり

第二十回

姑摩姫夜夜神祇に禱る
 九六媛月下に劍俠を譚す

却説その次の日の暹明に昨宵の村人一名も遣らせ或の馬を牽もあり行轎子さへ昇もて来つ
 老樹信夫を送んとて稻城の門傍に聚合しを老樹のはやく出迎へて勞ひつ推辞ども些も听
 ず動搖めきて特に親しき村人のそが儘坐席に找入りて手にく行荷を擡げ出して件の馬に
 搭ちどす然けれども老樹們の行轎子の要なしとして信夫も俱に辞ひしを大家听せ諸聲にそ
 亦益なき口誼也我村なる毎の仁義五常の片端をも甲乙となく辨知りし這里のなき人さま

の折々説も示し給ひし御庇と思へば恩深かり況や兒子孫等の手習されて眼の見ゆるは只是
 大人の丹誠を盡し給ひし御恩なるに惜しや大人の世を去りてその迹立す妻子達の遠く東の
 所親許移住の首途と送るとして憊ばかりの事せざらんや道里より鳥羽へ路の程二宿にいと
 易かり然ば小荷駝と轎子ハ那港口まで送着てん。その餘ハ二三里許よして其頃で缺と分たん
 と皆商置して來にけれバ誰とて還るものハあしやよ任用して出給へ快出給へと催促と誠多
 かる田舎兒の立去るべうもあらざれば老樹信夫ハ云々と又推辞んハさすがにて且感じ且勞
 ふ小六と俱々住樂し家を村長に遞與しつゝ鳥の茂林をはなる、時候行装して立出れば村人
 ハ等着だ則二挺の行轎子に老樹と信夫をうち乗して迭代よ昇まくと又小荷駝二疋にハ小六
 と庶吉をうち乗して人馬齊一整々と後に跟き先に立て既に足掻を早れば老樹信夫ハ住馴れ
 し里離れゆく憂涙膝に流れて玉走る竹橋に揺るゝ鳥自物音にこそ啼ね春寒さ天も名残の別
 霜思ひ消ぬべき歎してはや西條まで來よければ村人等ハ這處にて齎しゝる割籠をひらき盃
 を勤めなごして辭して家路よ還りけり。そか中に馬を牽き轎子を昇ものと年來特に親しかり
 けり隣人甲乙ハ俱々鳥羽まで送んとて推辭を聞き相俱して其夜ハ玉丸に宿を投め次の日港

口に送着て旅店を俱に投まくす去程に達小六ハ鳥羽の馬頭上の歌店ハ稻城母女を憩しつ庶
 吉をその門に立して英虞が來ぬるを等程に且して英虞將曹ハ伴當約十餘名并に鎌倉管領持
 へ晋物の長袴櫃を夫役に昇し先に立してその身ハ轎子にうち乗つゝ港口の旅館よ來にけれ
 ば小六ハみづからゆき迎へて稻城母女を送り來ぬるよしを報去向を持むに將曹敢異議に及
 ば老樹所望の趣を家老達へ聞へあけて締整ひしハハ附船の義に障りなし出帆ハ順風により
 て翌の旦開にハハめ勿論女儀の事なれば船中一間を藉りて那人々を處らとべし鎌倉までハ
 某が屹と預りひひぬ総御心安かるべしといふに小六ハ喜びて翌の出船を契りつゝ故の歌店
 にかへり來て老樹信夫ハ將曹がいひつるよしを恠々と報て明る天を等にけり豫いハれしよ
 しあれバ老樹信夫ハ今さらハ心細さのやる方なきを俱に然らぬもちして甲夜より枕に
 就たれども夢も結ば老浦風ハ吹驚されて魂を傷しめどいふとなし去程ハ詰旦英虞將曹よ
 り使をもて順風よければ乗船を快出給へといハせにければ小六ハ馳て稻城の母女をいそが
 し立て出んとす登時此里まで送來ぬる五柳人們ハ稻城の擔物を擡げ起し船に運て其頭に立
 て目送りけり小六ハ亦庶吉に鎌倉へ着船のその折ハ箇様々々と辭さ示す言の訖りに行擔物

の牛まれ馬まれ央ふて藤澤へ俱していね思ひ錯へなよくせよと心を属けつ皆共侶に水際に
 立て等程に將曹も出て來つ迭の口誼言訖れば老樹信夫も將曹も歡びを陳去向を咎めて庶吉
 さへに船人に扶けられつゝ乗移る愛苦と重荷の蓬庫留るもの海上の安寧無異を祈るのま
 船なるものゝ再會を契る詞も口隠りて涙の胸に盈湖の順風に真帆を引抗られて見ゆまなり
 ゆく哀別離苦豫期したるとおから堪ぬ歎きの松浦ある鏡の宮の故事も恚やと思ひしら波に
 搖られく安からぬ母も女兒も兩腕頼に當て臥にけるおちじ思ひをいへばに岳越す浪
 に浮宿鳥愛ふの漏ぬ庶吉も慰めかねつ惘然と俱に頭を病しけり老樹信夫庶吉等並に英虞將
 曹の事この下に話説なし却説小六の件の船を目送り果て五柳人等を勞ひつ別を告て某の是
 よりして山田内外のおん宮へ參詣せまく欲する也いぬる日稻城の墓碑の事と那香華院へ詭
 へたがバかへさに亦復立寄て各位にも對面せんといふを大家うち听てしからんに馬まれ
 竹橋まれ又うち乗てゆかせ給へ我等も共侶に太神宮に參るべしこの議又任し給ひぬと薦め
 て果しなかりしを小六のなほも詞を盡して辞みて馬も轡子もやうやくに返し遣し強て案内
 に立んといふ村人二名許を俱して躰て山田へ赴むさけり鳥羽より三里に過ざれば這の日内

宮外宮を拜て朝熊二見の浦までも漏すとなへ巡歴しつゝ又兩宿か三宿にて五柳村にかへり
 來つ徑に寶證寺に赴きて墓碑の事を諮るに石工いまだ功を卒ねば四五日寺に留らる左右す
 る程守延の墓表成就してければ小六の住持に相譚てそと建る日に追薦の法廷を開き經を
 讀して嚮に老樹信夫を送りし五柳の村人を還なく寺へ招き聚合て終日饗應したりけり好事
 訖りて小六の又守延の一周忌三回七回の讀經料まで逆皆寺へ布施して追薦町草なりけるを
 住持のさらなり村人等いよいよますます感佩して得かたき施主とぞ稱へける當下小六の思
 ふやう我去歳の夏西に到りて久しく吉野に在りしかばいまだ五畿内だも視盡さ老伊勢伊賀
 河内和泉攝津紀伊の浦までも原是南朝の御領ありき就中攝河泉に楠氏の舊蹟多かるべ
 し那三州を初として四國鎮西の盡處までも曲なく徧歴すべけれと尋思をしつゝ村人等の留
 るを見もかへら老飄然として只ひとり萬里の逆旅に赴きけり案下某生更説河内州石川郡金
 剛山の麓なる字を八九と喚做たる山里に孝烈無雙の才女ありけりその祖先を原るに故河攝
 泉三州の守贈正三位近衛中將橘朝臣正成郷の爲に曾孫從五位下河内守楠正元の二男左衛
 門尉正の女見にてその名を姑摩姫と稱へらる應永四年の誕生ありけり父正元はその兄正勝



三月六十七



秋烈を感
じて女仙
の庭に
傳ふ

九六

りし

川西六十七

と共侶に千劍破赤坂の要害に籠城して。數年の忠戰父祖に劣らざいぬる建徳元年に正勝正元の父なりける左馬頭正儀の恢復の計畧を屢奏奉し又文弱狐疑の御相雲容これを危て緯成を折から武家より反間の計に陥されて帝を恨み奉り正成正行其身と共に三代相承の忠誠を遂に落花流水に附て北朝に降し折も正勝正元弟兄の俱に大父正の遺訓を守りて敢て親の不義と與せき和田正武と計議を凝して正儀を攻且賊徒と討てなほ南朝へ忠を盡その緯の趣の舊記實録に遺文あり看官承知の事なれば今亦道具よせせ恁而元中九年の秋より南北兩朝御合體の和議ありて使臣往來してけるに楠氏の一族和田正武五位下和泉守去稔元中八年に五十四歳にて身故ければ楠氏の軍威稍衰へ一族從類兇を脱て北將畠山基深は降參し者多かりしかば惜べし千劍破赤坂の城も畠山が與に攻破られ左衛門尉正勝の殘兵十名許を將て吉野十津川没落つゝ迹埋光を包み兼首陽に餓死するとも豈足利に臣たらんやとて往方知なり及びりそが中に正元の累代君父警敵足利義滿を狙撃とて猶も河内に跡を潜め應永五年の春の時候惜ま京師に赴て有一日義滿將軍の參内折士卒に紛て漸近付たりけれ共車を碎く蒼海公の補助在ぬ單身て宿望遂す緯發覺て千變萬化と術と擢く必死刀尖向に前なく矢庭從者

正元京
に人て
戰没の
事諸説
多く元
中九年
五月と
すこゝ
ろに
一説に
憑れる
也

數十名を或ハ砍臥せ痕を肩せしかどその身鐵石にわらざれば大刀折れ勢ひ窮りて竟に戰歿したりける時に年三十五歳武勇を當時に顯して名ハ後世まで赫奕たる義烈に世の人驚き感して密々正元の菩提を吊ふもの多かりけり這年姑摩姫才に二歳母御前ハ河内の人民故右馬允櫻井直忠の女兒也湯淺熱河恩地櫻井山本野上平石の黨ハ皆尾楠氏の所親かれども零落死亡せしもの多く殘るハ畠山に降參して憑しきものなかりけり恁れば楠正元ハ潜びて京師に赴く折大父正成の忠臣なりける隅屋與市が嫡孫に小一郎惟盈と喚做るものありその妻縫殿ハ姑摩姫の妹母にてありければ正元則内室息女に惟盈夫婦と傳けて金剛山の麓の山里森屋村の属村なる八九の尼寺にぞ潜せける抑件の尼寺ハ如意寶珠院と喚做たる地藏菩薩の靈場也當寺の住持智正禪尼ハ櫻井直忠の長女にて正元の内室と著折騰む姉妹なればいと憑しく慰めて方丈の傍ハ分根亭を造らしつ其里を母女の子舎にして町寧に扶持せらる恁りし程に正元ハ復讐の志願時至らざ緯立地ハ發覺れて竟に戰死の爲体はやく河内へ聞えしかば正元の内室ハ豫覺期のとながら又今さらに堪がたき哀慟悲泣ハ腸斷離れて竟に身故り給ひけり痛ましきかな姑摩姫ハまだ東西だも辨へざりける年二三才れば比よりぞ孤まなりたま

ひしかば憑ひの伯母の尼御前のみ事問ふもの、櫓の松風臺の猿の聲のみなれども、隅屋小一郎惟盈夫婦の忠誠その祖與市に劣らず、獨子ありける復市を、櫓榎の中より大和へ遣し、由縁のものに養ひして、一たびも見かへらず、只幼き姫うへを守守、外に他事もなし、現那主君われ、這家臣あり、正元京師へ赴く折、軍要金の残れるを、後々までの與にとて、皆惟盈に遞與にければ、惟盈件の金をもて、坊料と倡へ、近頭は莊園を購求めて、姑摩姫の衣食の料とし、又暇ある折々の陳笠を張り、弓弦を作りて、鬻ぎて夫婦の使用と、そこをもて、富にあらねど、寺院の東西と費とをなく、奴婢四五名を役使ふて、耕作を掌らせ、且節儉を旨とすれども、姫うへの與に、費を厭ひで、衣裳調度、尙且の玩弄物までも、よろづ好みに儘しけり、去程は姑摩姫のその性、伶俐かりければ、五六才の時よりして、いまだ學ばで、色葉字をよく讀みもしつゝ、寫とありしを、智正禪尼愛歡ひて、七才の春より、手習し、經文と教給ふに、一トたび聞て、忘るゝとなく、特に讀書を好みつゝ、北畠准後の神皇正統紀の餘も、世々の軍記のさら、世果敢き、冊子物語を、看ても、君臣の得失古今の治乱、勸善懲惡の旨、あるよしを、獨みづから、感悦して、家譜を問ひ、祖訓を仰ぎ、いかで、儒書を、をもよく學びて、智を増ばやと、念じたる、賢才は、やく見れしを、伯母を、尼公のいよく、奇として、

這子と女僧に、做すならば、常麻寺なる中將姫、又陸奥なる如藏尼、もあは、超然たる智識、みあらん、親族通家、忠義の與に、陣歿したるもの、多かり、氏も、縹致も、世に、絶れつゝ、楠氏の女兒に、生れても、世の盛衰といひ、ひながら、城陥り、國亡びては、やく、孤になりしより、我佛門に、身を寓たるも、過世ありての事ならん、今より、かん經の紐を、解して、後住に、做さんと思ひつゝ、連り、讀經を、薦め給へど、姑摩姫の情願、敢て、菩提の道に、あらねば、讀といへども、深く、信せず、字を、覺ると、宗として、一日々々と、送りぬる、嘗も、不平の思ひあり、我身女子、よわなれども、正成卿の曾孫にて、正元朝臣の嫡女也、父祖の忠義を、承嗣て、足利義滿、義持を、一刀也とも、聲を、あらば、死するといふとも、憶な、一といひ、思へども、文學武藝、共に、長師、よ從ふて、年を、累ね、熟得の時、運も、其里、よ至らず、いかにして、本意を、遂ん、わ良師の、われか、しと、願ふ、心、色にも、出さず、年も、稍八さいになりける、應永十一年の春の時、候より、夜なく、臥房を、抜出て、庭に、立つと、半時許、先大和の方、に、朝ひて、後醍醐後村上、兩天皇の、大神靈を、拜み、奉り、次に、當國なる、諸名神を、禱拜、祈請し、又、建水、分の、末社、ある家祖、南木の神と、拜み、亦、河内郡、六萬寺村、岩瀧山、往生院、ある、正行の、墓、正成の、塔も、亦、を、遙拜し、並に、先考、河州、正元、先妣、櫻井、氏の、法號を、唱へて、祈念を、凝せしを、知るもの、絶て、あかり、けり、原るに、金

剛山ハ河内大和ヲ跨りて山中に精舎あり轉法輪寺即是也這寺内に奇石ありその形彫成せる大黒天に似たるもて人喚做て福石とぞ福石よりして東ハ大和西ハ則河内なり役鷺婆塞の開く處弘法大師の造る所大黒堂行者堂辨天祠關伽井あり蓋這山の嶮峻たる深谷地を帶りて崖岸の形を鑿もて穿ち高嶺天に横りて崗樹の勢と刀して削るに似たり然ば煙霞の子細なる泉石の分明なる實に天上の靈奇にして人間の妙絶也こゝをもて元弘建武の擾乱より楠氏嶮阻に據て百萬の東兵を應にし足利將を遣して廻て攻たるも克す千劍破の城趾ハ山の半腹にあり赤阪の城跡ハ水分の上つ方亦是山の半腹にあり下赤阪ハ森屋村の巽のかた東條川の西岸に在り本不見山小根田の故城水分の壘と共に當日楠公勤王の籌策に成れる也這地に楠氏の第趾二ヶ所下赤阪の城門頭と切山村の中にあり又水分村の頭なる山の井といふ地方を楠公誕生之處とす皆是金剛山の麓路也就中建水分の本社の左に祭る所少楠木靈社ハ後醍醐天皇の勅建よて正成の靈を鎮座と楠明神即是也這宅正成の塔正行の墓なほ當國に二三ヶ所あり天定りて人欺かぞ所云死して滅ざるものその忠その義書策に傳ふ征客必馬を駐め行人各衿を潤と千載不易の舊跡となるべかりける夢の跡目今ハ只山林野草ハ鬼柳を發すのみな

べし閉話 休憩又說楠姑摩姫ハ霜天ハ滿る春の宵も風地を拂ふ秋の夜も勤行ひて多く睡らす雨降り雪の積折も外に出檐下に鶴立て遙拜默禱せし程に鳥飛び兎走りてこの年の秋八月十五夜にぞなりにける今宵ハ名におふ清光玉輪去歲にも優ていと愛たし心に掛る雲もなくて樂く月を眺る者ハ詩歌管弦の種々なる興を添るも多からんを外視も草も枯ぬべき寂寥増る山里ハ虫の音さへに物悲しくて亦慰るよしもなき姑摩姫ハ例の如く更闌人の定りて悄悄地に庭に立出て諸神並ハ先靈を伏拜み又拜み果て憶す月を瞻仰れを巽に一朶の白雲あり看間に變化疆りなく宛白練を引くごとく緩舞たるそが中に端然として美態さ一個の神女出現の左右に從ふ仙童女が翳を執り書卷を携て雲を踏つ徐々と俱に庭前降り來つ姑摩姫と相距ると七八歩ハ過ざりけり登時件の神仙女ハ姑摩姫にうち對ひて善哉孝烈尙義の童女はやく大願を發したる至誠天地に感通して神ハ驚き鬼ハ哭く幽冥人間遠きにあらぬぞ人知るとを得ざるのぞ我その孝義を憐む與に今宵みづから影向しつ阿女を教導せんとて也快杖みねと招るハ姑摩姫諫がせ信と視て怪しや和女郎ハ野婆歟亦只魑魅歟妖怪歟神明佛陀ハ凡夫の與に靈應利益ありといへどもよくその形貌を顯はれて凡夫に教給ひしとぞ聞かぞ鳥